

大正十三年一月二十九日(第二種郵便物認可)
昭和五年五月一日發行(毎月一回一日發行)

永樂町人編輯



五月號

【第三十五號】

夏服豫約開始

ポーター、クールテックス

- A ¥ 39.00
- B ¥ 35.00
- C ¥ 29.00

新緑の初夏に卒先

本夏の豫約生地はとて素晴らしい
テックスとポータ、清新にして品位ある
色と柄、皺にならず、飽きが来ない……
スタイルは丁子屋の高級仕立で
申分なし



豫約清規

引受期日 四月二十日より五月二十日迄
出衆期日 御注文後 三週間
御手付金 金五圓申受残金御引替
市川第一町大分店員並上

丁子屋



ルービロポッサ

ASAHI BEER



内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和高麗焼
漢陽高麗編
三和焼

製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同本町二丁目

電本五五四

キリンビール

最古の歴史
最新の設備
最上の品質

清涼飲料

キリンレモン



絶対着色なし

選用御省内宮
社會式株酒麥麟麒

K3



慰安の糧

この香味！
この色澤！
この泡立ち！
グット一杯 うまい
もうまい 陶然とし
て憂さも苦勞も忘れ
明日は又濼測として
活動の舞臺へ

サクラ
ビール

清涼
飲料

ミネラル
サイダー

金剛煎餅
金剛山
金剛羹
金剛饅頭

金剛山產松實花應菓

金剛飴

龜屋商店

京二城本町目

電話二七五
番局四七五

金剛柏子
松の實
炒り

金剛おこし
金剛しるこ

誰でも直ぐ使へる

大谷和文タイプライター

が参りました

○和英 兩用 ○鞆 に入れて携行自由 ○字數二千四百外換自由

朝鮮中央總代理店

京城明治町一

櫻井秀專商店

電本園三〇〇二番



一、一杯の「福迎」にて終日の勞苦を忘る。

二、これを三杯して明日活動の勇氣を得。

三、日々「福迎」を愛

飲すれば、長壽と家庭圓滿とはつゆ疑ふ可らず。

四、幣場新製の「ソツトル」をお勧め申上げます。いかに文句多き酒客でも、これなら「ムーン」と唸らるゝこと確實。

五、「リツトル」は今燎原の火の如く上流社會に争つて愛用せられてゐます。

京城本町電車終點

難波酒造場

電話 本局一四六一番
光化門一四四番

高 級 化 粧 品

金 箱

○巴里製化粧品のみ
が最高最上の化粧品で
はありませぬ。わが國に
も高級化粧品「金箱」が
あります。

○一たび「金箱」をお
用ひ下さい。その色その
香、おのづからに恍惚と
なること請合。これ以上
の家庭和樂の源泉はあ
りませぬ。

○「金箱」は精製して
極少量を市に出します
それ故ドコの店でもあ
るとはいへませぬ。京城
にては三越、丁子屋等第
一流の百貨店にてお求
め下さい。

スプリング

既製品

十二圓より
三十二圓まで

合 服

既製品

十六圓より
三十二圓まで

京城府鐘路一丁目

濱洋服店

電話光化門二四四

祝 發 展

東洋拓殖株式會社

朝鮮土地改良株式會社

朝鮮_{海上}火災保險株式會社

朝鮮鐵道株式會社

朝鮮郵船株式會社

京城株式現物取引市場

京城電氣株式會社

不二興業株式會社

金剛山電氣鐵道_{株式}會社

三井物產株式會社

朝鮮煙草元賣捌會社

五月號目次

ゴルフと平和	總督府外事課	穂積眞六郎氏(二)
偏見	京城女子實業	辻重氏(三)
耽羅漫筆補遺	城大法文庫部	阿部能成氏(四)
春十二唱(俳句)	仁川仲町	吉岡久氏(五)
金剛山	朝鮮商業銀行	朴榮喆氏(六)
この頃のこと	鮮銀仁川支店	岸巖氏(七)
壽命	城大醫學部	大塚藤吉氏(八)
座談余睡	仁川龍亭里	今村綱氏(一〇)
山莊閑話	中央朝鮮協會	桑野健治氏(一一)
春晝隨想	朝鮮鐵道	尾崎敬義氏(一二)
視察者のため	燃料研究所	毛利元良氏(一三)
朝鮮の價值	總督府殖産局	内田鯤五郎氏(一六)
小犬の行衛	木浦府本町	吉田雄次郎氏(一七)
木浦にて(短歌)	辯護士	福田有浩氏(一八)
不思議な事件	總督府内務局	宮崎毅氏(一九)
偶感	中央朝鮮協會	長郷衛二氏(二〇)
品川雜記	北米倉町	角田芳子氏(二二)
河原菴(短歌)	鮮滿開拓會社	中島司氏(二一)
明石將軍外傳	鐘路警察署	橋本豊太郎氏(二三)
正無苦	殖産銀行	加藤康男氏(二五)
京城つれ草	西本願寺別院	守屋德雄氏(二六)
衣換	仁川稅關	小林唯乘氏(二七)
港の關守	三菱鐵道鐵山	堂本貞一氏(二八)
キツネ	京畿道財務部	高橋昇氏(二九)
桐の若幹(短歌)	東京將棋七段	角田廣司氏(三〇)
豫算の行末	遞信局	三木清一氏(三一)
將棋覺え帳	總督府學務局	瀧呂木光治氏(三二)
南歐旅行の一齣	總督府學務局	平尾王午郎氏(三三)
春の宵記	旭町護國寺	神尾弼春氏(三九)
母の禮讚	朝鮮銀行	高橋濱吉氏(四〇)
笑えぬ喜劇	三巴酒造合名	都守泰一氏(四一)
京城近郊歌	大阪朝日支局	長谷井市松氏(四二)
やまねる	京城女子技藝	浦田多喜人氏(四六)
狗ねる	城大豫科	國風會京城支部(四五)
或る疑問	總督府學務局	吉野彦三氏(四七)
禿山禮讚	城大醫學部	今井眞太郎氏(四九)
古山楊州	京城女子技藝	加藤濯覺氏(五〇)
渡辭當時の思出	城大醫學部	井上要二氏(五一)
洪水と星	明治町小唄阪	松井權平氏(五二)
易の新境	朝鮮史編修會	岡村介石氏(五三)
高架梁の囚人	總督府殖産局	瀧野馬熊氏(五四)
藥酒の傳説	朝鮮鑛業會	清水武紀氏(五六)
牛の物語	朝鮮鑛業會	鈴木竹麿氏(五七)
堀出物語	京城將棋六段	德野眞士氏(五八)
將棋終盤の話	京城將棋六段	辻繁之助氏(五九)
ひと		永樂町人(六一)

ゴルフと平和

穂積眞六郎

(總督府外事課)

ゴルフアーに謂はせるとゴルフ程平和な運動はないのだ層です。其理由は皆さん既に充分ゴルフアーたる御友達から御承知のことと存じますが、第一健康によく、老人や女にも出来、他人を技を奪つて之に乗ずると云ふ様な事がないから、極めて紳士的で従つてなごやかな友情が其間に泉の如く湧いてくる。そして……云々と謂ふ風に其の効果も亦泉の如く盡きない。若し出来得ればエドワード七世の様にピースメーカーの尊稱を奉つてもよい程結構な運動なのだ層です。然しこれ程結構な運動にも半面には缺點がないとも申せません。而かも其の悲劇が他の何よりも最も平和であるべき家庭に生ずるのだから大問題です。假令ゴルフアーである奥さんを『ゴルフをやるから体も健康で御務向にも都合がよい』など、高飛車に其の『時と金』に對する不平を壓つぶし得たにしても、正直なのは小供です。ゴルフアーの中で季候のよくなつてくる時分ひよつとした事から夕べの食卓で『今度の日曜にはゴルフをやめて昌慶苑に行きましょう』と御子さん達から總攻撃をくつた事のない且那様があつたら御目にかゝりたい位なものです。尤も或る時大體鏡を見るに敏な且那様があつてある花の盛りの土曜日に御子さん達からこの御ねだりが出ると、『よろしい』と速刻一同を引つれて昌慶苑に行かれた層です。『君なしろあの人混みだらう、小さいのなんか人の間にはさまつてしまつて花なんぞ見えないやネ。それから後は一度も連れてつてくれと

云はないよ』との話。

こんなに迄苦勞する程面白い運動ならゴルフアーにとつても稀の日曜をそう度々割愛することは無理な注文かも知れませんが、それで禁足の注文をする代りに一つゴルフアーの皆さんに御願があるのです。朝鮮の様に野外の共同娛樂場に乏しい土地柄では皆さんの爲にゴルフリンクが必要であると同様……寧ろそれ以上に女子供の爲に延々と遊べる廣場を持つた公園が必要なのです。京城にしても長い冬から解放された稚ない子供達が昌慶苑一つでは満足出来ない場合が多いのです。それで科學館をもつとよい位置に移し運動場でも附設して子供供の爲に智識と體とを教養する場所にする云ふ様なことも大體意識のあることと想えるのです……皆さんの御力でこう云ふ所が出来ると皆さんの御家庭も今迄より一層なごやかなつて安心してゴルフが出来ますし、第一なせ皆さんにこの計劃を御願するかと云ふと皆さんは平均して大して金持でもなす層(失禮)なのに、今度又廣大なリンクをつくられた層です。そう云ふよい頭と努力と工夫とを子供達の爲にも使つて頂いたらきつとあまり金がかゝらないで立派なそして有能な娛樂場が出来ることを確信するからです。ゴルフの叔父さん方何卒御盡力を願上げます。



T.N

顔面の
持主は、
尾崎敬義
さん、そ
れを失禮
したのは
東京の中
島司氏。自畫自像を催促したら、『その義
は、主婦の存じよりもあるにつき。書くな
ら他人の顔に限る』さうです。

偏見

辻 董 重

(京城女子實業學校)

人は動もすると正鵠を觀察を失つて偏つた見方に陥り易いものである。それが自分の職務大事に考へれば考へる程一層其弊に陥り易い傾向を持つてゐる。大は國家を脊負ふて立つ大臣宰相より小は一人一個の小事業の經營者に至る迄比々皆然りである。其の偏見が單に一人一個の生涯を誤るのみでなく實に國家社會を荼毒すること大なるものがある。現在の社會では専門分業といつてあらゆるものを分解的に専門的に研究する。文化の進展上誠に結構なことではあるが一方に於ては常にそれを總合せすることを考へねばならぬ。社會萬般の生きた活動は個々の綜合統一された有機的活動である。分解専門は其の有機的活動の過程でなくてはならぬ。

ぶさかではないが、まだまだ研究されない或は又到底研究し盡されない宇宙自然の偉大なる方あることを忘れてはならない。

殊に偉大なるべき人物を作る上に於て動もすると科學萬能の弊に陥つたり自己を基準とした偏見に捉はれて尊き個性を没却したり崇高なる自然の感化教訓を度外視することが世の知識階級と稱する者の中に少なくないことを甚だ以て遺憾とする。然申す私自身も時に其の自己に捉はれ偏見に墮することを自覺して衷心慚怍たるものがある。

常に高所遠所に立つて公平の立場を維持するといふことは言ひ易いことであるが、中々行ひ難いことである。

現今政治家、學者、實業家、教育家が果して此等の點に於て正當な判斷を下し常に大局から觀て公平な措置を爲して居るであらうか御本人は爲して居ると考へながら常に偏見に捉はれて居るではあるまいか。早い話が教育者が教育に熱中するの餘り却て兒童生徒を自然といふ大きな教育訓練の道場より懸け離れしめたり、お醫者さんが衛生看護の度を過して却て弱い子供を作つたりする例は少なくない。

京城雜筆が京城に於ける知識階級の御方々の漫談雜筆を集録した上品な讀物であることになつて利は滿腔の贅意を表すると共に其の内容が各専門の權威者でありながら其の専門的研究の洗練され、格化された基礎の上に立つて常に専門臭くない人情味タップリの記事によつて埋められてあることを非常に嬉しく思ふ。常に捉はれ勝ちな偏見をかなくすりすて、ニューモアに富み人情味タップリの斯る讀物を手にし且つ投稿さるゝ丈の餘裕は誰しも力めて欲しいことと思ふ。其れがやがて偏見に對する反省ともなり濕ひある人生ともならう。

吾々は常に専門的研究の學問の偉大さを認むる點に於て決してや

鰻井

五拾錢

お壽司

定評あり
先づ御試
食願上候

本町五丁目

阿波文

(電本一八三七)

◇町内風聞記

北 漢 山 人

○三中井の前店主中江富十郎氏が、京都本店のおん大となつて、京城を引揚げてしまつたことは、知己一同から、女に惜まれてゐる

○同氏は、近江商人の良いとこそを、多分に有つた人で、眼先も見え、度胸もあり、現在の大三中(朝鮮方面)を、礎石から築き上げた人である。シカモ徹頭徹尾商人の本領を守り、名譽職とか、公職とかいふものには、一顧すらも與へなかつた。

○然らば、商賣以外は、何も判らないかといふのに、快してさうではない。先づ酒中の趣を解し、謡曲もやれば、生花もする。繪畫の方では、高木背水、三戸萬象などいふ人々は、非常に助けられてゐる。

○酒も好い酒であつたが、人物も實に他に厚い人であつた。

○新店主の準五郎氏は、東京支店長として、大にやつた人であり、頭も、知識も、ズット新しい人であるといふから、更に陣容を一新することであらう。

耽羅漫筆補遺

安倍能成

(城大法文學部)

雜誌改造にかいた私の『耽羅漫筆』は固より文字通りの漫筆であつて學問的精確を期するものではないが、然し誤謬を天下に廣げることだけは注意して避けたいと思つて居た。所が印刷になつてから見るとそこに一つの大きな訛謬の違があることを氣付いた。早速正誤はしておいたが、間違つたことはあらゆる機會にいつておく方がよいと思ひ、偶々寄稿兼購讀を強ひられた『京城雜筆』を利用することにした。

濟州島の殆ど全骨格を形成して居る漢峯山には四百ばかりの副成火山があつて、乳房といはず、腹部といはず、足腰といはず、母なる漢峯山つきまつて居る。この副成火山の數の多いことが地質學上非常に珍しい現象だと或る科學者から聞いたが、この副成火山のことを濟州の方言で『マル』といふと書いたのが、大した記憶の違ひで、それは『オルム』といふのであつた。何故これを『オルム』と呼ぶかといふ理由が分らないと聞いたので、私はそれは何か『子』といふことに關係のある詞ではないかといふ説を、戯に提出して見た。それは此等の副成火山を見た時直觀的に漢峯さんの子供だなあと感じたからであつて固より外の理由はない。『マル』は朝鮮語『馬』であり、『オルム』は朝鮮語『氷』である。山のことを

『氷』といふのはそれを『馬』と呼ぶより縁遠い様にも考へられるけれども後から當時濟州島に同行した加藤灌覺氏が土地の人に就て聞かれた話といふのをきいて見ると、此等の山を『オルム』と呼ぶ理由は大体下の如きものであるといふ。

此等の副成火山の火口に積つた雪が氷となる、これ等の山は氷を切出す所である、そこからオルム(氷)といふ名が與へられたのであるといふのが即ちそれである。右の理由によつてオルムと呼ばれるのは皆高地にあるものばかりで海岸近い比較的低位にあるものは朝鮮の外の地方一般と同じく峰又は山と呼ばれて居るさうである。『オルム』には『岳』といふ漢字があてはめてあるが、中には『岳』の字の音であらう『アク』と讀ませて居るものもある。試みに五萬分一の地圖を取つて濟州島の全体を點検して見ると、岳と山や峰との區別は其程嚴密には上の通りになつて居ないが、大体に於て高地部にある標高の比較的多いのは岳と呼ばれ、海岸や平地にあるものは山又は峰と呼ばれるのが多い。海岸地方にも岳と呼ばれるものがあるが、それは殆ど皆『オルム』と讀ませずして『アク』と讀ませて居る。かういふ點から見ると土地の人の説は大体首肯せられる様に思はれる。

【四】

濟州島の韻詠には『石墻板屋民僻に居る』といふ句がある。石墻は濟州島の風景を形造る重要な人工物の一つであることいふまでもない。『東國輿地勝覽』にも『石を聚めて垣を築く』とかいて居るが、その所に『東文鑑』といふ書物を引いて『地亂石多く乾燥す、もと水田なし、唯雜麥豆粟之に生ず、その田古は鹽畔なし、強暴の家日に以て鹽食す、百姓之に苦む金坵判官たり、民の疾苦を問ひ、石を聚め垣を築きて界と爲す、民多く之を便とす』とある。我々の瞥見から得た直觀は、この石垣を以て、風を防ぐ爲と、牛馬の侵入を防ぐ爲に作られたものと斷じて居たが、これによるとそれはやはり昔からやかましい所有欲の争から來たものであるらしい。然しこの説が果して眞にこの石垣の最初の起原を示したものと見るべきか初め風や、牛馬を防ぐ爲の石垣がかういふ手段に轉用せられ、若しくは兼用せられたのであつて、その眞の起原は却て風若くは牛馬にあるのではないか、といふ疑問を提出する餘地は十分にあると思ふ。漢峯山の頂近くにある『あららぎ』や眞柏は、風雨に打たれ、霜雪に痛めつけられて、老木でありながらひねこびて小さく、盆栽には持つて來い、の姿態を有するものが多く、それは山に幾日も露營して採集せられ、京城あたりに送き出されて、随分な高價を以て賣られ、貴人や富豪の座敷や應接間を飾ることになるらしい。此等の木に特殊の風趣があること、又或る精練された趣味がかういふものを要求することに對して異議を提出しようとは思はない。けれどもかういふ盆栽の意義は要するに大部

分個人的なものである。所が昔か

の意識しない程多分な社會的意義

る様な共有物、しかもその共有感

分個人的なものである。所が昔から一町毎に街道に植えられたといふ稷の大樹老木に至つては、岩石のとげとげした乾いた道を行く旅人の休憩の爲に、或は海を行く漁船の目標として、或は殺風景な風物を和げる材料として、多くの入

◇うわさ雑記

漢 江 漁 郎

○辯護士の切山さんは、去る三月限りこの京城を引揚げてしまつた。

○今後は、文部省社會教育局の屬託となつて、餘生をその方面に盡すことである。

○世間では、『切山さんは流行つたから、少くも十萬や、十五萬は、残つてるだらう』といひ、或ひは、『最近勝訴した森勝事件だけでも、七八萬は、とつたらう』などと噂するけれど、性來廉潔な同氏は、在外金も溜まつて居らず、そんなポロイ金は、もらつても居らぬさうな。

○氏と家庭的に懇意な、或る消息通の話に依ると、『何、金なんてありますものか。——ありさうでないのが金。なささうであるのが借金——切山さんも、やつと残るのは、三萬圓で賣れさうなアノ黄金町の住宅だけです』

○或ひは、さうかも知れぬ。そして、コ、に、アノ人の美しい一面が、今更らのやうに思ひ出される

○或る人が、前の消防署長小熊さんに、防火のことを執筆して貰ひ、それを出版して、少々金を儲けた。

の意識しない程多分な社會的意義を有して居る。禿山に若木を植えると共にかういふ老木の保存は必要である。實に樹木はそれが喬木となる程、小にしては村里大にしては縣、道若しくは一國の人々がそれを有することを誇とし喜とす

る様な共有物、しかもその共有感に平和があつて争闘のない様な共有物となる。社會教育とか相互扶助とかをいふ人は、かういふことに留意する必要がなくてはなからぬ。(昭和五年四月十三日)

春十二唱

吉岡富士堂

(仁川 仲町)

椿咲くや山重りて晝の月
太鼓とぼく叩くは寺か春の雨
松の社へ朝日はうれし畑を打つ
散るぞ散るぞ櫻は汽車をはなれたり
雀の子に雨ふりやます暮るゝなり
夕燒のだんく畑や下萌ゆる
粧ひの女にのびし蕨かな
港の月小さく揺れて木の芽かな
麥の穂に白き埃りの暮れかねつ
春淺き寺にゐて鐘鳴らしけり
新入學の小學生
袴長き兒等に麥の穂ゆるゝなり

○御禮をせずばならないといふので五十圓の金を包み、それをうやうやしく小熊さんに献呈した。

○スルト先生、アノ顔を、アノ眼を、クシヨクさせて、『これア妙だ、これア實に不思議なことだ。そもく防火といふことは、

當り前なら私の方から、費用を出して出版してもらつて然るべきことだ。それをアンタが私に代つて

やつてくれた。御禮は、私の方から出すべきだ。執筆などは、當然のことだ。どうも勘違ひされちやア困るナリ』

○アノ人は、何事に依らず、斯うして一切禮物を取らなかつた。そして年中ビイ／＼してゐた。

○現にムスコの一人を、消防手として、我志を繼がせてゐるなどアノ人の一面を窺ふべきであらう

金剛山

朴榮喆

(朝鮮商業銀行)

天下の奇勝であり世界的公園とも云うべき金剛山は、實に國寶として大に世界へ紹介すべきであると思ふ。近來外國の人士が盛んに金剛山に憧れて探勝に出掛けるが實際の處に云はしても其の雄偉秀麗なる景色に讚嘆の聲を發せざる者はない。只遺憾なことに觀覽者に對する設備が極めて不十分である爲めに其名聲の發揚が鈍ぶつて來るのである。一日も早く之を國營公園として設備を施し世界の觀覽客を吸收する必要がある。瑞西の如き如何なる峻嶺絶壁にもケブルで自由昇降する事が出來、旅館の設備が立派に出來て居れば世界の遊覽客が集つて來て莫大なる散財をするのである。端西は國は小いが殆んど景色で喰つて居るところから見れば朝鮮の金剛山は最も宜い財源である事を忘れてはならぬ。金剛山電氣會社の經營する電鐵が長安寺を中心として内外金剛山を自由に周遊する様に計劃して居るらしいが之が竣工と同時にゴルフイングも、野球グラウンドも、テニスコートも、水泳もと云う風に設備の總てが出來れば現代の世界的一大樂園が造り出されるのである。朝鮮漫遊客が金剛山を中心として慶州の新羅館、平壤の樂浪館、扶餘の百濟館で朝鮮古來の傳統的な文化を充分研究する事が出来る筈にすることは尤も良い工夫と思ふ。

朝鮮總督府では金剛山保勝會委員會を組織した事及び前滿鐵理事として金剛山に對し多大なる貢獻をせられた安藤又三郎氏が今回金剛山鐵道に入社せられたるは將來金剛山設備の爲め甚だ喜ばしい次第である。

見聞話 江湖百話

三木一彦

○高等法院判事の原正鼎さん……一日ダシヌケに山田新一氏の下宿先を訪ふ。

○しかも自動車で乗りつけたので

宿の主婦は、ビックリ仰天する。

○おマケに、高等法院判事とあつては、家を擧げて頼動せざるを得ぬ。

○第一そんなえらい人に出す座布團からして御座りませぬ。

○さて、山田氏の部屋に通つた原さん、悠々として製作物を鑑賞。『ぢや僕はこれを買つて行きませう』

○ところが、それは、フランスの某會に入選入賞した、山田氏としては、一生の紀念物。『イヤ、そればかりは……』、いはせも果てず原さん。『何、決して心配は入らぬ。入る時には、あなたが、預り證さへ持つて來れば、いつでも無料でお貸しする何、寛大なものさ。イヤこれ飛んだお騒がせをして……失敬々々』

○大風に吹かれたあとのボブラのやうな顔をして、山田さん、『ホーツ……』

○朝鮮に縁故の深い金谷參謀總長は、今年東京で、銀婚式をやるさうです。

○ところで、閣下の貞淑なる奥様は、結婚早々から閣下の大酒を心配し、口にくそ出さね、閣下を責任ある地位につかせば、自然自軍するものと思ひ込み、極力内助にいそしんだ。が、閣下は、出世しても、酒をやめぬ。ソコで、奥様は、もう少し、唯だお酒をやめさせたさに、努力勉勵する中、とうとう軍人の最高榮職たる今の地位に到着した……。

○『閣下の志業は完成した。だが、夫人の美しい念願の成就するのは、いつの日だらう』、後進の人達をよろには、笑み交してゐる。

剛山設備の爲め甚だ喜ばしい次第である。

てゐる。

此の頃のこゝと

岸

巖

(朝鮮銀行)

第一艦隊の將校歓迎會の席で、お隣りに坐つて居た秋山さんが、ふと「此の頃の艦長さん達は皆若いですね」とさゝやいた。その時は小生も別段異議がなく、『さうでね』と明確に賛意を表したものであるが、さて今になつて考へて見るとどうも少し變だ。

そのさゝやきを漏らすまで、秋山さんは卓を隔てて相對した艦長さん達と航空母艦に就て論じたり齋藤總督を謳歌したり、例に依つて滑らかな應對振りを示しては居たが、ついで相手の年齢を質した模様はなく、相手は相手で、廣く世間を見て來たもの馴れた態度うけ答へもし、頭、顔、髯などのたゞずまいにも皆相應の年配が現はれて居た。のみならず取交した名刺に據ると、艦長各位は皆大佐であつて、矢張り、兵學校を卒へて小尉少尉から中尉と云ふ風に經上つたものに相違なく、而かも各位が經上つて來た過去に於て、特に兵學校の年限が短かつたり、中尉から大佐に一躍する慣例があつたりしたことも聞かない。つまり、打見たところから推しても、理屈から考へても、秋山さんをして『皆若い』と斷定せしむる理由は甚だ乏しいのである。然るに秋山さんは毫も論議の餘地なきものの如くあつさり片付けてしまひ、小生も亦直ちに同感の意を表してしまつたのは、どうも少し變の樣だ。(斷

つて置くが、小生が秋山さんに對して心にもない追従を云ふ必要は微塵もない)

しかし諒つて思ふに、秋山さんの頭に最初に映つた艦長さんは恐らく日清戰爭の坂本少佐あたりであつて當時紅顔の少年たりし秋山さんにとつて勇ましい『小父さん』であつたであらう。それから十年程經つた日露戰爭の風流艦長八代大佐にしても三十になるかならずの秋山さんにとつては大先輩に違ひなかつたのであらう。然るに現在の秋山さんは、テニスをやつたり水泳をやつたりして大に若がつては居るものの、もう息子さんが高等學校に行くやうになり、嘗つて呉さんが某醫學博士から『年とつてからのテニスは餘り感心しない』と聞いて、其の『若がり』を諫止せんとした程なのである。だから、卓を隔てて相對した現在の艦長さん達が一向大先輩でなく況んや毫も『小父さん』でないことが、頭の中の『艦長さん』と少々勝手が違ふのも無理がなく、遂に『皆若いですね』のさゝやきとなつて漏れたのも、誠に以て、尤もな次第なのである。

がないが、四十になれば相當たる管の貯金が、一向たまる様子がないので見ると、四十になつた管がなく、現にこないだも道行く人から尋常六年の子供と兄弟に間違へられた程なのだ。それなのに斯かる不覺を演じたのは、あの時の秋山さんの言葉が、突墜に人を欺く英雄的魅力を含んで居た爲であらう。

かく云へば、或は小生が此の頃電燈の下で新聞を讀むのに、めがねを用ゐるのを指摘する人があるかも知れない。しかしあれは、永年我慢して居た同僚の伊東さんが此の頃とう／＼降参してめがね屋を呼んだのを見て、小生の眼も同情念柔をやる傾向があるのを慮れて、社會政策を採用したに過ぎないことを釋明して置く。

◇市場風聞記

漢江漁郎

○米界の飛將軍淺野三郎氏も近來は、餘り上景氣でないといふ評がある。

○昨年の夏頃、不二興業を向ふに廻して、一大米戦をやつた。そして脆くも一敗地に塗まれた。

○コ、で、淺野さんは、一寸一呼吸入れるべきだつたらう。それをドウ考へたものか。今度は、不二の尻について廻つて、もう一合戦やつた。そしてコ、でまた、一大敗戦をした。

○モトより豪氣の人間だから、少しもヒルまず。今も勇敢にやつてはゐるが、斯界では、『ヤハリ幸運は、長く續かぬものだ』と評されてゐる。

壽命

大塚 藤吉

(城大醫學部生理學教室)

生者必滅、會者定離とは佛敎者流に昔から教へられて居るが、我々凡俗には常に死は厭ふべきものであると言ふ觀念がつきまとふ。然しながら何れの瞬間を以て死を決定するかと言ふことは深く考ふれば極めて困難な問題である。

又は初生兒の難産其他で死んだ者十二人に就て、心臓の動作電流を直接に検査する目的で死後二十分乃至四十分してから、摘出した心臓は人工灌流を施せばよく働き得ることを實驗して居る。

言ふ事はあり得る様である。例へば米國南北戦争に勇名を擧げたり將軍の母は、一度病氣のために死じたと思はれて葬式の時に棺側に立ちし僧侶が棺の中に物音が聴へたと言ふので、さては不思議な事と墓地に到着の上で一同が棺を開けたら蘇生して居て、其れから突然葬式を止めて養生した所が、再び丈夫になつて十年間生存し、其の間に懐妊して生れた子が將軍であつたと書いてある。其の事の眞偽は私は知らぬが、こんな事はあるだらうと私考へる兎に角死と言ふものゝ判定は難かしい事である。

『死は決して突然に發現するものにあらずして生より徐々に移行するものである』とは現代の成書の動、殊に心臓の動作の停止した時期を標準として死と認めるのであるが、此は決して生活体の眞の死を意味するものではなくて、斯の如き時期に於て體中の或る細胞群は尙ほ永く生存し得るものである此に對して又既に屢々病床に臥す間に於て或る細胞群は死を起すもので、生と死との間には或る一つの時期を劃する事は困難で、死は生から極めて徐々に移行するものに他ならない。例へば特設性の筋運動は停止して動物は靜止し、体は弛緩してからも、尙ほ筋肉自身は外來の適當な刺激を與へてやれば、數時間は此に應答して運動を起す場合がある。

此等の事實は人間又は動物が一個體としては死と判決されても個々の臓器は死んで居ない、即ち未だ動物の完全な死と言ふ事は出來ない事を意味するものである。一般に所謂死と認められてから、數時間を経過すれば死固と名づけて體が硬くなるが、更に或る一定の時間を経て再び死固が緩解して柔らかくなる。此の時に於て初めて筋肉は完全に死んだと確實に言ひ得るものであるが、然しながら其れでも未だ全身の完全なる死とは言ひ難いのである。即ち神經系統、心臓、又は骨格筋が死滅して生活現象を示さないだけであつて他の細胞群例へば氣管及び氣管枝の内面にある微細な毛を持つた細胞は未だ動いて居る事がある。

話が理屈ばかりきたから今度は題目に掲げた様な壽命の事を少し考へて見る。

一 体人間は何年位生を得るものであるか、古今東西何人も此の疑問に到達しない者はあるまい。

後宮に美姬三千人を集めて歸長かれと祈つた樂の始皇帝も、一意歐洲までも攻略して尙ほ領土の狭きを嘆じた成吉思汗も、又最近では隻脚で百二十五歳までと頑張つた故大隈侯も、矢張り生者必滅の法則は如何ともする事が出来なかつた。然らば吾々に與へられた壽命は何年なるか。

古の武内宿禰は三百年の壽命を保ち數代の帝に奉仕したと傳へられ、又昨年夏頃の新開紙には支那四川省の生れにて李珍元と言ふ二百五十二歳の男が居り、妻をあとする事既に廿三回、食慾も常人に負けず歩行も平氣であると言ふ記事を見たが、吾々此記事を其儘に信ずる事は出來ない。四川省の片田舎で昔から戸籍が若しあつたとしても、如何しても吾々には信じ

一九一八年に獨逸國キール大學でポーデン氏等の研究によれば、兎の頸動脈を切斷して出血死に至らしめて後に四十分乃至一時間経てから胸部を開いて心臓を摘出し其れに人工藥養を與ふれば再び心臓は活潑に収縮し、又人間の胎兒

實際上に於ても醫者殿が死の判決を與へてからでも、時々それが間違ふて居て、未だ本當に死んで居ないで再び生活現象を現はしたと

られない。垂涎三千丈とか瀑布九天より落下すと言ふ式の支那一流の形容は李珍元老人の場合に於て

れたが全國で百歳以上が二百六十三人、八十歳以上が四十一萬七千六百四十人であつたと言ふ、此に

即ち心臓血管系と腎臓との健康なる事が高齢者に必須の條件の様に考へられると説いて居る、尙ほ高

てから胸部を開いて心臓を摘出し
其れに人工榮養を與ふれば再び心
臓は活潑に収縮し、又人間の胎兒

を與へてからでも、時々それが間
違ふて居て、未だ本當に死んで居
ないで再び生活現象を現はしたと

信する事は出来ない。四川省の片
田舎で昔から戸籍が若しあつたと
しても、如何しても吾々には信じ

られない。垂涎三千丈とか瀑布九
天より落下すと云ふ式の支那一流
の形容は李珍元老人の場合に於て
も用ひられたのではあるまいか。

現今の生物學で動物の天壽即ち
最も合理的な生活を営む際に生存
し得る最大限は通常其個体の精神
的及肉體的發育の完成する迄の年
限の五倍であると信せられて居る
例へば完全に一匹前として身體も
精神も發達の頂點に達するに四十
年を要する象君は、二百年の壽命
を有し、馬は發育の頂點を五歳と
して廿五年の壽命を認められ、犬
は三年強で立派な一匹前となるか
ら十六七年の天壽と唱へられる。

而して吾々人間は精神及び身體の
發育の頂點を滿二十四歳と見れば
最も理想的に生活する際には滿百
二十歳までの壽命を保ち得るもの
と考へられて居る。故大隈侯の百
二十五歳説は決して出鱈目ではな
いのであつて、或はこんな所から
考へられたのではあるまいか。侯
の場合に於ては他に如何に理想的
に生活を営むとしても既に隻脚な
ることが完全なる條件を滿すとは
言へないので理想的な天壽を保つ
に困難であつたのかも知れない。

大正十四年先帝陛下の御銀婚式
に九十歳以上の高齢者に養老林並
びに御酒肴料を下賜せられたが、
其の時の調査によれば内地だけで
九十歳以上の人は平均一萬人に就
て三人半餘の割合で全體で二萬餘
人あつた。其の中で百十歳及び其
れ以上の人が十三人で、最高は百
十四歳の女二人、百十三歳は三人
で男二、女一、百十二歳は女一人
百十一歳は女だけ四人、百十才は
男一人と女二人であつた。
又昭和の御大典に際しては八十
歳以上の高齢者は同様に厚遇せら

れたが全國で百歳以上が二百六十
三人、八十歳以上は四十一萬七千
六百四十人であつたと言ふ、此に
よりて見れば我邦に於ても適當に
生活すれば百十四歳、或は尙其れ
以上に生存し得る事は確實であつ
て、吾等の考ふる人生百二十年は
人間に於ても立派に適用し得るも
のではあるまいか。然らば七十歳
を以て古稀と稱して隱居する様な
事は愚の至りであつて漸く壽命の
半分の坂を少々過ぎただけの働き
盛りであらねばならない。又大學
には停年制があつて教授は滿六十
歳で隱退するが、此れも漸く餘半
に達した壯者である。

然らば如何にすれば最も理想的
に長命し得るものかと折返し提
出せらるべき質問であらうが、此
は申々難かしい事で、吾々が大學
の研究室で毎日コック、勉強して
居る目的はつまり其の間に對する
答を知らむがために他ならない。
クツチンスキー氏がオムスクに
於て西比利亞遊牧の民でキルギス
族の高齡者百歳以上の者が急性赤
痢で死亡した者を解剖した所見に
よれば、此等の長壽者に於ては多
くの腺や腦は著しく萎縮して居る
が、腎臓の犯されて居る事が非常
に少く、又本當の動脈硬化が無い

即ち心臓血管系と腎臓との健康な
る事が高齡者に必須の條件の様に
考へられると説いて居る、尙は高
齡を保つ條件として生活狀態、特
に食物の關係に就て此等の人々
は食物が乏しく、時には絶食した
りして居るものであると述べて居
る。

此れは前にクツチンデン及びフ
レンチアー氏等の説く所と一致し
て非常に面白い。即ち氏等は多
食の害を極力主張するものであつ
て、元來人間は其の味覺に満足を
與へむがために生活維持に必要以
上なる食物を攝取して無意義に消
化器を酷使するの弊を唱へ、更に
人間は元來草食動物に屬するもの
で、蛋白質は或る分量だけは必要
であるが、此か分解して排泄され
る時には酷く腎臓を刺戟するもの
であるから、無用に肉類を多食し
て消化器及び排泄器の負擔を過重
ならしむるは健康を保つ所以でな
い事を力説し、印度の奥やコーカ
シアの高原地帯に住む人々は物資
供給の不便と信仰のために小食で
而も素食をして居るが長生者が多
く殊に腎臓の丈夫な人が多くと述
べて居る。

此の邊は文明のみを禮讚する都
會人士に一考の要なきか。

御 願

一、本誌への御寄稿は、勝手ながら毎
月十日頃までに御願ひしたく存じます
お早いほど編輯子はよい體裁を上風す
ることが出来ます(校正も四度位やれ
ます)
二、御寄稿の序に、是非ハナシ種一つ
二つ御書き添へ(別紙へ)願ひたいの
です。これは箇條書き、筋書きだけで
もよろしい。どうも新鮮なのがなくて
我ながら退屈いたします。

座談余唾

今村 螺 炎

第一幕

ある日の宵の事である、本町の入り口、郵便局前の道路に、若き男女が、しやがみ乍ら、何かやつて居る、新世帯の夫婦らしい。男の方がステッキの先で、大地へ何か書いては、女と話し合つて居るのだ。

見るとは無しに、聞くとは無しに、傍へから觀察すれば、男はステッキでアラビヤ數字を横に書いて、平田とか三井とか言つて、女と相談して居る。

要件は、買物の相談である、豫じめ所要の物品と懐中の金ネとのバランスを合はせて居るのであつた。

何んとは無しに、此夫婦が氣に入つた。

第二幕

▲下もさまの世相も興や宵の春百二十圓也……五十圓也……七十圓也……二十五圓也。

此れは、龍山某町の、某る小さい看屋から毎晩、近所台壁に、聞へて来る、賣上勘定の聲である。

近所の人達は、あの看屋は店に似合はぬ大きな商ひを仕て居ると感心したり、不審したり仕て居た。

ある日、其の近所の人が、看屋に行つて難談の末、

「看屋さん、アナタ所は、此の不景氣に、随分とよい商ひがある

と見へ、毎晩の賣上げ勘定は、大したものですよネ」

と言ふと、看屋其處へ帖面を擡げて見せた、其の記帳には、錢位は一つも無い。

「此の通りですよ、ケチ臭くては糺にさわりますから、帳面は皆百倍にしてあります、此の方が景氣がよくてネ」

と無邪氣な笑顔を見せた。

▲烏賊の荷の墨仰山に汚し來る

第三幕

小生の近處に、六十何歳かの獨身のダイサンが居た。

五六年前に、何處から流れ込んだとも知れず、五十近い丸鬚女がズル／＼ベツタリに這入り込んだ此の女、仲居も仕たり、何も仕たりして、随分世をアワズレ來つた風來者である。

ショツ中ダイサンと喧嘩を仕て居たが、又仲の睦しい時もあつた此の女、花が大好きで、毎日同類を寄せては、花を引いて居たが勝つた時には、ダイサンの大好きの酒を著つて、二人で飲んで、破れ三味線を彈いて、ハシヤイデ居た。

五年目に此のバアサンが、ボツタリと死んだ。

喧嘩の相手を失つた、ダイサンは淋しい日が續いた。

何を思つたか、ある夕べ、ホロ酔喜嫌のダイサンは、壁からバア

サンが唯一の遺産である、彼の破れ三味線を下ろして、調子も何も構はずに、唯無茶苦茶にジャンジヤラ／＼と掻き鳴らし、

唄は下手で、エも泣くよりリました……

とダミ聲を張上げて唄つて居た。

近所のオカミサンが覗いて見て、「ダイサン、今日はエライ陽氣だね」と言ふと、「ナニ昨晚ネーアレが此の三味線を取りに來た夢を見たでネ、此れに心が残つて居ると思ふて、彈いてやつて居る處だ」と言つて、薄暗い座敷の棚の方を見上げた。

其所には、紙の位牌が、蠟燭の火に、微かに揺れて居た。

▲抜けし齒の淋しさに又爐を蒸ぐ。

第四幕

トモ怪しい……コレハ的ツキリ……間違無、……よい獲物だ。

と、斯ふ胸の裡で考へた、密行巡查は、くら闇の中から、身動きを静つめ、氣合を落付け、五間計りの先方を見つめて居る、夫れは丁度猫が風をねらつて居る罫に。

巡查の瞞へは、一人の若い男がある家の出格子の所へビツタリと守宮の様に身をすり付けて、内の様子を窺つて居るのが映つて居た。明治町の佛蘭西教會の下の町は深夜の淋しさが漂ふて居る。若者は一軒一軒、前の如くして行き、某の家に至つた時に、内から何か洩れ来る異様の感じを受取ると共に、急に出窓の處へ立ち登らんと仕た。

此時追尾し來つた、私服巡查は猛然と躍りかゝつて格闘が初まつた。

南山町まで遁げ延び、抵抗に使

つたナイフもぎ取られて、本署に引られた。

學生であつた。

無論窃盜では無かつた。

▲つかれ描着を湯を浴びて戻り

「看屋さん、アナタ所は、此の
不景氣に、随分とよい商ひがある
は淋しい日が續いた。
何を思つたか、ある夕べ、ホロ
酔客のヂイサンは、壁からバア

つたナイフもぎ取られて、本署
に引立られた。
此男は學生であつた、エトマニ
ヤと言へば十分に其の言葉の判る

學生であつた。
無論物盗では無かつた。
▲浮かれ猫煮を湯を浴びて戻り
けり

猛然と躍りかゝつて格闘が初まつ
た。
南山町まで運げ延び、抵抗に使

◆ 十字路漫話

北 漢 山 人

○日之出小學校の先生達は、つ
くく悲哀を感じるといふ評判が
ある。

○ワケを聞いて見ると、アノ邊
にある生徒の父兄は、大抵官邊の
最もえらい人達で、子供が出来が
悪いと、『ネーあなたや、一寸受
持を呼んで聞いて見ませう。ウチ
の坊やに限つて、こんなに出来な
い筈はないワ』、『ウ、さうぢ
やのう』

○そこで、電話で、半命令的に
呼びつけられる。『××先生、實
に困りますネ』と、まッ甲から一
本。つゞいて逆説教が始まる。洋
服の膝も崩せず。『ハッ、ハッ、
それがどうも……ハッ、ハッ』

○一切抗辯は容されぬ。
○うみつけた責任は考へず。そ
だてのよしあしは棚に上げ、總て
の責を學校と受持に押しつけるの
だから、『ネー皆さん、ツク／＼
小學校員の悲哀を感じますよ』

○洋畫家の多田毅三さん……或
る日米倉町を散歩してゐると、行
倒れの死人がある。

○何となく心を引かれて、立ち
とまつて見てみると、ソコへ人夫
が箱を擔いで来て、二人懸りで、
死体を收容する。スルト兩手と脚
とが突ツ張つて、鳥渡小さい箱に
はおさまらぬ。ところが、人夫は
舌打ち一ツ……片足を擧げたと見
るまに、ポキン／＼と長い奴をハ
ッ折り、さつさと箱におさめて持
つて行く。

○多田氏茫然！あとを見送り、
『何んと簡単なものぢやのう』

山莊閑話

桑野健治
(仁川龍亭里)

私に今年八十一になる祖母がある。老いて益々頑健
で朝から晩まで三ツになる兒の守りをして居て呉れる
その兒は私の長男だから祖母の爲めには曾孫といふわ
けである。

御隠居さまはお達者で結構ですネと、よく世間の人
が云つてくれる。お蔭さまで達者ですと答へて置くが
何といつても年付争はれぬ。老いて兒に還るとでも云
ふか、とほけたところが出来て、それがこの頃では一
種の飄逸さを伴ふやうになつた。

この間も私が下山しやうとすると子供が後追ひをし
て困るので、宅を出るまでその邊を廻つて來やうかと
祖母は曾孫の手を曳いて出かけた。もう大概よい時分
だらうから今の内と私は頃合をはかつて、こつそりと
出かけて仕舞つた。が、行々往來から鮮人家屋のもの
の蔭を見ると、祖母が曾孫と共にしやがむで居た。勿論
私の姿が目にとまらぬやうにといふ積りに違ひないが
往來に背中を向けて居るのは祖母ばかりで、子供はイ
が栗頭を擡げて四邊を見廻して居る。私はおかしさを
忍んで子供に見付けられぬ内と急ぎ足で通りぬけて仕
舞つた。

その時、心の裡に浮むたのは、明瞭して尻かくさず
といふ言葉であつた。然し、自分だけ向ふをむいてさ
え居れば見えぬものと極めてすまして居るその情景は
とても邪氣のない、自然な、飄逸味に富むたもので、
おのずから微笑が唇頭に込みあげて來た。

(三月廿六日夜於紫明山莊)

春書隨想

尾崎敬義

(中央朝鮮協會)

倫敦軍縮會議に於ける米國の態度は例に依り傍若無人である。痛快とも言へば言へない事もない。さるにても日米は所詮戦ふべきか否日本人の理性も、米國人の理性も、到底戦争を許さないであらう兩國の政治家も、軍人も、實業家も、其の理性より考へて兩國間に戦争ありとは斷じて思ふまい。殊に經濟を基調とする現時の政治外交は兩國間の戦争を恐るゝこと蛇蝎の如きであらう。生絲商や棉花商やフオードやモルガンは日米戦争は地球と太陽との戦争の如く不可能のものであると思ふて居るであらう。併し、併し乍ら、いま日本人の感情は何うであらうか。一つ米國を心ゆく計り打ちのめしてやりたいと思はぬものけ一人もなからうではないか。それは感情である。理性では斷じてない。遮莫、世の中を支配するものは感情か、理性か。人心を左右するものは感情か、理性か。誰か日米相戦はずと云ひ得やう。自分の目の黒いうちに日米戦争を見たいものである。

昭和五年一月十一日の金解禁はその場合は何うしてもあゝやらなければならぬ大勢であつたにせよ其れが多分に政治的意味を含んだ解決であつたことは争はれぬ事實であらう。而かも舊平價解禁を斷行するのにあの時期を選んだこと

× × ×

は經濟的に見ては何としても無理であつたと言はねばならぬ。其證據には解禁後二ヶ月を出るか出ないといふに失業者の凄まじい大群が街頭に押し出したではないか。又生絲補償法といふ怪物の適用が突忽として初まつたではないか。有價證券の暴落といふ事象が財界に悲痛なる叫鳴を擧げさせたではないか。とは云ふものゝ金解禁と云ふが如き「危険事業」は、何時の世如何なる時に於ても、之を純然たる經濟問題として片付けて仕舞ふことは頗る困難と云はねばならぬ。其處が幾分にも之を政治問題化せねば成効せないのであるまいか。英國の金解禁も亦略ぼ同一の道程を辿つたものと言ふて良からう。炭坑夫以下の總同盟罷工といふ一大事件は其の「危険事業」に對する悲むべき所産であつたが故に。

朝鮮地方自治の擴張は結構である。朝鮮人が地方に於て參政權を獲得したといふことは、何といつても朝鮮人の一大躍進と云はねばならぬ。但し朝鮮人は地方自治權を獲得する前に、今一層必要なる或る物を欲せなかつたか。二千萬の朝鮮人のうち其の約八割を占

× × ×

むる農民労働者の生活状態の悲惨なことは、南鮮各地に於て農民にして草根木皮を嚙ぢり、漸く胃の腑を滿して露命を繋いで居る者が多いといふことに依つても、其の一斑が知れるのである。此等下層民に對しての生活問題の解決こそ一般朝鮮人より見て、參政權以上の重大問題ではなからうか。而かも此等農民労働者は生活の活路を外に求めんとし、滿洲に移住せんとせば支那官憲に壓迫せられ、内地に出移せんとせば同胞に厄介視さるゝ現状ではないか。先づ此等朝鮮窮民の生活を安定向上せしむる産業施設こそ、參政權附與以上の問題であらねばならぬ。花より團子である。

自殺といふことを一寸考へて見やう。自殺にも色々あるが、爲すべきことを成し終へて、最早前途に見込を持ち得ないものゝする自殺や、爲すべきことをまだ成し遂げざるも、前途に成すべき希望を有たざるものゝする自殺などは、獎勵はせざるまでも、何も彼此と咎めるにも及ばまいではないか。自分はこの前途に絶望の深淵を眺めながら、生々流轉の生活苦を嘗めつゝある人々の悲惨事を止観するに忍びない。生きるのが權利ならば死ぬるのも權利と云はねばならぬ。此の意味に於て芥川君の死も佐分利君の死も、自分は之を肯定してやりたいと思ふ。

× × ×

大學教授や官吏や銀行會社員の停年法！、自殺の強要でないにしても、社會的には彼等を埋葬し去らんとする精神的自殺幫助に外ならないのではないか。魏捨山の古事も亦自殺肯定論の根據であると思ふ。

× × ×

自分の家には女の子ばかりで男の子一人もない。周囲の人々か

解決であつたことは争はれぬ事
であらう。而かも舊平價解禁を斷
行するのにあの時期を選んだこと
を獲得する前に、今一層必要なる
或る物を欲求せなかつたか。二千
萬の朝鮮人のうち其の約八割を占
むるのではないか。朝鮮人の事
事も亦自殺肯定論の根拠である
と思ふ。

× × × × ×
自分の家には女の子ばかりで男
の子は一人もない。周囲の人々か
ら頻に養子を貰へと勤めて呉れる
併し乍ら自分は何うしても養子を
貰ふ気分にはなれない。それは氣
分であつて理屈では勿論ないので
ある。養子を貰ふ理屈といふのも
一寸分らないが、まア家族主義と
かいふ主義があつて縦に自分の家
を連綿と續かして行かふといふの
らしい。それには祖先の祭といふ
ことは成程家が續かなくては出来
ないことであつて、これは自分に

も能く分るが、其の外に養子を貰
ふてまで、不自然に自分達のやう
な何の由緒もない家を形式的に無
理に續かして行かねばならぬとい
ふことは自分には首肯出来ないこ
とである。それは自分の氣分が許
さない。幸に自分には弟妹がある
から此等の者が横に家を續かして
行くことが出来て、それで祖先の
祭が行へるなら、何も長男だから
といふて、自分の家に不自然な養
子縁組をするにも及ぶまいではな
いか。自分は女の子の總てを良縁
のあるに任せて他へ嫁せしめたい
と思ふ。さうして自分達夫婦は病
院で死ねば良い。旅にでも出て誰
も知らぬところでコロリと死ねば
更に面白いと思ふ。

× × × × ×
自分に何故に代議士にならぬか
と質問する人が多い、殊に湯殿の
總選挙前には蒼蠅ひ程澤山あつた
これは嘗て自分が代議士であつ
たといふ因縁から斯う言ふのであ
らう。自分は斯う言ふ質問を受け
たからとて政治家に適任であるか
らだなど、安自惚れて居ないから
安心してはしい。
「之等の質問に對して、自分は其

本場銘仙
毛糸各種
ち、ぶ、や
本町二丁目
(電話五〇五番)

の柄でないことを答へて居る。さ
るにても、今の議會は何をして居
るであらうか。黨争でなくば利争
である。空虚なる干戦でなくば、
野蠻なる力闘である。斯くて議院
政治が今危懸に立つて居るのは事
實である。併し之等を革正するは
他に人があらう。自分には他に爲
すべき仕事がある。國家の爲めに
も社會の爲めにも、手つ取り早く
始末を附けねばならぬ、仕事が累
々として續つて居る。五十面さげ
て何の随等代議士ぞ。自分の事業
に一生懸命になつて傍見も振らず
に精進して見たい。それが廣い意
味の政治でもあり、代議士以上の
奉仕でもあると思ふ。そして閑あ
れば書を読み、歌を作つて見やう
自分には又藝術の世界もある。

× × × × ×
岡野敬治郎先生の死は、何とい
つても自分にとりこの世に於ける
最も悲むべき出来事の一つであつ
た。先生いまさばといふ思ひはい
たつらに傷心多き浪人の行路に一
日として往來せぬことはない。兎
にも角にも人生に自分が師表と仰
ぎ得る一人の先輩を有つといふこ
とは何といふ心強さであつたであ

らう。自分の身は父母の愛撫と先
生の訓育との現身であるときへ思
つて居るのである。爾のみならず
自分は先生門下の幾人材とは常に
兄弟の如き交をなしつゝあつたこ
とを今更に想起せずには居られな
い。或る政治家は評して岡野門下
の人々を網羅せば立派な岡野内閣
が出来ると言ふたことさへあ
つた、事程各方面の人材を集めて
其の團結も頗る強固なるものであ
つた。然るに先生亡き後は何うで
あらう。有名無實の六樹會の如き
は言ふも詮ないことであるが、谷
中墓碑の土まだ乾かざるに、其の
門下の中よりは終に果鏡の人をさ
へ出したではないか。小才に始終
して節を疑はれつゝある人もある
ではないか。若栲遂に用を爲さざ
るものも少からぬではないか。曰
く何、曰く何。師表を亡つたる人
材の行方は斯くも哀れなものであ
るか。地下の先生は之を何と見ら
るゝであらう。浪人ながらも、天
下の大道を調歩をして居る自分は
先生に叱られはしやうが少しも恥
かしいとは思はない。
× × × × ×
浪人に不平不満は付きものであ

る。けれど之等の不平不満といふやつは、自分の見るところでは頗る淺薄極まるものであると思ふ。何故かといふに之等の浪人が一度世間に出る様になると忽然として其の不平不満が雲散霧消するから滑稽である。みんな自分が可愛いのだ。自分さへ良ければ、と思ふのが人情なのだ。立身とは何だ出世とは何だ。他人のことはどうでも良い、自分だけ良ければ、と云ふことなのだ。何といふ淺薄な不平不満であらう。何といふ簡單な浪人根性であらう。自分ももう少し深刻な不平不満を味つて見た。もう少し複雑な浪人精神を体得した積りである。

× × ×

食卓閑話

紫山老客

○近年京城などでも、追ひ／＼西洋料理が殖え、一般の人が食卓の作法に注意する様になつたが、まだ随分體カラがある。

○中には大學上りの若紳士が洋書を嚙り、片言交りの洋語を使い一部の洋人と交際して瀟に西洋通がり、又は一ヶ月百圓位の學費で二三年歐米留學の新歸朝者が、木賃や安下宿の間を見て来て、西洋人は皆そんなものと心得、却つて體カラをやる向もある。

○維新の初、西郷隆盛が外國公使に招かれ、西洋料理を手で掴んで食ひ、平氣で煙管を出して喫煙したと云ふことは、名高い話であるが、薩摩の老人より聞けば、西

自己の利害を超越して人の爲めに計るといふことは、實際問題としては不可能な事であらうか。所謂身を殺して仁を爲すといふことは一片の空言たるに止まるのであらうか。自分は從來人の厚意に感激の涙を流す事が少くなかつた。而かも後から之を觀て人の厚意と考へたことの多くが、其の人の利害に關係する一種の共同取引たる場合なることに微苦笑を禁じ得ないことがある。それで自分は此頃から云ふことを考へて居る。何か自分の力で人に或は世の中に絶對の利益を與へ得ることがあるとせば、敢然として之をやつて見たいと思ふ。其結果自分が非常な不利益を蒙ることがあるとしても、そ

郷は少しも豪傑振らぬ、謹嚴の君子風であつたから、そんな不行儀はせないと云ふてゐる。他人のことを西郷にナスリ付けたのであらう。

○西郷の實弟從道侯、その弟大山巖侯、西郷に劣らぬ豪傑であらうが、共に行儀正しき紳士であつた。特に食卓に於ける大山侯のハイカラ振は西洋人も感心してゐたさうだ。故大隈侯も誠に磊落の人であつたが、或る老外交家はこれまでの外交官中隨一のハイカラなりと評してゐた。

○食卓に就て第一番に手にとるナフキンを擲けて膝の上に置くことは何人も知るところであるが、不行儀な西洋人中には燕尾服のナフキンを引掛けたり、甚だしいのは襟の間に突つ込み、胸にブラ下げる人がある。これはふだんナフキンをを用ひぬ僥夫の作法であるから眞似てはならぬ。

これは却て愉快なことではないかしらぬと考へるのである。かういふと一寸聖人氣取の様になつて氣障にも聞へるかも知れぬが、實は自分が浪人中他人から報價附の厚意には随分浴したやうに思ふが、無條件で體性の厚意といふことを餘り澤山に受け得なかつた爲め、世の中をいと淋しと思ふた場合が少なくなかつた。これではいかんと少々アテオスリの氣持も交つて此頃頻りと斯う考へ始めたのである。此う云ふ積りでこれから仕事をやつて行かうと思ふ。思ふばかりではない、現にいさゝか作ら之を行なつて居るといふことを自分だけは知つて居る、自分だけは……それよと思ふ。

○日本人のやる事で、西洋人の最も嫌がるのは、食卓の上に版を寄せかくる事である。腕なればよいが版をもたすのは非常の失禮としてゐる。英米では中等社會の人に動もするとこの癖があるが、歐州大陸では決してやらない事であるから、大陸に行つては注意を要する。昔の洋行者中には食卓でス／＼煙草を吸ふ人があり、又食卓に飾つてあるボンボン、又は水菓子を給仕が持ち廻る前にソツト手を出して食べる人などもあつたさうだが、今日はその様な注意の必要はあるまい。

○食後の水茶碗は、指の尖と唇を濕すためであるから、口中でガラ／＼やつては吐き出さぬがよい。○それから食後の楊枝は食卓に残して置くのである。客間に行つてもマダ口に啣へて居ることは、日本には往々あるが、西洋では絶えてせぬことである。

朝鮮視察者の爲に

で妓生を見せる方が有効らしい。朝鮮料理は餘り香しくないが妓生の評判は確かに百パーセントの効果がある。京城の次は平壤へ行く

朝鮮視察者の爲に

毛利元良

(朝鮮鐵道)

私は朝鮮に来てから約二ヶ年になる。併し私は朝鮮と云ふものを殆んど知らない。二年も朝鮮に居て朝鮮を知らぬ私は餘程モンツグリに違ひないが、東京へ行くとかどの朝鮮通を以つて遇せられるから餘程不思議である。いやそればかりでない。東京の人士は私以上に朝鮮を知らない。成る程年々有力な政治家が内地から朝鮮へ視察に来られるが、特殊な關係と目的を以て來鮮される人士の外朝鮮の事情を理解して行かれる者少きを遺憾とする。これは來鮮視察者に對し朝鮮に於ける官民諸君の驛迎と案内の方法宜敷きを得ざる爲めであると私は考へる。私が二年も朝鮮に居て朝鮮を知らないのは殆んど京城にばかり居て朝鮮内地を旅行して見て歩かない罰である。一見は百聞に如かず。然かも百見して百聞すれば少し位いモンツグリの奴でも朝鮮の事蹟は解るに違ひない。故に内地から視察に来られる人に對しては先づ現在活動して居る朝鮮の施設と實蹟とを良く見く貰はなくてはなるまい。そこで一般的の實例として内地から視察に来る人がどう云ふ處を見よう云ふ處を見せられて歸るか、大体のプログラムに就て少しく批判して見度いと思ふ。

内地から視察に来る人は釜山に上陸して先づ蔚州の佛國寺を見る朝鮮の古代藝術を見て貰ふのも悪

で食ひ、平塚で煙草を出して喫煙したと云ふことは、名高い話であるが、薩摩の老人より聞けば、西

ける人がある。これはぶだんナフキンを用ひぬ僮夫の作法であるから眞似てはならぬ。

でもマダ口に啣へて居ることは、日本には往々あるが、西洋では絶えてせぬことである。

で妓生を見せる方が有効らしい。朝鮮料理は餘り香しくないが妓生の評判は確かに百パーセントの効果がある。京城の次は平壤へ行くのが月並みのプログラムであるがこれは北行する人以外態々御案内するに及ぶまい。平壤へ案内するよりも咸南地方の工業地帯を見て貰ふ方が數等よい。咸南地方の工業は内地と密接な關係あるに拘はらず内地では餘り研究されて居ない様だし、歸りには金剛山と云ふ景物もあるからである。

要するに朝鮮の統治、朝鮮の事業は總て内地の力に俟たなければならぬから内地から視察に来られる人に對しては此の邊の事情をよく考へて歓迎及案内の方法、プログラムの編成等を考慮する必要があらう。

◇碧蹄館閑話

北漢山人

○春色方に濃かにして、笳を碧蹄館あたりに曳くもの、いよ／＼多しとのことだ。

○碧蹄館は、京城を距る僅か四里の近邑だが、ソコには、内地人の住むもの至つて渺い關係で、豆腐屋といふものがない。一軒位あつてもよさうだが、商賣として成り立たないさうだ。

○ソコで、碧蹄館の人々は、どうするかといふと、僅か一週に一度位来てくれる京城の豆腐屋の供給を待つのである。

○ツイこの間も、京城の或る紳士が同地に遊び、佐伯郵便所長を訪ふて、持參の鮮鯛を献呈すると『イヤ難有う／＼』と佐伯さん喜

んだ擧句、『どうぞ今後、斯ういふ御配慮は、御無用……』そして御親切があつたら、どうか將來は、豆腐を一丁御持參下さるやうに』、紳士怪訝な顔をする、所長諄々として豆腐に濁する所以を説明した。ソコで紳士は、且つ感心し、且つ驚ろいて、『ハッ、ヘーン、いかにネー……』

○京城の名流の間に、佛蘭西同好會といふものがあつて、曾て同國に在留した連中が會員となつてゐる。

○その中で、佛語の最も巧みなのは、内地人側で、京日の鮫島氏(鮮人側で、李能和氏(學務局)だと稱されてゐる。この李能和氏は珍らしい篤學の士で、その舊著『朝鮮女俗考』、『朝鮮解語花史』などは、得易からざる名著として現に廣く讀まれてゐる。

日本に於ける 我朝鮮の價值

内田 鯤五郎

(總督府燃料研究所)

合併以來一般から餘り重厚視されて居らなかつた一萬四千里と二千萬人の人口を持つ我が朝鮮も最近漸く日本のかくべからざる領土として一般に認められる様になつた。

米穀は既に二億圓以上内地に移出し年々急激に其量を増し日本の食糧自給の爲に重要な役目を勤め赴江江水力電氣は完全に日本の窒素肥料輸入防止に成功せんとし、更に續々建設せんとする低廉なる水力電氣、豊富な無煙炭、畢鉛に關連して合成「アルコール」、酢酸、「人造ゴム」等を自給自足する爲に與つて力あるのである。朝鮮の無煙炭は既に發見せられたる埋藏量のみにて七億噸に達し年々内地移出量を増し内地の木炭薪の代用となるを以て、内地の山林濫伐を豫防、水源を保護し、帝國の生命たる水力電氣の水源を養ふを以て日本の缺くべからざる富源となつた。

朝鮮全商標の七割一千六百萬町歩の山林は、政府の保護により急に植付立木地面積を増加し、近き將來に於て日本は一億圓以上の木材「バルブ」、松脂「タンニン」漆、其他林業製産品の輸入を防止し得ることにならう。

咸北茂山方面より咸南にかけて未開の廣大なる高原地帯は、將來小麦、燕麥、大豆、甜菜、大麻の

産地として開拓せらるゝであらうから、これ等の物資の輸入を防止すべく、尙幼稚な朝鮮の農業を改良増産すれば麥類、麻類、砂糖、粟等二億三千萬圓の輸入を一掃する事は難事でないと思ふ。

降雨少く牧場に適する廣面積の平野多き朝鮮は日本の領土中比較的綿羊の飼育に適する所であつてこの朝鮮に於て日本の輸入羊毛、毛織物(一億六千萬圓)の自給は不可能の事にあらざるべく、又日本の領土中最も牧羊に適せる朝鮮は相當牧羊を奨励する時は皮革、骨粉、牛脂、「ミルク」、「ゼラチン」等二千萬圓の輸入を防遏するに重要な役目を演ずるのであらう。鐵礦の富饒處理は米國東「メサビー」及滿鐵鞍山で成功したのは最近の事に屬す、従つて其の同成因の茂山、端川、海州、端山等合計約六億噸の朝鮮鐵礦埋藏量も當然近き將來に日本の鐵鉛自給の爲に重要視せらるゝに至る事は疑う事が出来ない。良質の石灰岩の豊富な事、製鐵用良質耐火原料の發見されたる事、重石、水鉛「ニッケル」、螢石等の製鋼原料の多い事、電力(水力)の安い事、製鐵業に取つて他になき長所である。

朝鮮の鐵礦は日本が永久に世界三大強國として重視せらるゝ爲には最も重要な必要品である。

昨年總督府炭田調査班が平南に

【一六】

於て發見した含「アルミナ」頁岩が大体に於て「アルミニウム」の現市價ならば、「アルミニウム」製鍊は採算が取れる事が判つた。多年重大問題であつた日本の「アルミニウム」の自給は可能なる事になつたので日本に於ける朝鮮の重要程度も大きくなつた。

「アルミニウム」の輸入も現今一千萬圓となり年々に急激に増加して居る。日本の鉛亜鉛の二千五百萬圓の輸入防止は江原道、黃海平南、咸南の各鉛、亜鉛礦區に對して、鐵道が完成することにより容易に解決し得るものである。

純良なる石灰岩及粘土が、無煙炭田方面に近くあるので朝鮮「セメント」工業は特別有利な條件で急に發展し、數年の後には製産數百萬噸に達すべく、朝鮮は既に完全に自給に達し更に支那、シベリヤ方面へ輸出することにならう。

朝鮮の金鑛業は朝鮮産業中最も重要なもので特に近來工賃及材料安價な事等によつて急に金鑛企業が増加した、特に總督府が極力金鑛業の指導に力を入れ長く閉塞されて居る保留礦區百數千方里を開放する様になつたので著しく良鑛の發見の機會を多くし、其産額數千萬圓に達するも遠き將來でないものである。要するに日本の國際貸借を改善し經濟國難を救済し、日本を永久の輸出超過國、不景氣のない國とする方法は一つあるのみだ。其は急速に朝鮮の産業を極力開發する事だ。産業開發に關する豊富なる豫算と偉大なる主宰者として優秀な役人をよこす事である。又日本の重要地位にある政治家が朝鮮の産業に就て充分了解する事である。

小犬の行末

末が悪い、然し夫れからが肝心の飲ます技術となるのであるが、これにはより以上の熟練を要するのだから中々容易ではない。幸ひ母

漆、其他林業製産品の輸入を防止し得ることにならう。
威北茂山方面より威南にかけて未開の廣大なる高原地帯は、將來小麦、燕麥、大豆、甜菜、大麻の

業に取つて他になき長所である。朝鮮の鐵礦は日本が永久に世界三大強國として重視せらるゝ爲には最も重要な必要品である。
昨年總督府炭田調査班が平南に

小犬の行末

吉田雄次郎

(總督府殖産局)

僕は生來動物がすきで哺乳類から鳥類、昆虫類、兩棲類に至るまで、飼ふ機會のあつた動物は何でも飼つた経験がある。而して飼はれた動物が假令家畜や家畜でなくとも、それが野生の鹿でも羚羊でも猿でも、又は鴛でも鳶でも將又蛇類ならば尙更のこと、蝎でも蜘蛛でも一旦家で飼つた以上は、其の生物の種類如何に係はらず総て家族の一員と見做して可愛がらずには居られないのが僕の性質である。今年も寒さ厳しき一月中旬某夜の事であつた、こがらし吹き荒む明けがたに舊臘元山から來た市子と呼ぶ、姪姪中の土佐犬が僕等の寢室として居る温泉の下で何だか唸る様な聲を聞いたが、夢うつつの中に夜が明けた。幸ひ其の日は日曜であつたので早朝から支關前の犬舎を大修理して市子の産室を造つたが餘り寒いので打薬に安全炬燵を埋め温かくしてやつた。市子の表情は人間の様で喜ぶしくさなど堂に入つたものである。彼が打薬に身を沈めてマヤマヤと眠つて居る姿は天真爛漫極かに超俗して居る。幸ひ其の日は何等の變化もなかつた所が、日暮れに家族が使に外出してから急に苦しむに驗なり初めたので、僕は彼の産室で糞尿を以て全身をさすり初めたが、約一時間餘りで彼が飄然と室を飛出し、井戸端で水を咬むこと三十分間で再び産室に戻

つて漸く安眠した様であつたから僕も家に這入ると間もなく家族が皆んな歸宅したので、今の話をして居ると初葉(僕の長女)が「ア！お父さん、市子が赤ちやんを生んだ様です、キュウインクと小さい泣き聲が聞えますよ、見舞つてやりましょう、可愛いだらふね」と頻りに誘ふものだから早速家族總上げて提灯をともし、市子の産室を訪ねると既に可愛い仔犬が四つも生れて居つた。夫れから十二時に再び訪ねると今度は七つになつて居つた。翌朝訪づれると九つであつた。それで九つ出産と云ふ事に決つたが、其の日僕が退廳後家に歸つて調べると確實な數が十四であつた。或は朝の調べに誤りがあつたのかも知れぬが、兎も角も出産後母子共に健全であることは目出度いと家族一同安心し喜んだのである。

翌日からは家内と初葉が赤ちやんは寒くはないか、市子はお腹がすくまいか、夫れ安全炬燵よ牛乳よ練乳よ毛布よメリケン袋よと、大騒ぎ。しかも仔犬が多いのに季節の關係からでもあろふ、母犬の乳が足らないのでミルクを補乳せねばならぬが、飲む刀のないのに飲まず努力も並大抵ではない、先づ乳を薄める程度と其の温度だが少し冷たいと思へば直に氷つて仕舞ふ、それから哺乳用のゴム管とかスホイトなどが直ぐに氷つて仕末が悪い、然し夫れからが肝心の飲まず技術となるのであるが、これにはより以上の熟練を要するのだから中々容易ではない。幸ひ母子共肥立ちよく十四が十四無事に生長して貰はれて行く様になつたことは喜ばしい。市子若し人語を解するならば如何に土佐つ犬でも深くましい禮を喰つたであらふと思ふ。然し僕の家には尙此の外にセッター、シニバード等の大きいのが居る。此の連中は朝夕洗面器一杯の飯を一粒も残さずペロリと平げると云ふ蒙の犬で従つて飼養管理も中々容易ではない。是等総ての犬飼養係が初葉の擔任であるから、初葉の犬に關しての勢力は權威並び行はれて大したもので、仔犬の幼名を付けるにも初葉の意見が中心であつた。幸ひ性別は性の決定の原理に符合して牝牡同數であつたから、牝はお松、お竹、お梅お鶴、お龜と、牡は太郎、次郎、三郎、四郎、五郎と名付けらるゝに至つた。偕て次で起る問題は養子養女の仕末だ、即ち家族の一員が將來の幸福を定める重大事件である。何處までも家長と名の付くものは責任が離れない、先づ市子の犬籍を申し上ぐれば産地は忠清北道清州、純土佐の系統であるが義兄が開城に居つた時清州から買はれて開城で育成し、元山に轉じて成長したもの、種子即ち牡は元山の愛媛派館の土佐である。市子は綺麗でしかも土佐つ子に似合はぬ温順な性質であるから、仔犬の貰ひ手多く一々斷る口實に閉口した程であつたが幸ひ良縁が整ひ夫々よい養家へ片付ける事の出來たのは喜ばしい次第である。

茲に養家先きを調べると三郎が

鈴木竹齋さんの仲人で内務局長今村武志氏のお宅に、四郎が大阪朝日新聞記者の今井眞太郎氏に、太郎がお梅と共に全羅北道金堤泉津

水利組合舎宅の兄の所へ、五歳が南山町新花月の辰子さんに、お竹が三戸萬象畫伯に、お鶴が隣の大すきで有名な錦水の女將が仲人で

旭町の京城券番に、お鶴が長谷川町の盛文堂に、各縁組が成立して夫々引取られ、而して次郎とお松が母親の市子と當分同謀して残されて漸くケリがついた。然し今まで責任を負つて居た初葉は自分の大事な人形様よりも可愛がつて育て上げた仔犬共が時機が来れば各々行先きが定められ憐むべき自己の運命を辿らねばならぬことを今初めて悟つたのではないであらうか……僕は只我家に生を享け家族の一員であつた可憐なる仔犬達の將來に幸あれかしと祈るのみでは何だか気がすまぬ様な氣持がしてならぬ。

木浦にて (亡父十三回忌を迎へて)

福田有造

(木浦府本町)

亡き父の十三回忌を迎へたり友はあれども老ひにけるかな
年月の流れとなればうたてけり吾は悲しも吾は淋しも
父あれば孫どもめて微笑まん墓前にぬかづき顔そむけぬ
世の常の父にはあらねど早く逝く五十三の春何そつれなき
母上の老ひ給へる顔を見る其後のことなど吾考へても見る
父の友迎えて供養をなしにけり周圍見廻し父を思ひぬ
何故に讀經ありや人來る不思議の孫等嬉々と戯るさは云へど幾年經ぬらんたよりなきたよりある身とまだに覺えず
かくて亦いつか果てなん身と心人の命に誰か嘆けぞ
この土地も變りてありぬ十三年前父あれせばと思ふこと多し
春淺き三月二十日の思ひ出に吾は泣かまし十三年の年月
今ひとり嫁かぬ妹あり亡き父上の如何にや愛でける
母と香妹の爲めにとやかくと思ひ傾らひお忌迎えぬ
頭是なき少女なりけり父の逝く妹も嫁く年となりけり (五、三、二〇)

◆偉丈夫の話

漢江漁郎

○平壤の福島莊平さん……御覽の通りの偉丈夫で、カラは十七半といふ桁外づれのを使ふ。
○勿論帽も、靴も、それに相應したもので、鳥渡買はふたつて平壤や京城にけ、そんなものはない。
○で、總て東京銀座の某店に型をとらせて、電報一本で、スグ送らせるやう、手筈をしてゐる。
○ところが、先年あの大震災だ。第一に困るのは、型が焼失してしまひやせんか……といふことソコで、ゐても、立つても居られず。『型は無事なるや』と、一本電報を打つと、『まづ先きに持ち出し無事なり』とある。福島氏恐悦斜ならず、『君見てくれ、斯ういふ次第だ』

不思議な事件

をした結果とうとう事件の真相が判明した

電報を打つと、「まづ先きに持ち出し無事なり」とある。福嶋氏恐悦斜ならず、「君見てくれ、斯ういふ次第だ」

不思議な事件

宮崎毅

(辯護士)

をした結果とう／＼事件の真相が判明した」

乙「一体真相はどうなんだ」

甲「それは彼等兄弟が三人共謀して同行者三名に強盗の因縁を附け示談金を掻き上げやうとしてやつたんだ」

乙「すると一体誰が切つたんだ」

甲「本人は自分で切斷したと自供して居るが自分では中々切れない恐らく兄の一人が切つたものと思ふ」

乙「兄達は何うしたね」

甲「弟が警察へ留め置かれる模様を知つて二人共逃亡してしまつた」

乙「實に奇想天外だね」

甲「そうだ、同行者三人は勿論放免され本人は處分されたが本人の模倣から察すると本人はそれ程の悪い男ではなし兄二人が實に計畫實行したらしい」

乙「それにしても陰謀を切るとは妙なものの目を付けたな」

甲「それがね支那人労働者などは××××××することなどは殆んど稀で云はゞ無用の長物だし、××××××時は金が要る、つまり道樂息子を持つたやうなものだから道樂息子を勸導する位の考へで選定したと思ふんだがね」

乙「か、これけ驚いたな」

甲「キツト自分の身体中を見廻して其他に不用なものが見付からなかつたんだ。兎に角僕はこれで支那人の特異性である所の陰忍性と極端な物質慾の二つをマザ／＼と見せ付けられたやうな気がする」

乙「全くだね、勿論支那人の全部ではあるまいが、一部支那人の眞情を如實に現はしてゐるやうだね」

甲「君は去年の暮京城で支那人が陰謀を執りとられた事件があつたのを覚えてゐるかね」

乙「ワン新聞で讀んだのを覚えてゐる」

甲「その結末を知つてるか」

乙「イヤあとの事はサツペリ分らん」

甲「それじゃあ話そう、あの支那人は同行者が三人有つたんだ、そして怪我をすと直ぐ交番へ駆け込んで同行者三名が手足を縛つて陰謀を切り取り人事不省に陥つた際に所持金百餘圓を強奪したと申立てたんだ」

乙「するとつまり有り勝ちの出来心の強盗なんだね」

甲「誰でも一寸そう考へるだろうしかし深く考へて何だかおかしと思ふ所はないかね」

乙「そうだね……こうつと……そう云はれれば強盗が陰謀を執り取るとはおかしいね」

甲「そう思ふだろう、警察でもそう考へたんだ、そこで一方では同行者三名を嫌疑者として留置する一方怪我の所が所だから知情關係ではないかと云ふので情的關係を調査したんだ」

乙「警察としてけ尤だね、それで何か端緒が有つたかね」

甲「何うしてもないんだ、所が警察としても一つ何うしても腑に落ちない所があるんだ」

乙「何だねそれは」

甲「それは被害者け局部を××も學丸も併せて執り取られたんだが、その切口が如何にも奇麗で他に少しも怪我をしてゐない、本人が少しも抵抗をしたんなら迎もこう奇麗に切り取れるものではないし又手足を縛り上げたとすれば他に少しはかすり傷位出来る筈なのにそれが無い、そこから考へて見るとこれは何うしても被害者の承諾を得て合意の上に切り取つたと判斷する外はない、熟睡中でも突然切つたのなら兎に角目覺めて居る大の男の而も切り難い場所だのに反抗を排してこう手際よくやれる譯はないと云ふんだ」

乙「なるほどそう聞いて見ると益々困難な事件になつたんだね」

甲「すると其内又警察官としては觀望出来ない事が出来た」

乙「は、あ」

甲「それは被害者の兄が二人有るが其兄から留置中の同行者三人の家族たちに向つて頻りに示談金を三千圓出せば告訴を取り下げて(事件は被害者から告訴の形式)出られる様にしてやると極力運動してゐる事が分つた」

乙「なるほど、損害賠償か慰籍料の意味だらう」

甲「そうと思はれるが又一方か他の理由があるやうに思はれる其内漸やく本人の傷が全癒したので改めて警察で綿密なる取調

をした結果とう／＼事件の真相が判明した」

偶 感

長 郷 衛 二

(總督府内務局)

[110]

は不景氣なりと雖我國より見れば依然として弗の國たるを失はぬ。近來高調される産業の合理化も技術的枝葉の問題よりは此様な根本方面の合理化が先づ第一に敢行さるべきであります。

此邊まで突込んで考へますと合理化といふ事は單に制度や技術改良の問題許りでなく人格の問題であり道徳の問題であると思ひます

穴より出で

卑近な俚言に「穴より出でて穴に入るあな恐ろしき穴の世の中」といふ事があります。

科學によつて掘り掘められた文明文化の穴に今や人類自ら落ちこんで四苦八苦する世の諸相を見る時此俚言も滿更ワイ談方面の事のみと觀過し去る譯には行かない様な氣がする。

人類に至大なる幸福をもたらしたと言はるる科學は歐洲戰亂に於ては精銳なる武器と變じて數百萬の生靈を奪ひ數十億圓の財を失はしめました、そして其結果生れたより精銳にして狂暴なる軍器、海鷹は軍縮會議を開く「口」むを得ざるに至らしめました。

産業の機械化は失業者、各種社會問題の續出となり今や其對策に各國共七脚八倒の有様です。

現代は人類自らが創造したる科學を人類自らがもちあつかい兼ねる一歩誤れば科學の掘つた穴の中に陥没しなければならぬ危機に立つて居る様に思はれます。實にあな恐ろしき科學の世の中であります

しかしながら此穴をして天國たらしめるも、地獄たらしめるも、それは實に人間自身の力なる事を思へば其前途に未だ一道の光明を認め得るものであります。

二外人の言葉
日本醫學大會に出席された、ドイツ、ボン大學教授で世界的微毒の神様、エリック、ホフマン博士曰く
「文明(シビリゼーション)と微毒(シファイリゼーション)とは並行すると言ひますが、始めて見た日本文化の影に落し微毒化を私の力で防ぎ得ればこれ以上の幸福は有りません」
又フランス樂壇の重鎮として世界的名聲を荷ふピアノニスト、ロベール、シュミツツ氏は曰く、

「日本のシャミセン、コトなど樂器は何れも獨特の東洋的環境があつて面白いと思つて研究して居りますが、日本は今や其母國の音樂の何物であるかを忘れて居るのではないでせうか」
私は前者に於てドイツ學者の自信ある態度と、我國の現状に對する一種の皮肉とを見出しますし、後者に於ては流石一流音樂家としての觀察の鋭さを見出します、そして兩者の言葉は共に我國の世相に對し項門の一針たるを失はないと思ひます。

日米不景氣の差

米國一流會社では一年間の益金中株主に對する配當額は其三割乃至四割の程度で五割を出るものは絶無と言つて可なりであります、

他は總て社内留保として固定資本の償却、擴張事業資金、或は施案の合理化の方面に使用されて社務の安全に専念して居ります。事實一流會社で益金の五割以上の株主配當をする様なれば會社の状態不良なりとして其株價は必ず低下するそです。

處が日本一流の會社と言はれる鍾紡ですら益金の七割何分を株主配當として居ります、大部分の會社は益金の八割九割、或は十何割といふタコ配當をしてまで目前株主の利益を計るに他の何物をも犠牲にす様な有様です。

福澤一派による東電の八分配當据置運動の如きがそれあります。實際我國では社内留保の多少よりは配當金の多少によつて株價が左右せられるのが通則であります。此會社目體並ひに社會一般の態度の差が日本の不景氣と米國の不景氣の差異を雄辯に物語るものではないかと云ふまいか?...

不景氣なりと雖ども米國の事業會社中には反つて従業員の賃金を増加せしめるフォード會社があります。その日本では三割五分の高配をなしながら勞銀四割減額を申渡した鐘紡が出て來るのです。

言葉を換えれば會社内容の弾力性に格段の相違がある結果と言はねばなりません。かくして我國の不景氣は米國のそれに較べてより深酷であり米國

生れ故郷

何處へ行つても、福岡縣がついて來る。原籍はと問はれる、福岡

米國一流會社では一年間の益金
中株主に對する配當額は其二割乃
至四割の程度で五割を出るものは
絶無と言つて可なりであります、

言葉を換えれば會社内容の弾力
性に格段の相違がある結果と言は
ねばなりません。
かくして我國の不景氣は米國の
それに較べてより深酷であり米國

品川雜記

中島 司

(中央朝鮮協會)

生れ故郷

何處へ行つても、福岡縣がつい
て来る。原籍はと問はれる、福岡
縣と答へる。原籍を記せと要求さ
れる、福岡縣と書く。私の原籍地
は親の代から福岡縣の大川町だ。
従つて四人の子供も原籍は福岡縣
たるに於て一様だ。

ところが、先日小學五年になつ
た三男の手帳を、彼れがその兄と
キヤッチボールをしに戸外へ出て
居た留守に何心なく披いて見ると
其の故郷とある欄に、何の躊躇も
なく『京城』と記入してあつた。
そして郷土の名産の欄には何の顧
慮もなしに明快に『栗と明太』と
書いてあつた。成るほど、さうだ
彼れの生れた所は京城だ。京城は
彼れにとつてネーチブランドだ、
即ち故郷に相違ない。福岡縣三潁
郡大川町なんて彼れには知らぬ他
郷に外ならないのだ。何の愛着も
ない筈だ。朝鮮京城こそなづかし
の郷土なのだ。さうして我が家には
此の三男の上の子中學二年の二
男がやはり京城生れだ。

私共を『日本人』と云ひ、私共
『日本人』を外道異端の侵略者の
やうに取り扱ひ、機に乗じ折に
觸れて、朝鮮から排斥しやうとす
る氣勢が往々無遠慮に朝鮮の若い
人達から示されつゝある。然るに
朝鮮で生れた、我等の兒等は、朝
鮮を故郷として懐かしんで居る。
私は自から朝鮮に於て寸壤尺土だ
も所有しないのであるが、私の子
等は朝鮮を郷土と稱して居る。純
眞な氣もちで。

尖端を行く

誰れが造り出したか知らぬが此
節『尖端を行く』といふ言葉が頻

青山の桃水郷

三月半ば過ぎ或る日の明けがた
夢の中で私け亡き三島さんに逢つ
た。三島さんとは即ち桃水先生三
島太郎氏のことだ。長身癯軀の桃
水先生は浴衣を着て居られた。そ
して手に一室の美しい櫻草を持つ
て居られた。『これを君にあげや
う』と言つてその草花を私に授け
られた時、生先の面上には微笑が
漂よつて居た。先生の姿が、先生
の聲が、覺めての後もありありと
判きりと私の眼底に私の耳底に残
つて居た。それは春の彼岸の入り
に間もない日の暁の夢であつた。

夢に温顔を以て桃水先生が花を
私に與へられたといふことは、即
ち拈華微笑だ、以心傳心靈犀相通
するものだ。私は夢から覺めて突
壁に思つた。もう直ぐに彼岸だ、
彼岸間近かに桃水先生から花を頂
戴した夢を見たから、彼岸には先
生の御墓に參つて花を供へること
に依てお返しをしなければならぬ
と私は考へながら床を離れたので
あつた。
それから數日にして彼岸の中
日があつた。皇靈祭の休日でもあり、
春光長閑な日であつた。午後私
は家内や子供を連れて青山の桃水
郷に三島家の墓を訪うた。私は
青山墓地内先生埋骨の處を桃水郷
と呼びたい。先生が晩年病を湘南
の鵝沼に著つて居られた折、

人間は心閑なり桃の水
の一句をものされた。これは李白
の間余何意棲碧山、笑而不答心自
閑、桃花流水杳然去、别有天地非
人間の詩から思ひ付かれたもので
ある。その詩その句から採つて俳
號を『桃水』と定め、其閑臥の處
を『桃水郷』と稱せられた。大正
八年の秋から翌年初夏不歸の客と
なる迄、或は鵝沼に、或は六
甲山麓に、或は別府に轉々せられ
行く先き先きを先生は桃水郷と呼
ばれた。依て私け先生は桃水郷と
眠せらるゝ所の青山の墓畔を稱し
て又た桃水郷と謂ひたいのである

青山桃水郷を訪つて、私は先
生の墓前に花を供へた。供へた花
の中には桃も混つて居た。先生の
碑に隣して三島家集代の墓があり
其處には先生の母堂砂子刀自が眠
つて居られる。桃水先生が亡くな
られた際、老ひの身は在りても要
なし、代られるものなら代つて死
にたかつたと嘆かれた刀自は、味
氣ない心境をお孫さん達に故人の
面影を憶ふのをせめてもの慰めに
淋しく月日を過ごして居られたが
遂に桃水先生の跡を追うて逝かれ
た。今は同じ墓所に安息せられつ
ゝ先生と母堂の靈は楽しく相和し
て居られるであらう。
私は家族と共に先生御母子の墓
前に跪まつた。瞑目合掌して居
る私達の頭上を春風がそよそよと
吹いて通つた。

りにはやる。曰く、時代の尖端を
行く何々電車。曰く、時代の尖端
を行く何々カフェ。曰く時代の尖
端を行く何々映画、何々タクシー
何々雑誌等々。はては「尖端のだ
わね」といふ頃まで出て来た。
スピード時代、トップを切る。
尖端を行く、急テムボ、凡そ是等
の言葉は今日の競進的な鋭角的な
世相を象徴するもので、如何にも
神經の尖鋭な近代人の好きさうな
言葉だ。

超特急、超特映畫など超の字が

付かねばアツプツデーでない
絶大とか、壓倒的とか云ふ形容詞
を使わねばあたまたまにピンと來ない
實に斷然我が日本はアメリカ式に
なつたものだ。手つ取り早い、ざ
つくばらんな、大衆的な傾向がど
しどし支配し行く一方には高踏的
な物やらかさや奥ゆかしさが消え
て行きつゝある。一九三〇年プア
スアルファの日本はどう變化して
行くのか、とても物凄いスピード
時代ではある。

河原蓬

角田芳子

(南米倉町)

春ふかしかすめる山も野も畑も空の眞洞もかどや
きわたる
刑務所の赤き煉瓦のへいなが春の光りにつき
てかなし
遠く來ぬ河原砂原春の日の照りしくところ陽炎は
もゆる
春の日のかどやき光る砂原に河原よもぎを子等と
つみつつ
かぎろひのもゆるきこゆる目とつれば河原の砂に
春の流れに
かれあしのとがれるかぶの砂原に河原よもぎは朋
えいでにけり
あしかぶのもとによもぎは照りわたる春日をあひ
て河原に匂ふ
春の日にうすむらさきに匂ひつゝ河原に生えりは
しきよもぎは
かそけくもひさにひそみていぬちいき今は萌ゆる
か河原のよもぎ(五、四、六)

都鳥

旭町一丁目
電本三三六六

◆奇人傳雜記

北漢山人

○仁川の港外に、芍薬嶋といつ
て、それこそ雀の涙ほどの、ちつ
ぽけな一小嶋がある。

○ソコに、鈴木東圃といつて、
當代の隱者のやうな、一人の繪師
が住んでゐる。

○どういふ繪を書くのか、どう
いふ風貌を持つてゐるのか、ツイ
ぞ見かけたこともないが、何んぞ
もその東圃畫伯、二十何年前に、
一ツ金一千圓也を投じて、その島
を賣ひとつたさうな。そして以來
嶋の王様となり、細君及びその妹
それに鮮童二三名切りで、閑寂な
生活を送つてゐる。

○半農半漁だ。しかし浮世の煩
はしさなどは、微塵も知らないで
○この細君の方は、琵琶師で、
時々浮世がなつかしくなると、一
管を抱えて、琵琶行脚に出る。ス
ルトその妹の方が、姉に代つてサ
ヤ／＼しく王様の左右に仕へると
いふ評がある。

○どうです好事家各位……一度
嶋を覗いて見やうではありません
か。

故明石將軍外傳

摘して棉密な例を擧げて説明する
ので、唯一人に對し一日もかゝる
といふこともあつた』

かそけくもひさにひそみていぬぢきんは着ける
か河原のよもぎ(五、四、六)

故明石將軍外傳

橋本豊太郎

(鮮滿開拓株式會社)

例の雜筆子から原稿の催促に遇ひ、いつものやうに下らぬことを書いて青軍の紙上を汚すことを躊躇した。偶々余の机上にあつた『明石元二郎』上下二巻千餘頁の大冊子中から朝鮮時代の同將軍雜話を抜萃して故人を偲びたいのである。

日露戦争で露國が海陸共に惨敗を極めたとは云へ、兵備は軍制の改革及資金の充實によりて回復を計ることが出来るが、夫の國体を根本から瓦解せしめて、終に再び立つ能はざるに至らした動機は明石將軍の露國革命亂を挑發せしめた偉勳與つて大に力あるものと體稱せねばならないのである。又露國統治に關する將軍の治績は其の最後を飾れる宏壯の詞語が物語つて居るではあるまいか。上原元帥の言を籍りれば『古來陸軍部内で宮様以外に最も壯麗の嘉標を有する者は明石將軍である』との一語は最も雄辯の説明だと思ふ。

寺内伯の信頼

一日寺内總督が熱病の爲めに一切來客を謝絶して居られたのに、其の病室から頻りに話聲が聞へるので戸を開いて見ると明石將軍が何時の間にか入り込んで大話をして居るのだ。夫れは庭を廻つて少

し明いてゐた窓を飛び越へて侵入したのであつた。彼の謹嚴な寺内伯が斯うして迄も將軍を歓迎して病中の快談を試みるといふ、其の意氣の投合を見るべきである。

鮮人の將軍評

彼の平穩なる日韓併合につき「明石さんは確かに寺内さんよりも豪らかつた」と朴泳孝侯は語られ又當時京城の有力な操觚者中에서도「彼の演劇は寺内一人では打てなかつた、然し明石ならば一人でも遣れた」と言つてゐる。

總督を辭退

大正八年庚戌事件の直後長谷川總督の後任に將軍は擬せられた。時は原内閣の時代、田中義一大將が陸軍大臣であつたが、齋藤總督を起したしむるに先だちて、明石將軍に對し、朝鮮總督たらんことを切に勧誘せられた。之は田中大將(直話の由)然し將軍は合體赴任以來間もなく、未だ何事も成さず空しく榮位に走らんとするが如きは、到底將軍の責任感念上爲し得なかつた處であらふ。

將軍と立花將軍

警務總長の職を引繼がれたる親友立花小一郎將軍の言に「明石からの事務引繼には一週間もかゝつたので驚いた。宋秉峻や李完用は無論のこと、一寸重立つた朝鮮人に就いては、各々其長所短所を指

摘して棉密な例を擧げて説明するので、唯一人に對し一日もかゝるといふこともあつた」

唧筒で鎮壓

曾て京城内に數萬の暴民が群集して、あはや一揆でも起らんとする氣配の時に、警官も憲兵も頗る狼狽の態であつたが、其鎮壓策として、將軍は命ずるに唧筒を以て水を注ぎかけろ、其も彼等の身体に掛けては行かぬ、直ぐ其足許の邊までといふのであつたが、之は曾て彼のレーニンが將軍に語るに民衆が亂亂を起さうとする場合は武器を持つてはならぬ、若し武器を用ふると、鎮壓せらるゝ方も必ず武器を以て臨んで來ると言つたことを逆に利用したのではなからふか。

頭腦の使ひ分け

將軍は能く部下を統率し、幾百千の聖下が一心同体になつて全精力を一事に集中したが、將軍自身も亦精力絶倫で、併合當時は三十日も四十日も服を脱いで寢たことはなく、朝になつても往々顔も口も洗はれなかつたさうだ。總督府の部局長會議にも、自分に用のないことは全く無關心で、默然として坐禪をやつて居られたやうだ、つまり有用のことは全力を用ひ、無用のことは全然腦裡から取り除けるといふ無礙自在の境涯であつた。又「醫者といふものはつまらん奴だ、へちやく饒舌つて人の大事の相談までも邪魔する」とは將軍が藝者觀の一齣である。

木棉地の制服

一体禪味のある人の生活は往々枯淡であるが、將軍は又格別であつた。身は將官でありながら其軍

服は木棉地であつたといふ(無論羅紗地のもあつた)。之は當時の朝鮮官海が餘りに華美だつたのを諷してといふ人もあるが、或は生來素朴の生活振かも知れない。彼のモルトケ將軍が衣服は唯の二着書齋には何の裝飾もなく、會心の友あれば談論風發論議口を突いで出で、爛々たる眼光付威嚴と氣品に満ち、生涯女嫌ひで通したなど岡將に克く似通つてゐる處があるやうだ。

將軍の浪人觀

ルーズベルトは本來變則外交が好きで、外交官よりは新聞通信員などを手先きに使つたものと聞くが、將軍も其側近にこんなことを言つてゐる。「……例へば支那事情を知るにしても、外交官の報

告は一番形式的のものが多く、駐劄武官の報告は之に次ぎ、最も其の真相に近きは、寧ろ支那人と糧食を共にする浪人の情報である、蓋し彼は自ら國士を以て任じ、獻身的に國家の爲めに働いて居るからだ」云々

禪的機鋒

將軍の參禪は京城在勤當時圓山大嶺和尚によりて手引せられたといふことであるが、其の師事せられた沙門には釋宗演、北野元峰、日置默仙、高木龍淵、間宮英宗、古川大抗等の諸老師があるが、余も一日將軍の官邸で永平寺管長北野禪師に紹介せられ面白い話を窺つたことがあつた。

將軍の達磨を畫かるゝ事は有名であるが、一日余に向つて達磨描

きも良い加減にして止めやうと思ふが甚厭とのことであつた。余は之に答へて曰く「畫くならば徹底的に畫かるゝがよい、中途半端ならば寧ろ止した方がよいと思ふ」と、將軍曰く「サウダ矢張り續いて描くことにしやうかな」と。

又將軍より圍碁を挑まれたことがあつた。其の第一布石が全く定跡を脱つて居るので、余も暫らく思案の上同じく途方もない布石を以て之に應じた。彼此四五十目並べた後に將軍は對局中止を宣せられた。這間の消息は全く禪問答のやうであつた。

回顧すれば之も十五年前の昔語りで、今は其の大眼玉がキラキラ光つて居るのを追憶するのみである。

仁川遊記

永樂町人

四月七日、同行三人で、仁川へ行く。

餘りの上天気なれば、一寸一呼吸入れやうとの相談なり。

相手は、今村氏及び徳野氏なれば、話題盡さず。忽ち仁川驛へ着く。

久し振に、渺漫たる濃青の、海を見るは、よろし。

心明かなるを覺ゆ。

三人とも、少しも地理を知らず汽車からオツポリ出されて、さてどつちに行つていゝか、しばし顔を見合せて、茫然たり。

道を尋ねて、兎も角も海岸町へ辿りつき。桑野氏の店を、求め得て、やつと黎明山莊のありかを知る。もともと山莊で、半日を遊ばせてもらはうとの意中なりしなり。

自動車で、十分足らず、忽ち山莊の門に着く。

主人幸ひに在宅、「まアユツクリして行け」とのことたり。ノコノコ座敷に通る。

この山莊には、天章神來三年ばかりお世話になりたることあり。一行の中、徳野氏は、特に故人と夙縁あれば、神來湯談大にハツヒ示されたる畫幅の中、「幽靈」と題するものなど、最も興味深く覽ゆ。

晝餐の御馳走になり、園庭を漫步す。西方一帯は、仁川外港及び内港一帯の裡にあり。また南方は

遙かに峽谷を越へて、群鶴山の雄姿を望む。實に景勝の地なり。園中彼岸櫻、木蓮、連翹、梅など、今満開にて、芬香人に迫る。

藤椅子に凭りて、漫談のつゞきを試む。群鶴山上、二つの烽火台あり、倭寇に備ふるものなり。今村氏も倭寇史實を説く。我れらも亦、主人に迫りて、米戰二十年感を語らしむ。興會殊に深し。

斯くして、春光の下、悠々日光浴をなすこと三時間、再び室に歸りて、所藏の法帖類を拜見す。ココの大主人は、筆札の大家なり。あつむるところ、流石に珍品多く賞嘆これを久しうす。

午後四時山莊を辭し、ブラク市中を見物しながら驛に出で、七時京城に着く。

近ごろになき、ノビクしたる一日なりし。

心明かなるを覺ゆ。
三人とも、少しも地理を知らず
汽車からオツボリ出されて、さて
どつちに行つていゝか、しばし顔
を見合せて、茫然たり。

題するものなど、最も興味深く覽
ゆ。
晝餐の御馳走になり、園庭を漫
歩す。西方一帶は、仁川外港及び
内港一帯の裡にあり。また南方は

市中を見物しながら驛に出で、七
時京城に着く。
近ごろになき、ノビくしたる
一日なりし。

正無苦

加藤康男

(鐘路警察署)

或日暑で仕事に熱中してゐる時
何かの事で誰かど、文久二年生れ
は今年幾つかねー、と聞いた、私
は直ちに『天れは六十九歳だ』と
即答した、慶應、明治、大正が何
年と、指を折る必要が毫もなかつ
たから、と言ふのは、私の父が文
久二年生れで、今年正に六十九歳
になつた、記憶があつたからであ
る。ソレ父も既に六十九歳にな
つたのだ、私が朝鮮に来て、もう
十年になる、十年一昔と言ふ爲か
廿何年内地で過した事が、何だか
遠い遠い、昔の様な氣がして、此
頃妙にセンチメンタルな氣になる
春愁とでも言ふのだらう？、而う
して文久二年から聯想して、熱々
父母の事が憶ひ出されてならぬ。

父は滿二十一歳の時から、六十
三歳迄四十有餘年間、初等學校の
先生で、終始し、所謂一介の村夫
子として、其の一生の職業的生活
を終へ、今では閑雲野鶴を友にす
ると言ふ、風流も餘裕もないが、
兎に角書、將棋、孫の相手で一日
を暮してゐる。そして何等の野心
もない。明治十七年頃からの先生
で最初の傳給は三圓だつたさうだ
夫れが段々昇給して、十二圓位に
なつたが、其頃には既に子供が四
五人もあり、何程かあつた資産も
疾に無くなつて仕舞つた時で、イ
クラ物價の安い時節でも、其の生
活は決して樂ではなかつた。其後
少々の昇給があつても、家族は殖

へる生活費は増す一方で、其のバ
ランスはとれなかつた。従つて家
計の苦しかつた事は、明である。
夫れなのに父は如何に家計不如意
でも、好きな酒丈は一日も飲がさ
なかつた。『お父さんがお酒さへ
上がらなかつたら』の嘆聲は、常
に母の口から洩れた。父の出世が
出來ないのも、家計の豊ならざる
も、これ皆父の酒の所爲と思つて
母は父の禁酒を神佛に祈つたか、
餘り効顯はなかつたらしい。私達
が物覚えがついてからも酒の上の
失敗や、周囲の人々に迷惑をかけ
た様な事例は尠くない。當時の
母の事を思へば、本當に氣の毒に
堪へない。然し父は非常に樂天家
で、物質に恬淡で、話題が多く人
に可愛がられる純な性質であつた
爲か、酒の上の失敗で、他人から
擯斥を受ける様な事はなかつた様
だ。四十何年出舎の小學校とは云
へ、其の教職が無事勤つたのも、
父の純心を上司や世間の人々が認
めておつて呉れた爲だらうと、私
は今になつて、其の周囲の人々に
感謝せずには居られない氣がする
父は最初『淡山』と號して居つた
其の理由は今も知らない。其後
『仙洞』と改めた、之は、齡漸く
加はると共に、前齒が落ちて其の
口邊が宛も、ウツロの線になつて
からの事で、私は父の現状を如實
に物語つた、誠に相應しい號だと
常に思つてゐた。處が今年六十九

才の新春を迎ふると共に、『仙洞
改め正無苦となす』との通信に接
した。註に曰く、『無苦は即ち六
九に通ず』、且六人の子女夫々何
うやら生活の安定を得、幾千の千
弟各其分に從つて、頭角を顯し、
加ふるに老夫婦亦健全なり依つて
正に苦み無しなり』と。果して正
無苦なりや否や、私は知らない。
二年前の辭世の句に
酒に生き酒に死したる我身には
言ひ残すべき言の葉もなし

と、誠に父は酒の爲に、其の一生
を埋木で送つた、名譽も地位も、
物質も何物をも得なかつた。だが
然し今になつて私は熱々思ふ、父
の全生涯は或る意味に於て、酒の
爲に却つて幸福な一生ではなかつ
たかと。

近頃國の新聞を毎日缺かさず送
つて呉れるが、其の宛名に、往々
京城府××洞加藤正無苦殿、と
發信人と受信人との名前が全一人
の場合がある。幸に配達氏の賢察
で間違ひなく配達されてはゐるが
…父も老ひたのだ。

最近最も親しき友人を失ひ、非
常に淋しがつてゐる。老齡になつ
てから其の竹馬の友を失ふと、
一入人生の寂寞を感ずるらしい。
父は幸にして、嬰孺尙壯者を凌ぐ
元氣だ。宛も『酒は百藥の長』と
云ふ、上戸の龜鑑かの如くに、今
でも相變らず母の制限と、看視を
受けながら、何合かの晩酌に、陶
然として、氣焔を擧げてゐるだら
う。母を始め我々も今日になつて
は、其の禁酒を望まない。只長壽
を祈るのみ。私は遙かなる、朝鮮
の空から、老父母の事を想像しつ
つ、所謂正無苦をして、一生無苦
に、其の余世を送くらせたいもの
だと、切に思つてゐる。

京城つれつれ草

守屋 徳雄

(殖産銀行)

【三六】

馬上恍惚として詠歌する彼武人の面影など思はずや。勅選集に良繼の詠める。

はるは皆をなし櫻になりはて、

雲こそなけれみよしの山

千載集に西行の歌へる

おしなべて花の盛りになりけり

り山の端ごとにかゝる白雲

など詠み得て妙なり、新古今の季

能が

逢阪やこすゑの花を吹くからに

あらしぞかすむせきの杉むら

など繪にやかゝまし。

○

散り敷く花に風静あり、金葉集

に實能公は

けさ見れば夜半の嵐にちりはて

とあり、このねぬる一夜のすさび

に一きわめさむる心持こそすれ。

拾遺集に公忠は

殿守のとものみやつこ心あらは

此春ばかり朝きよめすな

と詠めるもうべなりかし、新古今

に宮内卿のよめる

花さそふひらの山風吹きにけり

こきゆく舟のあと見ゆるまで

又めでたし。

○

對花懐古など古き題にはあれど

捨てがたかるべし、新古今に讀み

人知らねど

いそのかみふるき都をきて見れ

ばむかしかさし、花咲きにけり

などあり、千載集に忠厚は

さゝ浪や志賀の都けあれにしを

むかしながらの山さくら哉

と詠みぬ。花咲けばこそありし昔

をしたはめ。

○

赤染衛門の歌こそよけれ、

こそその春ちりにし花も咲きにけ

りあはれ別のなからましかば

○
卯月十七日、日も早や暮々なるを宿に歸れば門邊の櫻一本、吹く風に散りて袖にかゝれり。此日頃せはしきまゝに咲きぬとも知らず過せる身に春も終りと覺ゆるもはかなしや。しばしたゞすみて散る一ヒラづゝを見送りぬ。

○
山寺の春の夕くれ来て見れば入相の鐘に花ぞちりける。
新古今に能因法師の詠めるいとあはれなり、實にや散る一ヒラには無常の姿あり、幼きものゝ死を見るに似て痛ましく、吹雪して散る花にはそゞろにときめくものゝ末路を觀すべし。

○
さばれ、花を見んほどの人々、しばし浮世を忘るゝこそよけれ、後拾遺に紫式部は
世の中をなになけかまし山さくら花見る程の心なりせば
と詠みぬ。あらまほしきは花見るほどの心にこそあれ、漱石先生の言へるに「春は眠くなる、猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘る」とあり。たとひ一時とは言へ借金など皆目忘れたる境涯こそ式部の花見る心なるべし。家々集に定家が詠める

○
いかにしてしつ心なく散る花の長閑けき春の色と見ゆらん
などまた面白し。

など詞華集に残れり、あはれ別れのなからましかばいかにうれしき我身なるらん、一人の娘去りて三年、妻逝きて二年、母亦去りて一

花見る限りの人々、しつ心なきは古今の習なるべし。代々集に兼輔は
さくら花匂ふを見つゝ歸るにはしつ心なきものにぞありける
と言ひ、後拾遺に能因法師は
櫻咲く春はよるだになかりせば夢にも物は思はざらまし
と詠みぬ、雨をいとひ風をいたみ唯あはたしくぞ花は見るべし。
○
いつかは見果つべき櫻なるらん詞華集に紀伊は
朝またき麗なこめそ山櫻たづね行く間のよそめにも見んと詠み代々集の道隆は
駒とめて見れどもあかす櫻花をりてかざらんこころゆくまでと歌ひぬ。後拾遺の具親が
いつれをかわきて折らまし山さくら心うつらぬ枝しなればばと詠めるも、後拾遺に泉式部が
みやこそといかにととはば見せもせんかの山さくら一枝もかななど皆同じ心なるべし
○
花には風と言へり世のまどかならぬをうらむに似たり、匡房が後拾遺集に「外山の霞たゞすもあらなむ」など詠めるは皆人の知るところなり。されば風あり雲ありて花は一人あはれなりかし。
吹く風をなこそその關と思へとも道もせに散る山さくら哉
義家が千載集に残せるめでたし、

社長 高橋章之助

やうに思ひます。それに付いて書導大師と云ふ方が散轡談に若欲學行者必藉有錄之法。少用功勞多得益世。

いかにしてしつ心なく散る花の
長閑けき春の色と見ゆらん
などまた面白し。

花は一入あはれなりかし。
吹く風をなこそその關と思へとも
道もせに散る山さくら哉
義家が千載集に残せるめでたし、

赤染衛門の歌こそよけれ、
こそ春ちりにし花も咲きにけ
りあはれ別のなからましかば

など詞華集に残れり、あはれ別れの
なからましかばいかにうれしき
我身なるらん、一人の娘去りて三
年、妻逝きて二年、母亦去りて一
年はめぐり來りぬ。獨居の庵埋め
て咲く花も今は甲斐なくあたなり
かし。或る人の『今年も咲けりね
たましき哉』など我も詠みたき心
地こそすれ。(四月十八日)

社長 高橋章之助
朝教育新聞
發行所 京城西小門
一三六其社

◆研究室閑話

北 漢 山 人

衣 換 へ

小 林 唯 乘

(西本願別院)

この四月八日は釋尊がルンビニ
公園で降誕されました日で、佛教
の方では花祭りと言ふて、護生佛
を甘茶の盥の中に迎へて灌佛致し
ます。朝鮮では舊曆の四月八日(今
年は五月六日)を衣換へと云ふて、
冬衣を春衣に換へる時期として、
衣物を着換へてお祝ひを古來致し
て居ることです。丁度氣候がそうな
つて居るのではあります。『衣換へ』
と申すことは、宗教や實生活の上
でも、折々致さねばならぬ事のやう
に思ひます。近代文化は余り我々に
衣を澤山着せ付けて動きのとれぬやう
に致したやうです。又選ぶにしても澤
山に見せつけられて、何れが我が身
に似合ふやら、サテとなると選擇に
一苦勞させられます。時に子供がお
母さんやお父さんの留守に、お父さん
の山高帽を冠してステッキをつい
て得意になつたり、女の子がお母
さんの下駄を履いて眞面目な顔をし
たりなどするやうに、日本の立派な
國民でありながら、

六尺余りの人が、それも氣候も違
へば風土も違ふ、勿論歴史も衣食
も變つた處に生れた人の眞似をし
て得意になつて居る人もあるとは
マアそれは何でしやう、それも子
供の戯れであれば無邪氣でもある
が、それで血相變へての仕打ちと
あつては本氣の沙汰とは思はれま
せん。この頃の人は文明の恩澤に浴
して大變利巧になりました、智愚者
になりました。思想も豊かになら
れました。丁度頭の大きい福切見
たやうに、餘り智恵袋が大きくな
つた爲に足元が不安になつて來た
頭の中では足元の不安を理屈で解
決しやうとしますが、思案的には
解決されても矢つ張り事實は福切
の足のやうです。思はぬ脱線をし
ましたが、年に一度や二度は衣を
換へるやうに、今迄纏ふて居た衣
を脱いで批判し、選擇を誤つて居
りはせぬかと調べる必要が實生活
の上にも宗教的生活の上にも必要
なことである

○林業試験所の村山博士は、多
年コックと松毛虫の研究をやつ
てゐる。
○朝は早くから箱の掃除、三度
の食事、お産の世話……。な
か骨の折れるものである。
○だが、博士にして見ると、實
に可愛く堪えぬ。堪えぬらしく
晩などは、いよ／＼お別れといふ
時、何度も／＼一旦消した電燈を
ヒネリ直しては、彼等の顔をのぞ
き込む。異状なしと見て、『おや
すみ……エ、おやすみ』、斯うも
可愛いものかと、驚くばかり。
○ツイこの間も、友人某氏夫妻
が、夜間訪問して來た。いろんな
漫談の果、『是非見て行け』とい
ふ。客人夫妻も大に興味をもつて
『では……』といふので、研究室
へついて行く。
○電氣をヒネる。床下からネー
ツと、大きい網箱を引き揚げる。
『さア……』といはれて、その箱
に眼をやると……何んとその中に
は、何十萬とも知れない例の奴、
ぞろ／＼／＼とどうこめいてゐる
その瞬間、キヤツ……パタリ……
と／＼客人の、奥さんの方が氣
を失つてしまつた。
○と、謹嚴な博士、それが何の
故たるかサツパリ判らぬ。唯だ唯
然として、郎君に向ひ、『君……
これ一體、どういふ意味かネ』

港の關守となりて

堂本貞一

(仁川 税 關)

港の關守となりて早や五ヶ月、はじめの三ヶ月は管内の御世話になる向への御挨拶巡りと謂つたやうな工合で出たり、入つたり、勿々として消えてしまつた。

凍つた土も軟らいで、テニスコートの手入れが其處彼し處ではじめられかけると、もう、チラホラとレンゲワの黄色い花が夢のやうに咲きそめ、『日に増し、青みゆく芝草に、春の歩みの速さをぞ見る』で、アンズが咲き、サクラが開き、またたくひまに、こゝ、仁川の春は酣となつてしまつた。此の稿が活字になつて出る時分には春も老い、初夏ともならう。思へば半歳夢の如しか。

かつて、或る人の歌に擬して、『日本の青年、われは椅子により、煙草を喫みつ、とつくにおもふ』と詠じたことがあつたが、丘の上から、それに似た伸びのびしたなごやかな氣持ちで、海を眺め『おちこちの島山かすみ、海の上も、春訪めらし、笛も長閑に』などと、口誦みながら、港の關守らしい聯想に耽る。

仁川附近は、潮汐干満の差が大なること世界有数の處であつて、之に對應して施設せられた築港の閘門、船渠は仁川の名物である。因に、仁川港に於ける潮汐干満の差は、小潮差二十一尺、大潮差實に三十三尺に達する。

さて、潮汐の干満は海岸に於いて最も明かに觀測される。それと同様、國勢の推移如何は、國境に立つたときに、よく看取せられ、通商貿易の消長は、埠頭に於て首肯される。

關稅戰爭とも目すべき世界の關稅政策の現況から、遽かに期待し得ぬことではあるが、將來、關稅の障壁が除かれる時が來やうとも埠頭から眺めた貿易の消長を録する貿易統計の重要性は、深くなり行くばかりであらう。産業振興の箴言として、通商取引の指針として。

入超は我が國貿易連年の悩みであるが、仁川港に於ける對支貿易を觀るに、輸出が輸入の半ばにも及ばぬことは慨はしい次第である。

殊に、支那に於ける家庭工業の所産たる支那麻布が五百萬圓も輸入され、また、朝鮮の名物だど一般に思惟せられ、秋の景物の一つとして其の美はしい赤い色を農家の屋根の上に輝かせて居るトウガラシが支那から三十萬圓以上(二億斤以上)も輸入されることは、大いに考へねばならぬことと思ふ。

以上の數字は年額である。

一と航海、千人乃至二千人と雲集して來る苦力の群れを見ては、溢るゝ力の偉大さを思はずには居れず、山東の鹽を積んで來る戒克の黒い船体、赤い風見旗、朱がかつた帆、それらに悠揚として而かも健忍不拔な支那人氣質が窺はれ

【二八】
てならぬ。

春潮を賦り、港頭を壓して、アメリカの觀光團を乗せた巨船、コムバス、リゾリウト、フランコニアの三隻が、茲一句半の間に相い並いで入港した。船は獨逸船、船員は獨逸人、營々として働いて居る。歐洲と米國、此兩者の大勢を縮寫して見せられた心地がした。

『獨逸人が勤勉とな。しかし、考へて見て下さい。戰爭ですべてのものを失つた獨逸は、努力に努力を重ねて行くの他に、活くべき途はない』とはコロムバス船長の私に語つたところであつた。

第一艦隊の艦隊が威風堂々として入港した。すぐ頭に浮んだことは、ロンドンの軍縮會議、過去の光榮ある戰績、而して太平洋の將來。

吾人も亦、努力に努力を重ねなければならぬと痛感する。春にふさはしからの緊張味と嘆ひ給ふこと勿れ。

◇或旅人の話

漢 江 漁 郎

○全南知事の馬野さん……例の『うき草の半生』を著はして以來自ら號して萍堂といふ。

○近ごろ光州も、鐵道が着いた上、鐘紡や片倉製絲の工場も、近く出來るといふので、萍堂先生豪氣ますく堂々。

○最近訪ねた人が、『どうぞ御折件を一つ』といふと、『さうかやるかナー』とあつて、墨痕淋漓初春や十三洲は日本晴れ

○不相變エライ元氣ぢやさうな

キツネ

そこに只一人居ると別に客が一人來た。話しかける。高田に入營した事があるとの事に話はずむ

因に、仁川港に於ける潮汐干満の
差は、小潮差二十一尺、大潮差實
に三十三尺に達する。
さて、潮汐の干満は海岸に於い

の黒い船体、赤い風見旗、朱が
つた帆、それらに悠揚として而か
も健忍不拔な支那人氣質が窺はれ

ここに只一人居ると別に客が一
入来た。話しかける。高田に入管
した事があるとの事に話ははづむ
これから芝居に行くのださうだ。
折柄歸つて来たO君を勧誘する、
『如何に活動や芝居が嫌ひでも十
二時迄まだ六時間もある、モーど
うする事も出来無いぢや無いか、
それに下足迄合計十五錢で済むの
だから』といふ譯だ。

キツネ

高橋昇

三 菱 載 寧 鐵 山

三高時代の事、暑中休暇も終つて郷里の高田を出發京都に向ふ。

それから境内を歩いて居ると刈萱堂への道しるべがあつた。そこへ行く、途中でO君下駄の鼻緒を切らした、土産物を賣る店で老婆に纏つて賣ふ事になつたが金をとらぬ、二三品何か買つて代を出さうとして居るとソコへ、婆さん出来上つた下駄を下に置かうとしてどうした拍子か手を滑べらし、アワヤ様から眞倒様といふ所を、傍に居た僕が兩肩に手を掛けたので婆さんは幸に無事であつたが、其ハズミでO君に觸つたから弗入を落され銀銅貨が散亂し、下水の踏板を滑つたやつもあつた始末。

長野で中央線に乗換へる筈のがコチラが餘り延着したので相手が待つて居て呉れず、待合室には入り出されたのは丁度お晝頃、次ぎの列車は木曾福嶋行で、結局眞夜中に長野を出るのに翌朝乗る事になる。同じ運命の六高子のO君を見付け、二人で晝の十二時から夜の十二時迄こゝで遊ぶ事にした。

刈萱堂に登つて善光寺平を眺めたりして歸つて来ると、寶物拜觀所が見付かつた。丁度他の人を案内して来た坊さんに附いて歩き説明を聞いた。O君時間をつぶす爲めに、いろ／＼な事を尋ねるので坊さん閉口する。

牛に曳かれてでは無く、汽車に捨てられて善光寺参りと、やむを得ず洒落る。

落され銀銅貨が散亂し、下水の踏板を滑つたやつもあつた始末。

サテ一般方略としては、晝の間出来る丈ユツクリ見物する事にして、夕食は名物の蕎麥と迄は決定したが、夜が問題で、O君活動は嫌ひとある。

オ君が摩紙で呼ぶ筈が無いのにと思つて居ると、直ぐ引返して摩紙をモトの所へ片付けて又働いて居る。

先づ善光寺に参詣した。俗に廊下廻りとかいふ、佛様の様の下の暗い所を廻る。こゝに大きな錠前があつて、それに觸れると極樂に行かれると言はれて居るのだ。極樂に行き度くはあるが、サテ錠前は天井か或は右側にあるか、又左側か解らぬ、二人で手分けして捜す事にして僕が丈が高いから天井係だ、O君は右だつたか左だつたかを探る、見付けたら互に呼ぶ事にして暗の廊下を一廻りしたが二人共觸れぬ、汽車に捨られた二人だ、どうも極樂に行けさうも無い

大きな室にまだ他の客は無く、歩き廻つて疲れた脚を延して、ユツクリぱくつく。名物に甘いもの無しとか言ふが、こゝの蕎麥は例外でおいしい。餘り食べたからかO君便所に行くとして僕が摩紙を分けてやつた。

モ一度今一方の側を捜したら、今度だけ度極樂行だが面倒臭くなつ

モ一見物する所も無い様だ、土産物を賣る店で活動寫眞があるかと尋ねると、今は無いとの事。どうし様も無いので、少し早い蕎麥屋に入った。

モ一度今一方の側を捜したら、今度だけ度極樂行だが面倒臭くなつ

モ一東海道線の改札口には、誰れも居らぬ、赤帽に尋ねると、汽車が来て居る早く行かねば間に合はぬとの事、無理に飛込んでイヤハヤ全く間一髪で間に合つた。

モ一度今一方の側を捜したら、今度だけ度極樂行だが面倒臭くなつ

それから京都迄の車中、例の便所からの注文が、退屈をまぎらすには絶好の話題である。

列車には見捨てられたる我等を
ば救ひ給ひし善光寺如来
赤帽の赤毛布式あしらひにヒヤ
麥のみか泡までも食ふ
便所より聲かけられし若い衆紙
かへ行けばキツネ一つと
など駄句り、○君にも求めると、
下の句が出来ないと投出すのに僕

が後を書き添えて
廁にて又もやキツネ欲しくなり
呼べどわめけど人は来んく
停車場に駐付ける程キツネつき
赤帽共が怒鳴るわけなり
といふのが出来たりして、二人で
興じて居るのを近所の人が羨しが
つて居た。

【三〇】

京都、京都。僕は下車するので
あるが、○君は其まゝ行つては岡
山が夜中になるので、三時間程是
も下車して行くとの事に、僕が案
内して、京極に行き又麥齋を食べ
た。又○君便所に行くので、僕は
モ一目的地に着いたのだからと、
塵紙の残りを全部提供し、今度け
大きくて有名な○○場に入つて、
驛で分れた。

其後○君の消息を知らぬが、不
相變蕎麥屋の便所の厄介になつて
居るかどうか。

◆筆のしづく

三木一彦

○鮮銀の仁川支店長岸さん……
まアお酒は、一人前でせうネ。

○ところで、ツイこの間、雑筆
の四月號を見てみると、三巴酒造
の廣告がある。シカモその廣告文
が實に痛快！。岸さん獨りで『フ
フッ、やつとる〜』

○以來近親の人が、京城へ行く
といふと、『オイ、もどりに三巴
を一本頼むぞ』

○シカモその都度、例の廣告を
見せて、『どうだい、ウーン』

× ×

○辯護士の高橋章之助氏、若
葉會といふ句會に這入つて、頻り
に句作をやつてゐるが、互撰など
やすると、氏の句は忽ち『これア
旭堂先生だナ』と判る。

○どうしてといふと、氏の句は
題の如何に拘らず、如何なる場合
でも、天下國家を表現し、時とす
ると米國の横暴などを痛罵する。
個性のアラワレを以つて、藝術の
第一義とするなら、氏の句などは
當に典型的なものださうな。

桐の若幹

角田不案

葉あとしるく残れる桐の若幹の芽をいと太く桐は
吹きぬる
皮肌にいのち漲らし青みつつ芽をいと太く桐は芽
吹きぬ
桐の木の芽吹き由々しき若幹に春の鼓動を聞かん
とするも
庭つゞきの畑に立てる桐の木の芽吹ける頃か我が
故郷は
桐の幹を鎌にて削り叱られし故郷も父もはるかな
るかな
○
學校に子等はゆきたれば妻と我と朝ひそかなり日
は照りにつつ
硝子戸の反射明るし桐芽吹く朝庭ふみて妻ものを
ほす
もの言ひつつすきて妻がほしけるは赤き運動帽
千子のかつぐへき
春の日のひかりのなかにすぎはす子の運動帽の
眼に迫まる赤か(五、四、八)
○
砂をうちて風わたるなりこの國の河原よもぎの芽
吹き淺しも
世のはてにたちある心砂原遠く人聲さへも聞え來
ぬなり(五、四、四)

豫算の行方

就中歳出方面の項目別比率を調べ
ると二億四千餘圓の豫算の中主
なるものは司洋行政費二〇%、教
育費五%、産業費一〇%、官業費

世のはてにたちあふる心砂原遠く人國さへも聞えず
ぬなり(五、四、四)

ると米國の移業なるとを痛感する
個性のアラワレを以つて、藝術の
第一義とするなら、氏の句などは
當に典型的なものださうな。

豫算の行方

三木清 一

(京畿道財務部)

第一次マクドナルド内閣の蔵相であつたスノーデン氏は、英國國民をして、せめて朝飯だけでも租税より解放せしめやうと云ふ目的で朝のテーブルに用ふるコーヒー、砂糖、其の他の食料品の租税を免除し、労働黨本來の面目を發揮したものである。當時の體語フリー、ブレックファスト、テーブル「負擔なしの朝飯」は、歐洲大戰以來世界有数の租税負擔國になつて来た英國國民を悦ばせたことは非常なものである。

國家の統治は私人家計と違ふから、單に統治費の寡いことのみを體諒することは出来ない場合もある。が、多くても考へもので畢竟程度の問題である。此の程度を定むることは決して容易でない。從來國民の財政的負擔に付ては其の最低限度は餘り論じられない。之が最高限度に付ては種々論議されて居るが、或は所得の二五%説、或は所得の五〇%説等がある。列國の負擔實際を觀るに二〇%乃至二〇%に相當するものが多いやうだ。

國家の統治には勤勞と財貨とを必要とすることは今更論を俟たない次第である。國家がその勤勞と財貨とを獲る爲には巨費を要する其の巨費を調達する爲に豊富な國有財産でもあれば、其の收益で全部を賄ひ得るが、さもなければ勞ひ國民の有つ購買力の一部を國家の手中に收めねばならない。國民の側からは其の購買力の移轉たる財政的負擔は重いよりも軽い方がいい。或は全然ない方がいいと云ふであらう。勞農露西亞では國民に物の所有權を認めないが爲、國家は國民に財政的負擔を命じないが非共產主義の國家としては國民に財政的負擔を命じないと云ふことは、實際上出来ないことであらう。其の程度に差異こそあれ、幾分の負擔は免れない。

國家が國民の購買力を集積して財政豫算を編成し豫算の實行を行つた場合、如何に其の能力を發揮し、又如何に其の効果を擧げてゐるか。換言すれば租税の行方、租税の落付先は何處であるか。且其の眞使命を果して居るかどうか。之が觀測は容易ではない。しかし其の觀測を行つてこそ初めて國民の負擔を論じ得るのであるまいか。個人の家計であれば其の世帯の収入の多寡に應じて所謂エンゲルの法則が行はれ、家計消費の當否は比較的容易に診斷することが出来る。が國家の財政は家計消費のやうに簡單には診斷し得ない、一に各國の實情に基いて具體的考察を加へねばならない。

○ 最近の朝鮮に於ける國の財政、

就中歳出方面の項目別比率を調べると二億四千餘萬圓の豫算の中主なものは司法行政費二〇%、教育費五%、産業費一〇%、官業費五〇%、國債費一〇%、内外であつて、此の比率は既往十年間に於て餘り著しい變動はないやうだ。之等の統治費を支辨する歳入方面を觀ると、其の主なる歳入構成の比率は租税一八%、官業收入五六%、公債一〇%、内地よりの補給金六%内外である。是に由て之を觀ると歳出に於て最も多額の地位を占むる官業即ち專賣、鐵道、營林、通信事業の如きは多額の經費を要すと共に歳入方面に於ても亦多額の收入を擧げてゐるのである。租税收入は官業收入に對比すれば約三分の一程度に止まるのであつて、朝鮮統治の爲に國家が國民の購買力を自己の手中に收めてゐる程度は敢へて多いとはいはれないやうだ。

○ 今内地と朝鮮との間に於ける國民の國家的負擔を觀るに、内地では平均一人當十五圓内外、朝鮮では二圓内外で朝鮮は殆ど比較にならない程寡い。しかし之は内鮮人共通の平均數であつて、朝鮮に於ける内鮮人別の負擔を區分すると模樣が幾分變つて来る。それにしても多いと云ふ程度ではない。其の負擔程度の相違は經濟能力の關係もあるであらう、が朝鮮在任者ほども軍事費を負擔しない。加之毎年内地より千五、六百萬圓程度の補給金を受けて居ることなども負擔輕微の一原因であらう。

○ 列國に於ける國民所得の分頭額を見ると、英國千圓内外、米國千三百圓内外、内地では二百圓内外

朝鮮では公表したものはないが、
私け六十圓内外だと想定して居る
假に國民所得に對する國稅のみの
負擔率を計算すると英國は一六%
米國は六%、内地は八%、朝鮮は
三%内外に相當する。

國民の經濟生活から成るべく稅
を抜いて暮向を樂にして往かう、
と云ふことは世界的大勢であつて
誰も異存のないことであり、惡か
らう筈はない。が各國の實情奈何

◆無駄はなし

北 漢 山 人

○地方法院の脇判事は、餘技と
して將棋を樂み、その棋品方に二
段と稱せらるゝ。民間法曹の中にも、
棋を樂しむものは多い。高橋
大元老を始め、宮崎、堀、寺田等
々……しかし辯護士の將棋は、多
く野武士的、猪突的で、腕力は餘
りあつても、合理的、計算的でない
がら、これを裁判所側と角する
時には、いつも南風競はず。散々
の敗をとる。

○脇さんは即ち、裁判所軍の盟
主なのである。

○書壇の山田新一氏も、脇氏と
よく棋を争ふ。しかも大駒二枚を
引かれて、その上に散々駈け惱ま
せる。

○尤も、球撞きとなると、さう
は參らぬ。各々我れ利ありと斷じ
てゐるが、先づ五分々々の勝負。

○で、この間も書伯、判事を誘
ひ出して、朝鮮ホテルで球を争つ
た。午後五時から十一時に至る。
されど、技量伯仲して、到底勝負
を見る事が出来ぬ。

○遂に判事が、『もうやめ。』

によつて其の程度方法には餘程趣
が變つて来る。殊に國柄によつて
は減稅よりは寧ろ幾分負擔を増加
しても、國家施設の充實を行はな
くてはならないと云ふやうな所も
あるであらう。故に減稅の前に先づ
現行租稅の行方、落付先、之が効
果などを克く吟味検討する必要が
あるであらう。單にあすこで行つ
たから内でもやらうと云ふのでは
早計の謬を免れないであらう。

もう歸らう」といひ出した。しか
し書伯は、球なればこそ斯くうれ
しいのだ。將棋は……思ふだに悲
憤に堪えぬ。ソコで、『まあもう
少しやりませう。勝負だけつけ
ませう』、茲に至つて、判事半分
泣き出しさうになつた。『山田さ
ん始めてから何時間になる。既に
勝敗は体力の問題になつてゐる。
アンタは、むごい人ぢやネー』判
事の体格は、御承知の通り。茲に
至つて書伯喜ぶこと甚し。『脇さ
ん……兎に角、娛樂は、球撞きが
一等ですネー』

○日之出小學校長大山一夫氏退
職す。四方擧つて『惜しい』
と嘆ぜざるものなし。

○大山さんなればこそ、職員は
皆その父の如く愛慕し、生徒はそ
の祖父の如く思ひ慕うてゐたのだ
當代あれほど、敦厚の長者け求め
難い。單に年とれば罷めねばなら
ぬといふ一片の官律こそ、うたて
きものゝ限りである。

鮮和新辭典

三 木 一 彦

○『鮮和新辭典』は、この程朝
鮮語研究會から發行せられた。

○本書は、朝語語より國語を求
むるものに便するやう編纂されて
ゐるが、同時に正確なる朝語語を
知らんとするものに、特別の便宜
あるやう、極めて細心の注意が拂
かれてゐる。

○解説、對譯等、まことに親切
で、平明である。

○携帶用の美本で、紙數八百三
十頁、印刷頗る鮮明。類書中の權
威であると思ふ。

○研究會が、先年來斯うしたジ
ミな、眞摯な、眞に有益な仕事を
獻つて、清々として、仕上げて行
くことは、まことに敬服の至りで
ある(一冊定價金參圓也、發行所
府内太平通二ノ五八朝鮮研究會)

人物評論の噂

五月號廿錢

天理教々々作者の懺悔は大色魔
◆百魔亂舞の天理教

松村吉太郎の上を語りて愈深刻

露探・獨探・袁探・赤探物語
赤裸々にした宮尾東拓總裁
石雷總裁と山條太郎親分

東電 芝 京 東
銀五 八〇一 一五六
東二 三 七
社 日 月

た。午後五時から十一時に至る。
されど、技量伯仲して、到底勝負
を見ることが出来ぬ。
◎遂に判事が、『あゝよあゝ。』

編任責

赤裸々にした宮尾東拓總裁
石仙總裁と山條太郎親分

芝 京
番八〇一五六
番三七一二六

社旦

ふぐ料理

お座敷金端羅

川長

旭町一丁目

茶いろいろ
茶器いろいろ
青々園茶舗
京成本町二丁目
(電話本局二二二番)

外科 皮膚科
瀬戸醫院
院長 瀬戸 潔
京城旭町二ノ八
電話本局二四九八番

内科 小兒科
中島病院
明治町二ノ七七
(電話本局三七八番)

お二人で一つの保険に
はいれる然も保険料は二人保険
普通の一人分餘ですむ
東洋生命京城支店
一萬圓契約で八千五百
圓の現金定期配當の外 不老保険
に普通配當がつきます

M式巻上日覆
各種テント
非常用雨覆
フットン袋
其他帆布製品
製作販賣
前 陣 城 京
會商 トンテ 西 中
八 四 八 二 本 電

京城永樂町二
酒井婦人病院
院長 酒井一郎
(電話本局一八番)

內科
小兒科
木村醫院
院長 木村文三郎
京城府吉野町九一
(電話本局七二五番)

金物類
近藤商店
京城本町三ノ三三
電話本局三六二番

京城本町二丁目
一番瀨醫院
院長 一番瀨慶次郎
(電話本四〇〇五番)

明治町二ノ七五
利根川齒科
院長 利根川清治郎
(電話本局二八七番)

京 城 著 名 商 店 案 内

(い ろ は る 順)

濱 洋 服 店
洋服類
鐘路一丁目

富 田 商 會
新高麗焼
南大門通三丁目

富 田 屋 洋 服 店
洋服及附屬品
南大門通二丁目

ち ゝ ぶ や
本場銘仙
本町二丁目

大 澤 商 會
貴金屬、時計
本町一丁目

龜 屋 商 店
金剛鈴
本町二丁目

川 長
御料理
旭町一丁目

田 中 時 計 店
時計直輸入
本町二丁目

南 山 莊
御料理
西四軒町

村 木 時 計 店
標準時計
本町二丁目

山 邑 支 店
サクラ正宗
羽治町二丁目

藤 木 商 店
和洋雜貨
南大門通四丁目

丁 子 屋 洋 服 店
洋服及附屬品
南大門通二丁目

貴 生 堂 藥 品 店
人參、藥品
本町二丁目

明 治 屋 支 店
洋酒、洋菓子
本町一丁目

三 越
百貨店
本町一丁目

三 中 井 吳 服 店
呉服類
本町一丁目

青 々 園 茶 舖
茶及茶器
本町二丁目

將 棋 覺 え 帳

に當て、スーツ……と、逃げる
 や、逃げる！
 ところで甲紳士は、少々茶氣満

將棋覺え帳

溝呂木光治

(東京將棋七段)

王手知りず

明治四十年頃……筆者の想ひは遠く昔に飛ぶ……一九一一年だ。現今の六段寺田梅吉氏の嚴父淺次郎氏が、淺草の福井町へ道場を出してゐた時である。

その時代の素人棋客として有名な人は、澤本庄兵衛、中根福太郎、平井直吉、伊勢長次郎、久米市三郎、山本定吉氏等で、二段位の指手であつた。

一日、久米氏と山本氏が對局してゐた時である。久米氏は、自軍の形勢頗る利あらずと見えて、苦戰奮闘、難局を凌ぎ切るべく努力してゐたが、山本氏は遠見の角將を王手と打つたのである。打たれて久米氏は「うむ……」と唸つた。追ひ詰められた袋の鼠のように……。だから、どうしたらこの苦境を脱し、危地を通れることが出来るだらう? と長案に重ねるに、また長案である。

そこで久米氏は、約二時間位考へた上、如何なるインスピレーションを感じたか、山本氏の玉將へ王手をかけつけて詰めてしまつたのである。

傍らに見物してゐた初段に三枚落の人が、? ? ? ……と、インテルゲーションマークを連續させた。そして暗夜に求むる燈火を寺田先生に乞ふたのである。

「有段者になると……」

と、その人は至極眞面目に言つた

「王手がかゝつても、敵手の玉將を詰めればよいのですか?」

これを聞いた寺田先生が、眼を白黒させて質問者の顔を穴の開く程見返したことは謂ふまでもない。

手駒に王將

よくあることだが、或る宴會の席上で、豫定の時間より少し早く來過ぎた爲に、それまでの時間を徒に待たなければならぬ紳士があつた。假に甲紳士と乙紳士とする

双方共、平素からの合將棋で……だが何十年指しても、少も上達しない連中である。棋力は初段に二枚落の處であるが、双方その指し口の早やいのは、一時間に十番位はお茶の子さいさであるだけに、また見落したの、二手指すことなどは、お互ひ様によくやらかすことなのである。

そして更に甲紳士が、よく王手飛車取りを狙ふ癖があるのに對し乙紳士は桂の癖を狙ふ癖がある。勿論二人は、徒然の時間をぼんやり待つてゐるやうな徒輩ではないそこで盤を持ち出してやり始めた

果して甲紳士は敵の玉將に「飛車取り王手」をかけたのである。「イヤッ……引つ掛かつた、引掛つた……」

氣のついた乙紳士は、飛び上らんばかりは大呼しつゝ、飛車を敵用

に當て、スーッと……と、逃げるや、逃げる!

ところで甲紳士は、少々茶氣滿の性質の所有者だつた。だから、黙つて敵の玉將を取つて、飛車を逃がしたのである。一方乙紳士は敵用を取つて、飛車を成り込んだので、敵玉を詰めるべく

「君の持駒は? ……」

と聞いた。すると、甲紳士は、飄然、顔を撫で擦り乍ら

「うん、持駒かね。え……と金、銀、桂、歩三ツ……王將一ツ……」

「ナニ? ……」

乙紳士の眼は、忙しげにクルクルと廻つた。そして

「おい、玉將の手駒つて、あるわけがないぢやないか!」

と云ひつゝ、自營を見ると、何と自分の玉將は、いつの間にか行方不明であつたのである。

◆新聞風聞記

三木一章

○京日主幹の笠神氏……社内では、大邊な信望を有つてゐる。

○鳥渡見ると、頗るブツキラ棒だが、人間は至極涙もろく、泣きつかれると、イヤといへぬ味がある。

○で、皆困ると、一齊に氏のところへ持つて來る。私財を投じて助けてやる。

○今は、京日、毎甲、セツルブレス三つの經營に關係してゐるが社のことといふと、一錢の浪費でも喧ましく、「それア君、筋が違ふ」といひ出したら、テュでも動かめさうだ。

南歐旅行の一齣

平尾壬午郎

(遞信局)

【三八】

米がとれるではなく、生活必需品は主として内地からの供給を仰いだのだつた。

○その頃の京城。
○日清戦争を一轉期として、俄然仁川を凌ぐまでは、京城も多分にお粗末な存在であつた。

○公使館の宴會で使ふソースもわざ／＼、それも早馬で仁川からとり寄せた話や、宴會毎に、仁川の醫者に御足勞を煩はした話などは、余りに人口に膾炙してゐる。

○先づ、京城へ行くには、仁川警察署に届け出ねばならなかつた三日目に、辛つと鐘札が下りた話や、或はとう／＼下りなかつた例などもあつた。

○仁川、京城間の道中機關。馬と輿とそれから徒歩(?)と……大てい入付馬で行つた。賞銀は三圓ぐらゐで、梧柳洞で人馬諸共食をしたためたものである。

○輿はよく／＼の人でなければ乗りなかつた。一挺二十五圓もしたよりである。年に二度ぐらゐ、やんごとなき人の御道中で、拜見するとはあつたが……

○徒歩はひどかつた。疲れる事よりも、鮮人のいたつらで弱つた悪口を云はれる分は平氣だつたが石を投げられるには閉口した。

○いつたい、日清戦争以前の鮮人對内地人の關係は、餘り結構なものではなかつた。支那人は、所謂『大國の人』で、随分うけてゐたが……

○そして、我々も今と違つて、支那人には一目も、二目も置いたものだ。
○それが戦後、全然反對になつたのだから驚く。と同時に、其處に鮮人氣質の一端が覗はれる。

私が昨年夏南歐の旅行中、最も深く感ずると同時に豫想を裏切られた事は、伊太利に於ける鐵道が非常に正確であり、その大半が電化されて居り移動警察や、停車場に於ける保安が能く行き届いて居ることでありました。嚴めしい服を着たポリスや所謂黒シャツ團員などが驛毎に出張つて取締つて居て何等危険を感じませんでした。それに列車の速力が非常に早く殊にローマとナポリとの間は普通は五時間以上もかかるところを特別最大急行で僅かに二時間餘でナポリに着きますので、これは世界

で最もスピードの速かなるものと稱せられ、鐵道専門の技師も、之れには一驚を喫し、流石にムツツリーニのやりさうなことだと言つて居りました。
ローマのバチカノの法王廳の博物館やサン・ピトロの大伽藍等は實に偉大なもので、その壁畫や彫刻は世界に二つと得られざる寶物であります。またボンベイの廢墟を訪ねてその股盛なりし往古を偲び、ヴェスヴィアスの噴火を背景として、ナポリの海邊の夕景色を眺めつつ、今尚思ひ出深き南歐の地を去つたのであります。

京仁昔話

田中翁談

○田中佐七郎翁と云へば、古きに、大きさに、仁川でも有數の貿易商だが、一日、翁に舊い仁川のお話をして頂くと、『そりやもうお話にならんで嘯り……』、懷舊談の定石として、話は先づ、苦しいおもひ出から始まる——
○翁も曾てはアンビシヤス・ポイイであつた。そして、明治十六年(開港の年である)郷里薩摩を棄てて啓蒙の港仁川へ……
○さて閑話休題

○その頃の内地人は、僅かに二百三十人に過ぎなかつた。
○そして、大きい方では、仁川を今日あらしめた慶田組を始め、小さい方では、床屋、小商賣屋、料理店等々に至るまで、何れも啓蒙期の苦闘を負はされてゐた。
○事務所や住宅は寔にすさまじいもので、夏、繩を左手の團扇で逐ひながら食事をつつたものである。
○内地との通信は月一回、懐しい故里の便りを滿載して、舟が沖合に現はれた時の興奮は、今だに胸に鮮かだ。
○輸入品は總べて牛皮、砂金と交換された。勿論、今日のように

春宵記

グ、イン、ゼ、サザン、ジャーマニーを思ひ出す。どこかにナイチンゲールは聞えないかしら。

春宵記

神尾式春

(總督府社會課)

薄暮だ、ややつめたい、さはやかな風がどこからか吹くとはなしに流れて来る。空には——仁王山の男性的な屈曲の上には、未だ薄明りが美しく残つて居る、冷やかそくな感じのしたT侯爵邸の例のゴチック建ても何だかクリスマスケーキか何かの様に見えて親しげな感がする。立ち並ぶ泥楊もすつかり新しい緑が芽ぶいてつめたえうだつた白い幹のはだもなまめいて来た、温泉の煙の低く漂ふ家々の前庭には李や梨の花が白く浮いてゐる。生垣や種込や、さては築地のかげなど至る所、連翹の花が眞實に燃えたつて、漸く迫つて来る夕暗の中はつきりと照り返して居るのもたのもしい。

眞實な連翹の花は、むしろ狂的といつていい位に、咲き誇つて居る——厳かな朝鮮の春にはふさはない程に。折り取つて、露地に置いて、階段を埋めて、ウエランダに散らして、『死の勝利』のジョルヂヤが人を待つたエニシダを思ひ出さすやうに——連翹よ、おまへは矢張りアフリカの島から来たのか。

白衣の人が薄明の中を歩いて行く——風に御したかの様に、かるくさはやかに春の宵を行く、その内の一人が突然近づいて来て、私の抱いて居た赤坊に笑いかけて行つた——お何とした素朴なガストフロインドシヤフトよ。げにこ

合に現はれた時の興奮は、今だに胸に鮮かだ。
○輸入品は纏べて牛皮、砂金と交換された。勿論、今日のように

ものだ。
○それが戦後、全然反対になつたのだから驚く。と同時に、其處に鮮人氣質の一端が覗かれる。

この春の宵は、脂粉や厚化粧の春ではない——純白な、寧ろ青白い素顔の春だ、しめつぽい臘月夜ではない——さはやかな星月夜だ、ほんぶりでなまめかした枝垂櫻ではない——宵暗にくつきりと浮いて居る李の花だ、梨の花だ、牽直な白い朝鮮櫻だ、淡い春の感傷ではない——すこやかな春の伸張だこんな晩、私は、少年時代に愛誦した、ロングフェロウのスプリング、イン、ゼ、サザン、ジャーマニを思ひ出す。どこかにナイチンゲールは聞えないかしら。
「想ひは更にグリーヒのソー、スプリングに陶醉するのだつた、寒い、暗い、寂しい、そして長い大陸の冬を味つてこそ北歐の樂匠の響を頌つた心持がわかるのだ、五度朝鮮の春を迎えてこの心持はいよいよ切實に感ぜられる——しかしこの曲をしみじみ味はせて呉れた久野久子史は今亡き人だ、薄命の樂人が死んでもう何年にならう。
夜は更けて終點の電車の音も間遠になつた。どこからか砧の音がすかかに聞えて来る、嚴肅な春の宵だ。

◆おもひ出草

漢江漁郎

○旭町護国寺の都守師は、アノ方面での新知識であり、また屈指の雄辯家でもあるが、先年列車中で、大阪者から、ヒョんな質問を持ち込まれ、これには、ハタと參つてしまつたといふ話だ。

○丁度有嶋武郎氏の情死した頃だ。山陰線の列車の中、大阪者三四人頼りにこの事件を論評する。甲は、情死の崇高なることを主張し『わていかて、相手さへあればナー』と大に感奮する。と、乙は『そやかて』とこれを制し『女は人の女房やないか。お前、お前の女房をとられたらどうや』と肉迫する。これを皮切りに、甲論乙駁二三時間もヘチャク……とど

議論決せず、同じ車中にゐた都守師に、『この上は、御出家はんに聞いて頂く外はない。和尚はん、こりや一体どうなりまつ……。エ和尚はん』、甲派と乙派と、右左から詰めかけられ、流石の都守師も『ム、ム、ム……まあ皆さん、しばらく頭を冷やした上で、罵つてよい御相談いたしましたせう』
○以來……昔話の出るたびに、『私も有嶋さんには、往生した』



母の禮讚

高橋濱吉

(總督府學務局)

四月十八日發行の大母紙は「花に狂ふ群衆を分けて、母を背負ふ孝行判事」なる見出しをつけて、岡山地方裁判所津山支部の山岸判事に關する記事を載せてゐる。讀者は之を何と讀んだであらう。

近松付「心なき畜類も鳥は古巢を慕ひ、北國の馬は北風に嘶くとは申さぬか」と言ふた。確かになつかしいものは故郷である。鐘守の森、小川のさゝやき、野中の一本松村はづれの水車小屋、何一つとして我を故郷にづながぬものはない。然し其のあこがれの中心となるものは、矢張り母でけなからうか。大母のあの記事を讀んで私は冥想しばし故郷をしのんだのであつた。

母と子との間、純粹なもの、此の世の中に存在しない。母の思ひは純にして、子の念ひは清く、母の愛は全くして子の慕は深く、母の力は洪大にして子の敬は無邊である。人にして母たり子たる者は尤も幸福である。

母は創造であり、感激であり、希望であり、慰安である。如何なる下等な動物に至る迄も、子から見た母は、人の母と同様である。我等は母あればこそ生長し、榮えるのである。我等の心から母の姿の消えた時こそ、我等は世の中から存在を失つた時である。眞に吾等の女王は母其人であると言はねばならぬ。

釋迦は摩耶によつて生れ育まれた。基督はマリヤによつて生れ育まれた。釋迦も基督も母の膝にそたつたのである。

然しカイゼルリッパ伯やハーンの言ふた様に、世界の中で日本に於ける母こそ最も誇るべきものである。鶴見祐輔氏は『母』

の中に「想ふに日本の女性がカイゼルリッパとハーンとの嘆賞を博したのには、日本の女性たちが、永い間惱みぬき、苦しめぬいてきた結果である。ほゝえみつゝ、苦しみを忍んできた日本婦人の靈の中に、ある高貴なる光が輝いてゐて、それが直観力鋭き人々の眼に映じたのである。即ち今日日本女性の美と徳とは、たゞ無代價に天から降つてきたものではなくして、二千五百年來の涙の結晶である。その涙を最も多く日本の女性が流してきたのは、戀人としてでもなく、娘としてでもなく、妻としてでもなく、公人としてでもなく、實は母としてである。私は固く信ずる。日本人に偉大ありとせば、それは母たる日本女性の賜物である」と述べてゐる。實にこそ。

玉 石 同 架 東 京 漫 話 千 山 房

○西園寺公が興津の座漁莊、京都の清風莊における私的生活を活動に映寫して珍藏してゐるのは紫川伯たけで、門外不出として誰にも見せない。後に原田男も撮らして貰ふたが男は遠慮してうしろ姿ばかり寫した。

○洒落な老公「小笠原伯は前から撮つたが、お前はうしろからだネ」とヤヌしたとか、この二卷を合せたら眞に公の面目、趣味生活の全面を千載に傳へることにならう

○後藤新平伯の恩顧を受けた阪谷男、永田、新渡戸、水野、内田、宮尾その他數十氏は、伯の徳を偲ぶべく『天真會』を組織し、毎年一回追悼會を開くさうだ。第一回は伯邸で開くさうだが、發起人の一人某君のいはく「こんな會はまあ七回忌位まで續ければいゝよ。その時分には會員の大半はこの世の人でなくなるから自然消滅さ」

突入の喜劇

停止する處を知らず、豫備卒の前まで来た。豫備卒は少しも驚かな

笑へぬ喜劇

都守 泰一

(旭町護国寺)

志願兵として輜重隊に入つてゐた時の話。

○ 今まで初年共と一緒にマゴツいてゐた志願兵も、二年目には豫備の見習士官として勤務するやうになると、待遇が全然改まつて、同年兵や故兵から羨まれる事が夥しい。第一外出の時は衛兵司令が氣門を付ける。部隊を引率して衛隊に軍隊でなければ見られない得意な時である。

○ 或る日の野外教練、それは輜重隊で一番勇壯なる縦列演習である。中隊長指揮の彈藥縦列に向つて假設敵として騎乗の志願兵若干名、その指揮官が豫備役の見習士官。

さて演習は開始された。廣い練兵場を指して、長い鞍馬の彈藥縦列は肅々と前進する。中隊長は先頭に立つて馬よゆたかに四方を睨みながら今や練兵場の真中まで差し懸つた。

時分はよしと假設敵の見習士官は襲撃命令を下すと、一隊の志願兵は何れも抜刀して、山蔭より躍り出で、鯨波の聲を擧げながら、一直線に縦列を自懸けて襲撃する。馬は何れも最大速度を出して砂塵を巻きながら突進する。爲に馬上の勇士は悉く我れを忘れて、得意の頂點に達し唯わが耳の鳴るのを覺ゆるのみである。

○ この襲撃を喰つた縦列は大抵狼狽するのであるが、流石に中隊長指揮下の縦列は違つたものだ。右に車陣を作れ！、豫備卒集れ！、といふ號令と同時に、各車輛は一糸亂れず圓陣を作り、騎銃を手にせる豫備卒は左側に散開して、襲撃部隊を一齊に射撃する。この動作は眞に一瞬時ともいふべきで、流石の騎兵襲撃も縦列を突破する事能はず、その儘方向轉換をして一地點に引き上げ、切齒扼腕。

○ これはほんの序幕である。くやしまぎれに幾度か攻撃を重ねるもその都度、空しく撃退の悲運。この日の演習はかくして縦列側の大勝利。演習やめ、歸營の號令は下つた。

○ 然し納まらないのは見習士官の胸の中。一つ歸營の途中を襲撃してやらうと、窃に領きながら、縦列の後姿を見送り、直に道を迂回して馬を早め、丁度縦列の先頭が營門の前に對し懸つた時、それといふ合圖と共に縦列を襲撃し始めると、中隊長は突壁の間に縦列を營門に誘めず、右折して方向を轉ぜしめ、豫備卒を集めて、一齊に射撃せしめたが、こゝに皮肉がある。

○ 豫備卒を斜の一線に配置して射撃せしめた。一端は自ら營門に導かれてゐる。眞一文字に歩歩を逐ふて、肉迫した見習士官の馬は、

停止する處を知らず、豫備卒の前まで来た。豫備卒は少しも驚がないで、其儘射撃する。馬は自然に斜の線に従つて、頭を營門に向けた。自分の隊まで歸つた馬は、そのまゝ勢ひよく營門に駆け込みました。馬上の士官は驚いて馬首を返さんとすれども、馬は一向聞かない。

○ その内に表門歩哨は捧げ銃をする、司令は氣を付けと叫んで、直立不動の敬禮をすれば、衛兵所は時ならぬと騒ぎである。

○ この有様を見た中隊長殿は、計略圖に當つたとばかり、ニコクしながら、

『見習士官、どこにゆく〜』

○ かくして見習士官の笑へぬ喜劇は、全隊の一日の勞を感むるに十分役立つた。

◆醫界風聞記

漢江漁郎

○ 京城醫界のお歴々で、近い中博士號を貰はうといふ人々。曰く鶴海元則さん、今村豊八さん、本田建義さん、衣笠茂さん。——いづれも論文提出中。

○ 次に、醫界の人々で、堂々自動車で乗り廻す人。曰く和田さん一色さん、本田さん、菅さん——いづれも自家用です。

○ 一寸珍なのは、旭町の櫻島さん、この人は、夫妻ともお醫者さんですが、これは勇敢にも、オートバイでブツ飛ばしてゐます。

○ 醫師會も、先頃役員改選があり、阪井清博士が會長、酒井一郎先生が副會長、片山さんが理事に推されました。

京城近郊

長谷井市松

(朝 鮮 銀 行)

【四二】

興天寺より
華溪寺まで

さ、やかな一路の溪流に沿ふて上ると、そこにはもう草が咲き競つて居り、山菊や、龍膽や、桔梗や女郎花や、其他限り知られない程の、草々の芽が新生の悦びに榮えて居る。

東小門外から小山を越えて私達は、今春の陽射しの和やかな閃光の下を歩いて居る、四月三日神武天皇祭の午前のことである。
見渡す限り土壇の上から、樹々の梢から、小川の流域から、ありとあらゆる森羅万象から、春と云ふものが眞に強烈な陶酔力を放射してきて、全宇宙が亦歡喜と祝福で呼吸する様に感じられ、木の根や麥の芽が、ずん／＼伸びあがる大生命の力を感じ得る程であるで村落の背戸に今にも一面の黄金色を撒き散らしそうな、あの連翹から定めてばつと儼かな響きをたて、居ることだろう。そうしてあの靈覺きの丈底い民屋の前に、桃色のチヨリを膚たキチペーが、ちよこなんと起つて居る姿を想像してみ給え。

私達は山又山を踰えて徐に緩やかに歩みを運ぶ、見よそこには早咲きのワイルド、アネモネのダイク、クリムソンが妖女の唇に似た微笑みを見せて居り、猫柳の穂が銀色に輝き、ロージー、パーブルの早咲蘭陽、がもう到る所に繚亂として咲き交はす。微風がさら／＼と木の間を亘ると、甘つたるい葉摺れの音が私語いて、萬物悉くが靜かな心地で祈禱を捧げて居る様だ。小松の生い茂つた林から

策で、こゝに兩個の寺院を發見した類なものであつた。
山を下つた所にさ、やかな小川

て来る、和かな春の景色だ。左手

一字の互利を見出した、興天寺と記されて居る、清閑な境地であるさながら末寺に髣髴たる十數軒の家屋が建設されて居る。最近の流行は寺院を解放して料亭を建設した、興天寺も亦それである。陸々たる勢で、今や春と共に、建設の斧鉞の音が高く響ひて居る。斯くて清閑な境地は、今や巷頭營利の天地と化した。私達はそこから又山中に這入つて行つた。そうして稍なだらかな山峽に下つた時、赤松の茂みから、狡も一疋の黒栗鼠が跳り出して、直に赤松の梢を攀ぢ登るのを見た。私達は此突然の森の棲息者に、無上のインテレッサントを覺えた、栗鼠は豊富な尾を房の垂れた耳を動かし乍ら、枝から枝へと巧妙な跳躍を試みた。

微かな煙が擧つて居る、近つきみるとそれは薬水の所在地だつた一人の老鷹が木の葉を集めて、晝餉の支度を整へて居る、友の言葉によれば、此水でご飯をたくと、諸病が治ると云ふ一種の、云ひ傳へがあるのだと云ふ。道理で今向ふの山徑を、諸道具を頭上にのせたオモニー達が、とぼ／＼と上つて来る、和かな春の景色だ。左手を望むと一つの御陵がある、松林亭々としての寂びた境地である貞陵と云ふ。菊藪が十數羽となくチチチと愛らしい聲をたて、松樹の間を飛び交つて居る、四十雀が折々頓狂な聲で春の空気をませつ返す様な囀りを試みる、澤の近くでさながら鈴を振ふ様な、小鳥の囀鳴を私は聞いた。遠く山上で聞いた時に、私はそれが大瑠璃鳥であると思つた、近づいてこれを聞くと、女郎燕のその様でもあつた、私け靜に松樹の下に隠れてそれを確めようとした、けれども鳥は私の姿を認めて向ひの谷に移つた。而して又直に歡喜に溢れた包みきれない愉快さを囀り續けた、私は又その銀鈴のあとを訪ねて、小鳥の姿に憧れた、鳥は松樹の頂で、チリ／＼チリンと餘韻を流して囀り續けた、私は鳥に氣どられぬ様、そつと枝頭をのぞいてみると、それは全く常備であつたのだ私は全く幸福を感じた、松林の間を縫つて最後に禿山の頂に起つと一望豁然たる天地が開けた、見よ迷濛たる春霞の中を通して連續する街道、起伏する丘陵、さながら鳥嶼の如く點在する民家、而して大地の上さまよう絲遊の間には色々な大自然の歌聲が發して居り微風は和かに吟じ、水は徐にせ、らいで、獸の泡を漑多て居る様だ、で今私の起つ禿山の黄砂の中にはさながら金剛石の様に、雲母がキラ／＼と閃いで居る、私達はそこから又、急峻な山坂をひた走りに下つた。而してそこにも宏壯な堂宇を發見した、それは奉國寺の伽藍であつた。一境幽邃の別天地で人語なく鳥聲なく、全く寂寥高閑の姿であつた。私達は思ひ設けぬ

人蔘薺では

く、と木の間に居ると、上つた
い葉摺れの音が私語いて、萬物悉
くが静かな心地で祈禱を捧げて居
る様だ。小松の生い茂つた林から

策で、こゝに兩個の寺院を發見し
た様なものであつた。

山を下つた所にさゝやかな小川
が、清冽な水を湛えて涼々と流れ
て居る、オモニーが一人、白衣を
濯いで居た、私は途端に彼岸の飛
石の影に隠れた、小さな黒い玉の
やうな小動物を認めた、私の歡喜
は絶頂に達した。私が飛石の近く
に進んだ時、その小動物は玉を投
げるやうに、つい直ぐ近くの石垣
の穴に隠れて行つた、私達は石垣
の穴に手を入れてみた、後にはス
テッキで突いてもみた、私が殆ど
絶望からそれを見捨てやうとした
瞬間、機を見るに敏な彼は、慌し
くも穴の中を逃れて、向ふのボブ
ラ林の茂みに姿を消した。それは
小鳥の中でも尤小さな形体の持主
で、鈴物の王者と讃へられ、曾て
は私共をして其風貌の哲人的なる
ことを、賞讃せしめた彼の三十三
才であつたから。

私は或日チューリンゲンの方か
らワイマルへと、ある林の中
を歩いて居た、と偶ま叢の中か
らまるでボールでも轉ばすやう
に、小さな黒いものが驟々とし
て飛び出すのを見た、それは丁
度真を離れたばかりの、三十三
才の雛の數羽であつた、私はそ
れを捕まて大切にハンカチーフ
に包んで、それから又ワイマル
の方へ向つて行つた、途中小笹
の茂みに來かかつた時、此小さ
な雛鳥は、巧に私のハンカチー
フから滑り抜けて、凡てが逃じ
してしまつた。私はものゝ十分
餘りも捜査を續けたけれど、ソ
レは徒勞であつた。一週間の後
私は又或る事で、そのあたりを
掃つて居た、すると向ふの林の
中で、駒鳥の呼聲を聞いた、

があるのだと云ふ。道理で今向
ふの山徑を、諸道具を頭上にのせ
たオモニー達が、とぼくと上つ



總督府
專賣局

發賣元
貴生堂藥品店

京城本町二丁目
（電本一三八番）
（振替七六一番）

人蔘劑では
一も二もなく

精製の蔘精
に限りませ

恐らく駒鳥の巢が此あたりに在
るに違いない、斯う思つて私
は捜査を初めたのだ、すると驚く
べし、ソコには駒鳥の巢の中に
ソレラの雛と一所に、丁度一週
間前、私のハンカチーフから滑
り出した數羽の三十三才が、行
儀よく並んで居るではないか、
私は驚きと喜びの情で高潮した
駒鳥は此の數羽の雛子を、平等
の愛を以て育て、居たのだ。私
は一種崇高な感じに打たれた、

これは私が二十四五年も前に讀ん
だものゝ記憶の梗概であるが、今
日も私は久々に此小川の詩りで
三十三才に出遇つたことの嬉しさ
から、此物語を同行の友にも語
つた事であつた。實際アノ林中の
黒栗鼠と鶯の歌と、此三十三才
の出現によつて、此一日の收穫が
如何に大なりしかを、私は神に感
謝せずには居られなかつた。ソレ

程私共にとつては自然は大なる師
父であり、慈母である、自然即神
と云つたやうな考は、極めて古い
思想であるかも知れないけれども
私はそうした感銘を持つなども
話し合つた。

此あたり一圓の果樹園が、春の
輝やかな日光に照らされて居る、
所の名を問へば貞陵里と云ふこと
であつた、私達はそこから姑く村
落に沿ふ溪流について上つて行つ
た、由來私達の散策は、全く無目
的に近いものであつた。行きあた
りばつたりであつた、けれども今
日の行程は大体に於て蕪溪寺に行
つて、ソコで午後の食事にありつ
くことであつた。私達は何處と云
はず、春の自然の申を歩行する事
で十分の悦びを感じた、どこを
どう歩こうと勝手であつた、友は
私に云つた、大凡散策のしかたに
二様式がある、初めから一定の目
的を定めて遂行するものと、處定
めず歩行するものと、そこで私は
答へた、私の散策は尤多く第二の
場合に屬するのだ。而してソレが

【四三】

又、私自身への人生々活の様式でもあり、私はいつも無目的に所定めず、人生を旅から旅へ漂泊する一介の放浪者に過ぎない、従て又ソレが結果として、當然持ち來さるべきものは失敗者、敗殘者のみじめさに外ならなかつた。私は友と顔見合せて淋しく、併し又元氣に笑つたことであつた。

幾個かの山又山を越え、谿を渡り、幾つもの小川を過ぎつて、今や最後のコースたる華溪寺に到達した、南面の溪合ひを一筋の溪流が水晶のやうな澄明な水を湛えて涼々と流れて居る、如何にも幽寂な山中の野景である、浩蕩の春趣が今や此あたりに充溢するかと覺える。私け寺院の本堂に就て禮拜した、鐘の音、經の聲、春晝の山寺の午後には、ソレは全く適はしいものであつた、庭の廣場にけ牡丹がもう蕾み芍薬が芽を延ばし、櫻も青白くふくらんで居た。

私達は山寺の直後、連翹の花咲く樹下の芝生で、華溪寺の末寺でたかした暖いご飯で、空腹を満たすことに十分の興味を持つた、朝鮮料理の珍味が凡そ二十種も列べられた、野趣の深いものであつた試みに擧げてみれば、桔梗の根、むした蔞の葉、其他野生植物のあるもの等々——私達は花蛇のかすかに唸る聲を聞き乍ら、靜に山中の響餉を貪食した、二人分一四〇錢、ソレにチップ一〇錢、大枚一五〇錢を投じてアデュー、アウフウキーダーゼーエンを述べて、午後の四時に此閑寂な山寺を下つたソコから牛耳洞へはもう半道ばかりの道程であつたらう、北漢山脈白雲、仁壽の高峰、さては涇峰山の峻嶺が、私達の眼の前にあつた路は山又山を踰え、思ふさま道草

を食つたので三時間を要したが、歸路には一時間四十分で、東小門を踰へて高麗前へ歸りついた。

一日半日の行程で、斯うした山寺の靜寂を味い得ること、何と云つても愉快なものであつた、況や涼々たる溪流、颯々たる松籟、樹上囀り鳴く小禽の謳、白雲、青空、太陽——苟くも徒歩趣味を解し、春空一如大自然の懷に浸りた

◆人間風景帖

漢江漁郎

○京城土木出張所の本間所長は現に漢江の人道橋を造つた人だが鮮内の目ぼしい橋は、大抵氏の手で完成したさうだ。

○平壤の大同橋も、先年氏の手で出来上つたが、それが九分通り竣工したところで、例の大正十二年の大洪水が殺到した。

○そして濁流は、滔々として橋を洗ふ、今にも押し流されさうだ市民は、橋際に押し懸けて、『所長さん、どうです。助かりますか』といふ。

○この時、本間さんは、衆に向ひ、『皆さん、橋は大丈夫です。私に自信があります。若しものです……萬に一ツもです……この橋が流れたら、私もこの儘、オメクとは生きてゐないでせう。皆さん私を信じて下さい』、凜然として彼はひきました。

○そしてさしもの大洪水も、遂に橋を如何ともすることが出来なかつた。

○『全くアソ時の本間さんは、一箇の英雄でしたナ』と、平壤の某氏は隨喜する。

【四四】

いと願ふほどのものは、一度是非に行つてみたまへ、必ず諸君を失望させるものではあるまい、營々たる俗生活の餘塵を一掃することが、如何に我々の人生生活への福音であるかよ、若夫れ所謂人生の春を味はんとすれば、又ソコには別個の享樂機關が待ち設けて居るだらう、私は併しソコにはそつした叙述の筆を省く。

○三井物産の板井さんは、陶磁器に深い趣味を有つて居り、多年その方の蒐集をやつてゐる。

○尤も、板井さんはこれを蒐集するに、澤山の金はかけぬ。『まア一個當り二三圓ですネー』といつてゐる。

○ところで、アスコの店長住井さんは、この方の權威で、これは特別いいものでなければ買はず。買へば、數千圓、數百圓少しも惜まぬ。

○ソコで、板井さんにはせると、『どうもウチの店長などは、氣前が上過ぎていかん。店長が一個買ふので、我々は、數十個買へる。數十個買ひむといふ樂みは、實に大きいですからネー』

○それを住井さんに聞くと、『イヤネ々、骨董といふものは、そんなもんぢやない。ヤハリ始めツから、いゝもの、高いものを手に入れぬといかん。こればかりは數で行くものでない』

○或る人、住井さんに、『あなたなどは、大々的な揃出の御經驗がありますやう』、答へて曰く、『それは、極僅少……掘りそこねの經驗なら、いくらでも御話しいたします』

高山にたかく叫へは空の星もおちやしめらん虎の一聲

やまと歌

國風會京城支部

りの道程であつたり、北漢山脈
白雲、仁壽の高峰、さては消峰山
の峻嶺が、私達の眼の前にあつた
路は山又山を踰え、思ふさま道草

かつた。
○「全くアノ時の本間さんは、
一箇の英雄でしたナ」と、平壤
の某氏は隨喜する。

「それ」は「福僅少...」掘りそこね
の経験なら、いくらでも御話し、
たします」

折 蕨

○ 浅井佐一郎
いさ今日は春の山邊にもえたちし
蕨を折りて家苞にせん

○ 田中秀一郎
手をあけて招くに似たるさわりひ
を折るも樂しき春の野邊かな

○ 西田 明松
おもはずも春の山邊にもえいつる
蕨折りつゝ日をくらしけり

○ 今村 雲嶺
春山の花をたつねてかへるさの家
苞に折る野邊の早蕨

○ 濱野鐘太郎
思はずも深き山路に迷ひ入りをり
束ねたる春のさわらひ

○ 佐々木杏造
手折りてそ家苞にせむ雲雀なく淺
茅か原にもゆる早蕨

○ 清水 正徳
うなること雉子開きつつ春の野に
日影を浴ひて初わらひ折る

○ 工藤 武城
やみふして花にそむける吾友に折
りておくらん野邊のさ蕨

○ 安東都天子
霞たつ春の野原にたとり來てをり
し蕨を家つとにせん

○ 安東貞一郎
ひとつく折り添え行かむさ蕨の

十握りになるを樂しみにして

○ 松寺 竹雄

塵の世をはなれて山にもえ出つる
さわらひ採るもたのしかりけり

○ 中島 貞信

見出てはをらてやむへき野司の
おとるかなかに生ひし蕨も

○ 企 人

家苞にをりてかへらむ雉子なくあ
さらがはらにもゆるさ蕨

○ 足立丈次郎

さわらひの壑のふときををりぬと
て子等にはほこるもおもしろきかな

虎

○ 丈次郎

うち見てもものすこきかな深山路
の雪に残れる虎の足あと

○ 貞 信

檻のなかに山またやまの夢路をは
たとりゆくらん虎のねふりて

○ 竹 雄

かせ起り谷の草木もなひくらん高
根に吼ゆるとらの一聲

○ 貞 一郎

から國に二十年餘りすみぬれと野
にふす虎は見しこともなし

○ 都 天子

つゝ音に野にふす虎のおそれや
深山の奥に身をひそむらん

○ 武 城

高山にたかく叫へは空の星もおち
やしめらん虎の一聲

○ 正 徳

政前くなる世はから人の虎よりも
てふ言葉おもほゆ

○ 杏 造

ぬけ出てとひやかゝらむ書きた
る虎のすかたのすさまじきかな

○ 新 吾

折々は虎も出つてふ語ひに深山の
宿の夜は更けにけり

○ 鐘 太郎

さ夜深み尖れる山の月高く研えて
うそふく虎の一聲

○ 雲 嶺

照る月に嘯く聲もすさまじく猛き
けものは虎にこそあれ

○ 明 松

いかりなは山も裂くへき大虎もか
はるゝまゝに人慣れにけり

○ 秀 一郎

檻のなかに寝ふれる虎は高やまの
月にうそふく夢や見るらん

○ 企 人

夜あらしにうそふく虎の聲すなり
いわ根こゝしきから山の奥

○ 佐 一郎

草木もなひきになひく虎すらも
なるれはなれて人になつくか

水 邊 柳

○ 佐 一郎

池水にみとりの絲をそめかけて風
にあやおる岸の青柳

○ 秀 一郎

くしけつる風もなきさにかげさし
てのとかにけふる糸柳かな

○ 明 松

春風につゝみの柳枝たれてみとり
をひたす里川の水

○ 雲 嶺

池の面にうつる姿もおもしろくか
せにゆらるゝ糸柳かな

○ 鐘 太 郎 五本の門のやなぎの影うつる池に
ゆく川の水の流れに任せつゝ岸邊
に絲を垂るゝ青柳
○ 新 吾 春風にみたれしかみをなやましと
瀾を下る舟うた遠く消えゆきて岸
○ 杏 造 水鏡みるきしの青柳
池の面に緑のかけをうつせるは苔
○ 都 天 子 青柳の水にうつらふ影見ればなみ
もあやおる心地こそすれ
○ 貞 一 郎 里川の水底ふかく影とめて春の姿
むす岸の青柳の糸
○ 正 徳

【四六】

をうつす青柳
○ 竹 雄 水のおもに浮へる月をつらんとや
たるゝもななき青柳の糸
○ 貞 信 池のおもにたつさゝ波も見えずし
てのとかにうかふ青柳の糸
○ 丈 次 郎 いろいろのひれふる池に影さして
浪のあやおる青柳の糸

拗ねる兒

浦田多喜人

(三巴酒造合名)

◆面喰つた話

漢江 瀧 郎

拗ねると云ふ事は子供の我儘と思ひしに、近頃は總同盟、總罷業と云ふ多數の團體の力を以て拗ねるのには實に驚く。しかも智識階級の人々が國家公益の爲め常に不眠不休の繼續的通信事務に關する人々が同盟罷業とは何たる淺間しき事せう。京都郵便局の總罷業等能く拗ねたるものなり。公益を害する行爲國民として御互に慎みたまものなり。

全員委員會で原案賛成に纏りたる議案を本會議で壞すなど随分拗ねも拗ねたり。學校組合議員殿……

小學校の先生の中で其の生徒に向ひ、授業料を納めた人は手を擧げよと言ふと、納めた小供が元氣能く手を擧げるが、未だ持つて來ぬ子供は實に赤面して愧ぢ居ると云ふが家庭の事情も憫ばれて誠に御氣の毒な事である。

如斯事は學校として注意すべき事あらうと思ふ。段々子供が拗ねて學校に行きたがらないよふになるのはこんな事に原因するだらう。働く者は進み働かぬ者は退く。支那人を排斥するも朝鮮人の怠惰の習慣を改めなければ自由労働者として支那人の進出は止むを得ぬ働かないで拗ねると社會の同情を失ひ物質的にも恵まれぬであらう私の家の子供等も拗ねると朝飯も食せずして學校に行き、泣面して歸宅する。拗ねる兒は一時物質的に目的を達する事あるも、段々親の愛にも遠ざかる。

朝鮮新聞の荒卷君國境感問記事の一節に、三水川で警備の家族に『定めておさびしいことせう』『答』『御國の爲めです、總て犠牲にして居ます』と、何んと涙くましいことせう。定めし慰問使も涙を流したのであらうと思ひます。

之れを淋しくて嫌になりますこんな所には一日も居りたくありませんと拗ねた言葉を聞いたなら、慰問使も慰問が嫌になり世間の同情も薄らぐであります。

○世界の知名な地質學者が、皆んな亜弗利加に招待された。

○我が川崎博士も、無論その中にあつた。

○一行は、何ヶ月もかゝつて、亞弗利加内地の踏査をした。見學をした。

○いふまでもなくアッチは、焼けつくやうに暑い。でも、白人等は、先進文明國の紳士だ。セントルマンの威儀を崩すやうなことはヨモヤあるまいと、我が博士は思つた。

○ところが、大違ひ——ホテルなどへ着くと、アノ鹿瓜らしい白人達、先を争ふて眞ッ裸。シカモ肝腎なところもマル出で、平然として廊下や、ベランダなどを闊歩する。流石の博士も、參つてしまつて、『噫、勇敢々々！』

或る疑問

なのである。

がこの素人の私に解せない専門家の態度が一つある。當局者の處置に不審な箇所が一つある。それ

能く手を擧げるが、未だ持つて來ぬ子供は實に赤面して愧ぢ居ると云ふが家庭の事情も偲ばれて誠に御氣の毒な事である。

答「御國の爲めです、總てを犠牲にして居ます」と、何んと涙くましいこととせう。定めし慰問使も涙を流したであらうと思ひます。

毛問答などごとくマル出して、平然として廊下や、ペランダなどを闊歩する。洗石の博士も、參つてしまつて、「噫、勇敢々々！」

或る疑問

吉野彦三

(城 大 豫 科)

X

イギリス詩界の尖端を行くエデニス、シットウエル女史を訪ねた時のことである。京人形のやうな感じのする女史は、『實は二三日寝てゐたのですよ。種痘をしましてね、ひどい目に會つたんです。御覽なさい、まだ腫れてゐるでせう。』と云つて、白い腕をまくつてみせたのであつた。『なるほどね、ぢや矢張シヨオ氏の説の方が正しいと云ふことになるかも知れませんね』、私はさう答へながら微笑んだのであつた。イギリスでは種痘に對しても『コンシエンシアス、オブデクタア』の存在を許してゐるのである。コンシエンシアス、オブデクタアと云ふのは、まあ『良心的反抗者』とでも譯したらよいであらうか。例へば歐洲大戰のやうな學國一致と云つた場合でも、『祖國を愛せぬわけではないが、戦争に出るのは良心が許さぬから出來ぬ』と云ふ連中をさすのである。種痘の場合でも、『種痘と云ふことを知らぬわけではない。然し自分はたとへば痘瘡にかゝつてもかまわないから自分の意志に従つて種痘は御免蒙る』と云ふ連中である。そして有名な皮肉屋バアナアド、シヨオもさうした『コンシエンシアス、オブデクタア』の一人なのである。彼は説によれば、『ろくでもない科學者のでつちもあげた、わけのわ

からぬ種痘効力なんか信じられるもんか。そんなあやふやな學說の爲めに大事な身體をこわせるもんか』と云ふのであつて、文明國とは云ひながら流石思想自由の國だけあつて、英國にはかうした『コンシエンシアス、オブデクタア』は可成多い。『種痘せざる小兒の父兄は罰金に處す』なんて規則はイギリスには存在しないのである。

X

シヨオのやうな徹底した考方をすれば何の疑問もなければ、文句もない。『俺はかう考へるからかうするだ。萬一俺の考が間違つてゐて酷い目に會つたら、それは自分の罪とあきらめやう』と云ふんだから話は判つてゐる。

處が、例へば我が京城で、かうした考の存在は許されない。種痘を拒むことは許されない。チプス流行の際には、往來でとつつかまへられていや應なしに注射される。コレラの折然り、ペストの際また然りである。……と云つたからと云つて私はシヨオのやうに『ろくでもない科學者』を輕蔑しやう等と云ふつもりは毛頭もない。否それどころか私に科學萬能主義者なのだ。『専門家が良いと云ふから良いだらう。醫者が效くと云ふなら注射したらよからう。とにかく此方は素人、彼方は玄人なんだから』と云ふのが私の主義

なのである。がこの素人の私に解せない専門家の態度が一つある。當局者の處置に不審な箇所が一つある。それは『科學萬能』を標榜し、豫防注射を強制する京城府管轄内の病院に於て『おばさん』と稱する種族の存在を默許してゐることである。

抽象的に云つても判りにくいかも知れないから、些か家事不取締を公開する嫌があるが、最近自分の一家に起つた例によつて述べやう。前月の末自分の幼女が病氣に罹つた。發熱數時間内に醫師の診斷を仰ぐと『チプテリア』との事だ、速刻入院もさせ、血清注射もして貰つた。醫師も明敏であつた。係の看護婦も熟練且つ親切の人であつた。お蔭で旬日にして全快、退院することが出來た。……とかう云へば何も文句を並べる必要はないやうだが、私は幼兒の入院中懸念で仕方のない、不安で仕方のない一事があつた。それは前述の『おばさん』の存在である。幼兒に附添の『おばさん』は人の好い親切な人であつた。此點について自分は些の疑問も、不安も抱きかけない。然し『おばさん』は何處までも『おばさん』で、『看護婦』ではないのだ。相當の教育、訓練を経た『トウレインド、ナース』ではないのだ。消毒液に關する専門的智識もない。呼吸、脈膊、熱の相互關係も十分知つてはゐないのだ。彼女は唯少しばかりの經驗を頼りに病人の傍に附添つてゐるに過ぎないのだ。自分の幼兒の場合には幸に病症も軽く、全快も早かつた。然し『おばさん』の無教育、無訓練の爲に折角の醫師の注意も、看護婦の配慮も一刻にして

無に歸すことがない」と誰が保證し得やう。

科學萬能を標榜するなら何故に徹底的に科學を標榜しないのか？醫師に絶對の信頼を授け懸けよと云ふなら何故に病院内に『おぼさ

土地の話

末森氏談

『京坂府内の土地が、約三年経つと倍額になるそうだ』

『俺だって、金さへありや、これ位の不景氣は見事のりきつて見せるんだが……』

勿論、金のない人たちは。そして、世は堂々たる不景氣でございませう。

土地經營會社専務、末森さんは云ひました。

今時、そんなボロイ話があるもんですか！このぬけめのない不景氣行進が、なんで私等だけを置去りにするもんですか！

先づ、最近の動きをひとつ……

と云つたところで、實は、全く動きがとれてないのです。

上りもしない下りもしない——簡單ですが、まあ、かけひきのないところですよ。

民政張りの白詞でゆけば、伸びるための滞り(?)とでもいふんでせうね。

ん』の存在を許すのか？、それとも我が京城の醫界は未だ『おぼさん』の力を借りねばならぬ程貧弱なものなのであらうか？、私、素人の私は甚だ疑問に思ふのである。自分なり自分一家の爲のみで

× 十二年前までは、おもしろいこともありました、三年倍額どころか一年倍額な現象がザラにありましたがね。儲かつたのはその頃です。お巡りさんが、へそくりで、成金になつた話などがありま

すね。

× ともかく、あの頃の京城はまだ植民地的若さでも云ひますか、客觀狀勢が良かったんですね。

× が、ひとつ、こゝにあれをとりためたものが……

× それは、府内南山町三丁目、いまの京城ホテル、附近です。もと(三十年前)彼處は專管居留地と云つて、坪三十圓を稱し、なかなか豪勢なものでしたが、だんく中心の移るに伴れて没落し(勿論相對的にですが)二十年前尙且三十圓、十年から近頃になつて、辛つと七八十圓をねばつてゐます。哀しい例外ですね。

× 目下のところ京城の地價は、内地でいふと、岡山邊に當るでせう福岡の二分の一、東京では比較になりません。

× 府内で一當値の好いところですか？

× 勿論、鮮銀附近でせう。八百圓(?)と云はれてゐます。

なく、京城全府民の爲に心から疑問に考へるのである。そして『おぼさん』が『看護婦』によつて代へらるるの二日も通ならむことを望むものである。

山田氏の會

三木一彦

○山田新一氏の滯佛作品展覽會は、四月の五、六、七、三日間三越階上で開かれた。

○第一日イの一番に兒玉總監が見え、靜物一點を申込んで歸る。引續いて非常な客足？、永當くの大入りだ。

○作品に就いては、京日で、斯う書いてゐる。

驚くべき作品だ。作品の實價といはんよりその進境はまことに驚嘆にあたひする。もはや山田畫伯の畫壇における地位をあけつらふべき必要を認められなくなつた。文字通り斬然頭角をあらはしたからである。いはゞケタチがひなのだ。五日からの三越における個展を見て驚いたものは、ひとり記者のみではなかつたであらう。

全然同感である。

○ところで、當の山田氏の身上はどうなる？、本人は、住み馴れた朝鮮に、京城に、やつぱりゐたらしい。後援者も、切にそれを望んでゐる。ところで、學務局方面に、人材を引止める熱意があるかどうか。どうかそれがあつて欲しい。あるところを見せて欲しい。○朝鮮の名物山田氏は、朝鮮から失ひたくないものだ。

民政張りの台詞でゆけば、伸びるための滞り(?)とでもいふんでせうね。

か?
勿論、鮮銀附近でせう。八百圓(?)と云はれてゐます。

しい。あるところを見せて欲しい。
○朝鮮の名物山田氏は、朝鮮から失ひたくないものだ。

禿山禮讚

(その二)

今井眞太郎

(大阪朝日支局)

聖者は闇に隠れるといふが凡人は山に脱がれる方が便利である。

尤も京城附近の禿山ちア身を隠すよすがもないが高い處に上るだけで超然とする。安價に超世間の快を得られる點に於て『頭隠して尻隠さず』の禿山登りも自轉車で奔り馬上にまたがる伊と同上、誠に結構と申す。禿山禮讚を続けるのも氣が利かないが一週に一度の上りで雑踏の街から逃がれて頭隠しをやるのは萬更悪いものぢやないと爾云ひ、煙草を啣へながら安値に骨休みし得られる點に於て僕は山登りを大方に推稱し再び駄足を延ばす譯。

× ×

假りに小さな京城附近の山に——禿山に上るとする。そこには電話もない、飛行機やラジオは頭上を奔るが直接の交渉はない、電報が来ない、訪問客もないから我身一つが天地の中に放り出されて俗界と鳥渡交渉を絶つた體、そこで唯我獨尊を發揮する——松も岩も我物と心得。プレイスフルユーチリチーのある、清淨無垢な空氣(町壁に山氣といふ)を腹一杯に吸ひ込んで不淨な毒瓦斯(町壁に都氣といふ)を吐き出して什舞ふ先づ仙人になつて、次ぎけ岩に仰向けて眼を閉ぢる、と足下の方から松籟がゴウーと訪れては去り消へては湧く、その自然の作る幽音を味ひながら駄回るとする、松風

や……春の風……さらに出ない。それで結構だ。

× ×

犬でも曳つ張つて行くと更に妙である。石ころ一つ谷に放り擲げると御座んなれと雑林をくぐり分けて駈り降つて行く、樹の蔭になるので寫眞は少々都合が悪いが崖からヒョッコリ舌を出して上つてくる所などパチリと撮るのも面白い、時に野兎が飛び出して犬共はキャン／＼吠へながら追ひ駛る、禿山の有難さに追ひつ追はれつ活劇がチラリ／＼と露見する、死を賭して逃げる兎は大い身を全ふするし犬は口惜しがつて尙も執拗に鼻をく／＼させて探して廻る。

× ×

バター一玉と食パン持つて登り寒風を避けた芝生に陣陣作つて辨當を使ふ時枯葉を集めて堅くなつたバターを玉ぐるみ暖め溶かしつ喰ふ冬の日も思ひ出にならう。
城壁のくづれた處に立つ石門が製造するトンネル、風を入れ憩ひながら夏みかんをむく涼味は忘れんとして忘れ得ぬ三伏の楽しみである、或ひは赤づいた柿の實る一枝を肩に擔いで山路の歸るさに會ふ栗鼠の樹上りも秋の帝農を飾る好箇の畫題ではあるまいか、紅黄いろとり／＼が緑の若葉に織り交ぜだフランス式の水彩畫を見るやうな明るい春の山の美しさは貧弱

な筆致如何とも表現の法がないことは言ふだけ野暮であらう。

× ×

この京城にこれ等の自然美が春夏秋冬無技巧の姿態を以て我々を待つてゐるのに何にをクヨ／＼温突式の俵屋に贅居するかと思ふと自然を忘れてゐる人々が氣の毒でもあり引ッ張り出してやり度いと思ふ。僕に詩靈豊かならば禿山禮讚の小唄が卽る筈だが……。

京城よいとこ南山かすむ
霞む南山ベールをとれば
松の緑に櫻が交る
白い漢江を裾野に布いて
ゴロリと櫛に蔭枕
アリヤ京城々々

京城よいとこぐるりの山は
四季の眺をとり／＼に
白い帽子や青い衣
ホイ／＼追ひ出す兎狩
ボン／＼叩く洗濯の音
いつもニコ／＼立つてゐる
アリヤ京城々々

◆家賃したし

三木一彦

○竹添町の山縣健三郎氏の舊宅が、今あき家になつてゐる。
○ツイこの春まで、今西博士が借りてゐたが、他へ引越した。
○家は、古いが、何んしろ庭は六百坪からある。百姓のマネの好きな人には、持つて來いだ。
○山縣先生の來諭の一節……『なるべく雑筆の寄稿家に住んで頂き度候』、皆様……いかがです。
○オット忘れた、家賃々々、これは一寸お電話を……。

古楊州

加藤灌覺

(總督府事務局)

去る五月の十六日には、楊州古邑の維楊里で女巫の都堂祭があるとの知らせを受けた。早速秋葉教授を誘ひして朝の九時近くに京城を發つた。

京城から楊州古邑の維楊里迄は僅七里に足らぬ折距離であるが、汽車の利便を有してゐるのはほんの議政府迄で、それからそこへの二里餘りは、徒歩で行かねばならぬほどそれほど不便な土地である。

いつもながら汽車の窓から見はるかす沿道の景色は爽快なもので、知らず知らず淡い旅情が湧いて来る。維楊里に着いたのは丁度正午に近い頃であつたので、取敢へず知人の宅で軽い午餐をした、めて後、直ぐと其祭場へ駆つけ見て見た。

恰も其日の祭場になつてゐたのは、彼の古楊州の勝境王流山下の國師堂址で、東方遙に水落佛嚴天寶寺の諸山を望み、西の方には近く百濟時代からの大母山城が聳つて高陽の境を扼し、南の方漢離川の流域に沿つて、遠く廣州の群峰を俯瞰するなど、實に古來からの言傳へ通り、紺岳山護國の神の鎮まり在ます處として申分のない場所であつた。

私共がそこへ駆付けた頃は、最早都堂祭十二節次の中の一節次を了つた頃であつたが、其日の司祭をしてゐた首女巫の厚意で十分な調査を遂げる事が出来た。兎に角近郷女巫達のオール、スター、キヤストで、有益な資料を興へて呉れたのは嬉しかつた。其夜は女巫の客間を借りて一泊した結果

九時頃から十一時頃迄の間に都合好く還神賽の行事を見る事が出来た。さうして命臺福臺などといふ御神酒を戴いたりした。これも所謂郷に入つて郷に従つた譯なのである。

丁度其際の大監ノリといふ節次の中で、日本の昔の祭祀歌の中にある東遊(あづまあそび)の一の歌

「アハレ、オオオオ、ハレムナ、手をととのへろな、歌ととのへむな、榮えむのねえ」

に似た一段の古俗謡を耳にしたのは面白かつた。まことや百聞一見に若かず、朝鮮の巫祝などの研究には、一層それが大切であることを感じて来た。(五・四・一七)

東 京 近 信
紅 茶 旬
千 歌 山 房

○歌人橋田東隱
君この程川端龍子
君から柏にヒタキ
(小鳥の名)を描
いた一幅を贈られ
て非常な喜び方

○その晩ある結婚披露の宴があつて歸つて來ると、夫人と女中とが鬨の向ふから手をついて、『まことに申し譯ない粗忽をいたしました』と、もうおろ／＼と。『さてはあの繪が』と奥の間に飛び込んで見ると大駭な軸のヒタキの部分がベリ／＼に破れてゐる。

○訊けば一ヶ月ばかり前に女中が拾つて來た猫が眞實の鳥かと思つて飛び／＼してこの始末とわかり、『さあその猫を出せッ』
○がよ／＼考へて見ると、猫が間違へる程よく描かれてゐるのだと、今更龍子君の腕に心服し、以來會ふ人毎に『君龍子の繪は……』

私の渡鮮當時の思出

が私に申されましたには君に朝鮮人子弟のみの教育を依頼する豫定であつたが、内地人中学校設立の

私の渡鮮當時の思出

井上 要二

(京城女子技藝學校)

前々號に申したやうに私は鮮人男子の中等學校設立の任に就くべく渡鮮いたしました。京城に着きますと直ちに宋子の宅に参り、學校を創設するまで其處に宿泊することになりました。宋子の邸宅は倭城臺に接する南山町に在りまして御主人公たる宋子は前に申しましたやうに東京に行かれて不在でありました。宋子の不在中には同家を護衛する爲に内地人の警部一名、巡查二名が詰切りで其の外に宋子の一族郎黨數十名の者が日々何事を爲すともなく徒食して居ることを見まして始めて貴族の生活なるもの、警澤振に驚き且つ何となく悲哀を感じました。

私が宋子の宅に身を投じまして少時経ちますと、今は故人になられた湖崎喜三郎氏の訪問を受けました。同氏は其當時京城居留民團の學務係を勤めて居られた人でありまして京城に於ける内地人中教育に對する偉大なる貢獻者であります。同氏は明治四十一年には民團立として高等女學校を此の地に創設することを計畫し、其の成るに際し大阪府視學であつた三浦直氏を招聘して校長となし自らは一教員として兼務することとなつたのであります。現今は第一第二の兩高等女學校があり、二千にも近き生徒を有し、その上に女子實業學校もあり、龍谷高等女學校あり、彰徳女學校あり技藝學校も有

りまして、京城に於ける中等程度の教育を受ける女學生は三千を數ふるの盛況であります。湖崎氏が高等女學校を創設する當時即ち今より二十二年前に僅に數十名の生徒であつたといふことあります。

高等女學校が呱呱の聲を揚げました場所は今南大門小學校でありまして同小學校の一部を女學校に充當して數年間授業して居つたのであります。其開校式を擧ぐる時は生徒數は極めて少數でありましたのに、來賓は幾百を數ふる多數でありまして故伊藤統監を始め高位高官の方々の御列席の前で莊重なる開校式を舉行されたといふ事でありました。今も其の當時の寫眞が存して居ります。又其の式場に列席したる者より屢々其の當時の情景が今に記憶されて居る珍らしき話を聞かされます。湖崎氏は高等女學校を創設して其翌年即ち明治四十二年四月には民團立の中學校を創設することを計畫したのであります。其の時恰も私が宋子の依頼に應じて鮮人の中等程度の教育に従事することになつたのであります。

私が京城に到着しますと問もなく中等教育機關創設の議に付き湖崎氏と會見することになりました。同氏の語る所を聞きますと先きに宋子より聞きました要領とは全然違ふのであります。即ち宋子

が私に申されましたには君に朝鮮人子弟のみの教育を依頼する豫定であつたが、内地人中學校設立の議が起つたため、内鮮學生の共學をなすこととなり校舍としては一進會所有の建築物を無償にて使用せしむることに約束してあると。

然るに湖崎氏の言によればそんな事は決して約束しては居らぬ、内鮮人が一堂に會して教育を受けることは到底出来るものでない、建築物は無償にて借用することになつて居ると。私は宋子より聞きし内鮮人共學は其の當時に於ては困難なことであろうと最初より思ふて居つたから別に湖崎氏の言はれた事を驚きもせず不思議にも思ひませんでした。しかし建築物の問題と私自身はどういふ仕事をすることになるか、大なる問題となつて來ました。宋子は東京に行かれて不在故、協議することも出来ず校舍となるべき建築物はすつかり中學校の方に貸與せられ私が仕事をやる場所即ち校舍がなくなるのではあるまいかと大に憂慮いたしました。ところが幸に獨立門の東側に校舍として新築した光武中學校の建築物が存在して居りましたそれは極めて粗末なるものではあります。四箇の教室を有し、純内地式の建物でありました。獨立門の西側に宏大なる八角堂が存在して居ります。現今も有りです。この建物は政黨一進會員の政治を談ずる場所として建造されたものといふことでもあります。この建物を中學校に充當し別に其の側に教室を増築することになつて居るといふことでありました。

其の時の宋子の言と京城居留民團を代表せられたる湖崎氏の言とは全然一致せぬ爲に私は妙からず

頭を痛めました。其の真相を其のままに宋子に告白せんか或は約束不履行と言ふことになつて中學校の創設に障害を來す虞がある、この際は私が深甚なる考慮を要する所であると思ひました。そこで最後の策として内鮮學生の共學は

出來ぬが中學校の校長初め教諭の先生方に一週間に一時間若くは二時間位私の方の鮮人の學校へ教授に來て頂き、又私も中學校へ一教員として授業に行くことに協定し圓滿なる解決をつけて中學校を開校することが出来るように致しま

した。私の學校も陣容を改めて開校することとし、從來光武中學校と名づけてあつたものを私立漢城中學と改稱することとなし百餘名の生徒を教授すること、致しました。時は明治四十二年四月でありました。

【五二】

洪水と星

松井權平

(城大醫學部)

洪水のあつた後は豊年である。上流の塵芥が洗ひ流され氾濫した所に洗滌しそこに有機無機諸成分が浸潤して植物に當分の養分が出来た譯であらふ。原始時代に農耕稼穡の知識の幼稚な頃肥料を施すことも知らず一切天然力に依頼した時は正に此河川の氾濫した地方に水草を逐ふ游牧の民が先づ住居を定めて部落を作り社會が出来國が起つたとは歴史家の云ふ所である。されば『スメリア』、『パピロニア』は『チギリス』、『オイフラテス』河の間、『エデプト』は『ニル』河口。支那は黄河の沿岸、印度は『ガンヂス』河畔から文化の光がさし始めた。人類は火を使用するを得て萬物を征服し、火を利用して益々進み、海に浮んで商業が開け物資のみならず知識をひろめると云ふ具合に、風水先生ならずとも土に育まれ火で勝ち水と金で開けた譯である洪水が如何ばかり怖ろしく且つ有り難いものであつたかは古く開けた民族の間に遺る洪水傳説がその證左であらう。此洪水は治水は治山にありと當局の唱ふる如く水源の不毛な地方に甚しいと云ふ事

ある。『ガンヂス』は知らないが『ニル』の水源には『サハラ』、『オイフラテス』は『アラビア』砂漠に沿ふて流れ。黄河の上流に『ゴビ』の砂漠がある。此處が洪水の源で正に人類文化の育成の根源となるのである。雨の少い砂漠にも周期的に雨量の多い年もあつたのかと想像される。陸上交通の障壁となり後には寧ろ文化の傳播を防碍したのも大古は反對の作用があつたとしたら面白いものである。

『ドーデ』の小説に牧者の高原で星の話をして居る知篇がある。一弗本の『ウエルス』に大古に星學或は占星の發達が述べてある。農民には曆となり航海者には羅針盤であつた關係上早く星の知識の進んだ譯であらうが、牧者は高原の暗夜狼群來襲もなかつたから星をながめて居つたので消閑の觀察が知識となつたのもあらふ。平田篤胤大人の講演に我國神話に星の事が一向出てなく唯何かの古典に星男と云ふ名が一つあると云ふ事である。大陸の文化に比すると後れて居る我國の古代であつても星などの知識を既に持つたものが侵入して國をなしたのであらうが、一向之がないとすると不思議な事である。牧者の比較的進まなかつた所から見ると、此方面牧者が餘計に知識を持つて居なかつた爲めか或は曇り勝ちの空で星を觀察する事が少く次第に忘れられたものであらうか。

易の新境地

(承前)

來の豫想が不絶刀づけて、苦しい研究を耐めるから、續くのであります。

易の新境地

(承前)

岡村介石

(明治町小唄坂)

之はこの頃耳にしたことで御座
います、或人が、彼の有名なエ
ヂソンに對して、貴方は偉大な發
明家であります、何うしてアン
ナにイロ／＼の發明が出来ますか
と尋ねましたら、『私け考へるか
らです』と答へられたさうであり
ますが、私が滿八年と五ヶ月間考
へ抜いた經驗から思ひますと、エ
ヂソンの御答は洵に至言でありま
す。

人間は一種の神で御座いますか
ら、考へれば考へるほど、段々常
人的人智を超越して、神智が發動
して參ります。吾々人類は先天的
神智と、後天的人智と二つ持つて
ゐるものであります。先天的神智
(靈智とも申しますが)は賢明に
して、將來を知る先見の明があり
ますが、後天的的人智は愚鈍にし
て近眼的であります。

現代を文化とか文明とか申しま
すのは、皆な人智の現はれであり
まして、未だ人智の低級であつた
時代の、事象と比較しての優越觀
で、本來吾々人類が自然から付與
されて居ります靈智體から觀まし
たら、この文化文明などは、マダ
／＼淺蕪なもので、一萬年も將來
の人間から、サソ嗤はれることで
御座いませう。何しろ一朝にし
て五十億圓の富と、十數萬の人命
を喪ふ大地震を、搖るまで知らな
いであつて、何の面目があつて吾等
は萬物の靈長なりと、牛馬の前に

優越が誇れませうか？。

そんな淺蕪な人智眼から見ると、
現代のこの相が文化文明に見るか
へるのであります。一種の神であ
る吾々人類の理想と慾求は、高遠
な理想境を目標として居ります。
譬へ吾々は全智全能の神と、全格
まで發達し得ずとも、セメテ全智
全能の神の心が、讀める程度まで
には發達しなければなりません。

人類はソコまで發達し得る神智
を、現に付與されて居り又今後の
子女も付與されて生れて參ります
これは單なる介石の空想では御座
いません、私が永年の體験を基礎
として推測を述べたものでありま
して、人間には充分その理想境に
向つて、向上發達する自然性があ
ることを言明致します。

凡そ物事を發明發見するには、
三つの條件があります。その第一
條件は、目的物が國家社會的に有
用にして、且つ高價なるもの、第
二は研究の着眼點を誤らぬこと。
第三は、身命を賭して一意専心深
／＼考へることあります。

注釋の必要はありますまいが、
發明、發見する目的物が小さか
つたり、安價な物であると、成
功の瞬に努力効が少いと、中
途でその物を輕視して厭氣が差
し易いものであります。譬へば
これを成功したら世界一の名譽
を博すとか、又は何十何百萬
圓の富を得られるとか、云ふ將

來の豫想が不絶力づけて、苦し
い研究を慰めるから、續くので
あります。

次に研究の着眼點が違ふと徒ら
に苦心して不成功に終る虞れが
あります。

第三の身命を賭して懸らぬと、
情氣を生じて專念することが出
來ません、吾を忘れて專念しな
ければ、純眞の心になれません
純眞の心にならねば、神靈の加
護を得ません。又人間が先天的
に持つ靈智が發動致しません。
未だ世界に前例の無い、物事の
發明發見を致しますには、尋常
人智の推考に基いた丈では、不
可能で、必ず人類以上の靈智が
加勢して成就するものでありま
す。これは單に發明發見の場合
ばかりでなく、戰爭の策戰計畫
でも、敵に對する臨機の際置で
も、船舶の遭難の場合でも、お
醫者が難病患者に對する所置で
も、株式期米の相場觀でも、人
事の常非常を通じて、この靈智
を要せぬ場合は稀で、本人が知
らぬ間にこの靈智が、巧妙迅速
に作用してゐるものであります
人間は殆んどこれを感じせず、
唯、人智人力で物事を成就する
もの、やうに、人智の能力を實
際以上に過信して靈智の恩恵を
知るものは稀であります。

以上は私の易學研究に携はりまし
た動機と、その理由で御座いま
す

人間の氣質と 大氣の關係

御承知の通り天地間には大氣と
云ふものが、充滿してゐることは
知れて居りましたが、夫れが如何
なる作用をするか？に就ては、未
だ世界の學術界に具體的發見は、

水は活かば活山にありて、死水は死水にありて、
く水源の不毛な地方に甚しいと云ふ事

たものであらうか。

無かつたのであります。但し人間及動物がこの大氣を呼吸して生活を営んでゐると云ふことは、知られてゐましたが、私の申すのは夫れ以上の具体的は、たゞきを指すのであります。

然るにその大氣は、一は陽性的に作用し、一は陰性的作用をしてこの地球上に在る一切物心の、存亡消長を支配する偉大な力と關係を有つものであります。近くは地球自體の長久を宜くし、遠くは、宇宙全体の存在を然るべくする、例へて申せば、機械に於ける油の如き關係のものであります。雨風もこれが作用で起り、作物の豊凶も、これが爲めに成り、流行病の發生もこれが原因し、地震、噴火、大震災には、密接の關係をもち、また經濟界の好況、不況も株式、期米、綿絲、砂糖、銀相場などの高下も、直接間接大氣の消長變化の關係に由つて、發動を起し、殊にこの、大氣と人間の關係は、水と魚の關係の如く密接でありまして、水の動搖とその清濁が直に魚体に影響するやうに、陰陽大氣の變動は、直接人間の心氣に感應致します。

陽性的大氣の流行する時は、概して人心の昂奮を促して活潑な氣分を起さし、自然界の現象としては、旱魃、地震、噴火、火災等々を誘發し、社會的には、戦争、ストライキ的不穩の群集心理を挑發助勢するものであります。又陰性的大氣は、その反對に兎用人心の萎縮沈靜を促し、自然界の現象としては、風雨、寒冷の現象を起し社會的にはこの節の如く一般人心の緊縮、甚しきは悲觀的氣分を誘發し、經濟界不振の導因を爲すものであります。従つて陰性大氣の

流行する年にはかけ離はかりで、實際の軍事行動は起らぬものであります。

目下英國に開催中の軍縮會議は丁度時機に適したものであります。此會議の比率の關係その他に因つて決裂しても大氣關係から觀て、近年に大きな國際的戦争が起ることとは絶無だと斷言出来ます。

元來お互人間と云ふものは、母の體内にある時分から、本能に由つて、母の呼吸、母の精神、母の飲食物その他を通じて、妊娠中に流れてゐる外界の大氣を稟け入れて、夫れに因つて氣質つけられて生れるものであります。

従つて妊娠中の當年が、陽性大氣期間であれば、その人は概して陽性的氣質を多分に加味して生れ陰性大氣期間であれば、陰性的氣

川中島の話

三木一彦

○鮮銀の本本監事と、古田支配人——暮に於ては、木本氏が少しく強く、將棋に於ては、古田氏が聊か優勢。

○ソコで、この御兩氏が、偶々遭遇し、一戦を交へるとなると、話は、なか／＼や、コしい。

○古田氏甚で散々油を絞られると、『残念々々、今度は、これでやらう』と、將棋盤を持ち出す。

○この方になると、一日の長があるから、それこそ鼻唄交ちりて木本氏をいぢめる。

○スルト木本氏、『残念々々、さア今度は、モトへ還元ぢや』と碁盤を抱へ出す。しまひには、碁

質を多分に稟けて生るゝ。それが人間各自の、基本的氣質となるのであります。

【五四】

此點が人類原始この方、合理的に説明が出来なかつたのであります。心理學など申しても、此原理を發見してゐませんから、淺層なものであります。又孟子は人の性は善なりと云ひ、洵子は性は惡なりと主張して居りますが、之等も畢竟大氣の作用なるものを知らんから云へたもので、この兩子の説を譬へて申せば、片眼同士が出合つて、元來人の眼と云ふものは右の方が克く見へるんだ、イーヤ左の方が克く見へるんだと争ふたやうなもので、互に兩眼を具備した人の正しく見た眞理を知らんから、徒らに極端な眼子論を闘はすのであります。(續く)

と將棋と二番代りといふことなる。どつちにせよ、二つとも強いといふワケでないから、何處まで行つても一勝一敗。

○夜漸く深うして、頭は、ボンヤリとし、視覚は朦々たるに及んで『これア君、川中島ぢや』『さうだ、相對峙して雌雄決せずか』『フツツ、よく強いもの同士が、ブツかつたものぢやのう』『左様く』

○信玄と謙信とは、互に褒め合つて、やつとこのこと——幕。

易
小 岡
阪 村
介 石

トルストイ原著

で、とても其れで毀はす事は出来
さらになかつた。
不圖、彼は誰か山を下りて来る

社會的にはこの節の如く一般人心の緊縮、甚しきは悲觀的氣分を誘發し、經濟界不振の導因を爲すものであります。従つて陰性大氣の

木本氏をいぢめる。
○スルト木本氏、「殘念々々、さア今度け、モトへ還元ぢや」と
基盤を抱へ出す。しまひには、基

トルストイ原著 高架索の囚人

(その一節)

瀨野馬熊譯

(朝鮮史編修會)

易

一 阪 明 石 介

ユリアヌはリナの返事は到底得られないものと詮らめて、切りに寢氣を催して來た。と不意に二、三の土塊が彼の頭の上に落ちてきたので彼は驚いて立上つた。彼は目を擧げて穴の入口を見たが其處に長い竿が上から降りて來るのを發見した。

彼は大喜びで其の竿を掴み、そうして夫れを自分の方に引張つた。それは強く且つ丈夫な竿で、二三日前彼がアブダルの家の屋根に見たものだった。

彼は再び穴の入口を見上げた。と、其處にはリナの眼が恰も猫の夫れの様に光つてゐた。彼女は尙ほ前方へ腰を屈がめて穴の中を覗き込み、低い聲で、チョイトくと云つて彼れに呼びかけたが、更に大きな聲をしない様にと手眞似で合圖をした。村の人々は去つて仕舞つた。今村の中には但だ二人の人が残つて居るばかりだから逃げ出すなら今のうちだよ。

これを聞いたユリアヌは直ぐに彼の仲間の方を振向いて、「さあ來い、コスチルヌ、我々はもう一度逃走をやらさう、俺は出來るだけお前を助すけてやるよ」と云つたがコスチルヌは夫れに答へて

いつた。

此處から逃れ去ると云ふ事は俺はもう斷じてやらない。俺は俺の身體を動かす程の力さへもないのにどうして逃走する事が出來るものかと云つたので、ユリアヌも詮らめ、「そうか、それなら仕方が無い、分かれやう、さよなら」と云ひつゝ、彼れは彼の仲間に接吻した。それから其の棒を掴み、しつかり抑へて居る様にとリナに告げ徐かにそれを昇り始めたけれども足枷の爲に動作をさまざまげられて二度も墜落した。

終に彼はコスチルヌの肩に足をふみかけてやつと穴の端に達したが、リナは彼のシャツの襟をしつかり掴んで、彼女の小さい手出來るだけの力を込めやうやく彼を引上げた。穴の縁に達した所でユリアヌは棒を引き上げつゝ、リナに云つた。「其の竿を元の所に歸して置きなさい。もし此の儘にして置いたら、お前内の人々から打ぐりつけられるだらう。リナは早速其の棒を引ずつて去つたのでユリアヌも山を横切つて去つた。彼は谷の入口に達した時に、尖つた石を拾ひ上げて足枷の錠前を叩いた。けれど錠前は非常に堅固

で、とても其れで破はす事は出來さうになかつた。
不圖、彼は誰か山を下りて來る物音を聞いたが、よく見るとそれはリナであつた。

彼女は彼れに向つて、「其の石を私に貸しなさい。」と云ひつゝ、其處に蹶まつて頻に錠前を叩き切めた。併し彼女の指は柳の枝より細く、到底目的を達し得られさうに無かつたので、彼女は到頭石を投げ捨て、泣き出した。ユリアヌは死物狂になつて錠前を叩き切めたがその間リナは彼の肩に彼女の手を置き、彼の上に身體を屈めて居た。

ユリアヌは不圖振返つて天の一方が非常に明るくなつて來たのを見た。それは今、月が昇らんとするのを表はして居るので、月が昇る前に俺はどうしてもあの谷を横切つて、森の中にはいらねばならぬと彼れ考へ、彼は石を投げ捨て、立上り、遂に彼の足に足枷を纏めた儘で出かける準備を爲した。彼は言つた。

「リナよ、さよなら、私は私の生命の有らん限りは、決してお前を忘れない」、其の時リナはちよつと彼を止めて彼のポケットに手を入れたので、ユリアヌは探つて見ると其處には數箇の菓子が入れて有つた。「有難ふ、實にお前は思慮の深い人だ、もうこの後はお前に人形を作つてやる者も無いだらう」と言ひつゝ、ユリアヌはリナの頭に接吻した。リナは彼女の手で涙の顔を掩ひ其の儘若い山羊の様な活潑な見振りで、小山の方に駆け去つてしまつた。
彼女の身体に付けて居る鈴を暗闇の中に鳴らしつゝ。

良い酒好かれる酒

清水武紀

(總督府殖産局)

【五六】

朝鮮の酒造業も近年異數の發達をなし、製造場は舊來の家内工業から工場組織となり、一ヶ年數十石、價格にして拾數萬圓を牽する様なものが出来たのである。

従つて其製造型式も化學的に工業化し、品質も以前のものと大分其趣を異にする様になつたのである。

即ち化學的に云つて其品質が向上せられたことは勿論であるが、扱て其れが一般の嗜好に適合して居るや否や、即ち良くはなつたが一般愛飲家に好かれるか如何かは別問題であるのである。

其れで本年三月中私が各地の酒を啣いて廻つた結果、酒質が何んな風に變つて居るか、亦た地方的に何んな酒が喜ばれるか、又將來如何な風に進んで行くものかを想像して見る事も無駄でないと思ふので左に記して見る。

先づ第一に全北の酒は色相淡く酒精分は相當強くシツカリして来たやうであるが、一般には尙濃厚で甘過ぎのものがある様である。

第二に慶北では改良酒母を使用する結果、酒質淡泊で清酒に近似したものが多くなつたが、矢張り濃甘のものが相當にある様である。

第三慶南の馬山、威安方面の酒は一般に尙濃厚で、特に甘口の酒が多く濃色のものが多いやうである最後に京仁の酒は消費者が都會人で嗜好も高いと云ふ關係もあり、

色は淡麗で酒質淡泊、輕口のもものが多く、殊に仁川の或る種の如き殆んど内地清酒と違くないのであるが一面には過酸や多甘のものあり、亦殊更内地酒に似せる爲却つて藥酒特有の風味を失つた様なものもないではない。

要之大体として酒の色は段々淡くなり酒質は淡泊になりつゝある様であるが、矢張り相當甘いものでなければ萬人向がせめらしく考へらるゝのである。

從來朝鮮の藥酒には酸と苦味は付物で色の濃淡など問題でないと云かれて居たのである。而して品評會(之も最近流行して來たのであるが)に出品するものの特に旨くなければならぬと誤解し、無暗に甘く作り上げ得意で出品すると云ふ様な傾向があるのであるが、元來酒具ものは嗜好品とは云へ元々致醉飲料であつて、調味料ではないから内地の味淋の様に甘かつたら到底酔ふまで飲む事は出來ず若し又我慢して飲めば悪酔してトテモ遣り切れるものではない。

其れで永い間の慣習で多分の酸のあることは致方なく殊に甘味のある越幾斯分の多い酒としては相當の酸の存在は寧ろ必要ではあるが、あまり多いのは衛生上にも亦よい事とは云へない。次に苦味がなくてはならぬと云ふのは寧ろ負惜みで斷然排斥すべきものと思ふのである。

それで將來一般の嗜好に適合する酒は何んと云つても結局内地清酒式のもので而かも相當味のあるものでなければならぬ、即ち色濃過ぎず相當の酒精分あり、酸多過ぎず、クドキ甘味なく、後口爽かなるものを上戸向とし、甘味多く糖分酸あり苦味なき味淋式のものを下戸向として歡迎すると思ふのである。

勿論嗜好の點から云つて相當曲子の風味を持つことが必要であるが、其の風味も從來のやうに半腐敗した曲子から来るムレ香とか粗白米から来る黒砂糖式のクドキ甘味とかは段々排斥すべきものと思ふので、其の製造に當つては改良曲子の使用、原料米の精糞、酒母の應用等により生産費の節約と酒の耐久力を増進することに努力せねばならぬ。

現に仁川や慶北方面で改良式により製造せられたものは三月や半年は變味する事なく平氣で貯藏し得る様になり、今迄夏季には藥酒は絶對に飲むことが出來ぬものとして止むを得ず燒酎やウキスキーなどを飲んで居たのであるが之れが如何時でも朝鮮固有の風味ある優良酒を飲むことが出来る様になつたと云ふことは一般上戸黨の爲大に祝福する次第である。

峰岸清之氏主宰

拓務評論

事務所 京城府
南米倉町二〇五

牛の傳説

昔し下界の山が高さを増さなく成つて、人間は天上界へ出る方法に困つた。其時に牛が来て角を出

一、船に停泊して、特に口の酒が
多く濃色のものが多いやうである
最後に京仁の酒は消費者が都會人
で嗜好も高いと云ふ關係もあり、

よい事と云ふたし、
なくてはならぬと云ふのは寧ろ負
惜みで斷然排斥すべきものと思ふ
のである。

南米倉町二〇五

牛の傳説

鈴木竹磨

(總督府殖産局)

農業と牧畜とは人文發展の基を爲してゐるは争はれない事實であつて、牧畜と云へば馬と牛とを聯想する。然し馬と牛とは其形態、性質を異にする如く、由來戰爭には馬が附物で牧畜には牛が附物である。碧空を仰いで高嘶するは肥馬の領域、若芽を友に春の霞に眠るは牛である。牛は従順、温和の物語に富み、馬は勇敢、勁猛、華麗の談話に富む。

されば縁起物語の聖者は牛に乗り、國家盛衰の物語の英雄は馬に乗る。牛は女性的で、馬は男性的である。今自然傳に就て牛の物語りを述ふるは、春陽若葉の時節には無益の事でもあるまい。

◎瑞西の傳説。天地創造と牛の由來

神は先づ天地を造つて人間を造つた、それから人間の爲に種々の動物を造つた、悪魔も亦神に似て羊と山羊と牛を造つた。併し悪魔の造つた動物は、凡そ赤とか白とか黒とかの單一色に限られてゐた。悪魔は亦人間を苦しむるため種々の昆蟲毒蟲を造つた、扱て或暑い夏の日のごと、悪魔の晝寝して居るのを幸に、これ等の昆蟲共が集つて牛に悪戯をした。神は其様を見給ひて、牛を助ける爲に牛屋を建て、更に柳樹の枝を折つて牛の身體を磨擦し玉ふた。すると今迄單一色であつた牛は、忽ち變じて斑點を生じた。其時眼を覺ま

した悪魔共は、此斑色の牛を見た時自分の造つたものたることを知り得なかつたので神に取られて仕舞ふた。さうして悪魔共は残りの單一色の牛ばかりを引連れて去つた。

◎安南地方の傳説。牛に上齒のない由來

昔、牛には上下の齒があつて、馬にはそれが無かつた。或時牛がグデン／＼に酔拂つて宴會からの歸り途に不圖馬と出會つた。馬は牛の酔つた振りが羨ましくなつて自分も宴會へ行きたいから暫く上齒を貸して呉れと頼んだ。牛は溫和しいから馬の言ふまゝに上齒を貸してやると、馬は其儘其齒を返さなかつた。牛が請求をすると自分と競争をして勝つたら返してやらうと言つた。牛は逆も馬と競争をして勝てる譯がないから其儘泣き入りとなつてとう／＼牛の齒は取られて今日でも牛に上齒がないのである。

是れと同じ様な傳説が錫蘭島にもある。

昔、馬の頭には角があつて上齒がなく、牛には上齒と下齒とある代りに角が無つた。牛は馬を見て羨ましがり、馬は牛の上齒が欲しかつた。そこで互に相談をして角と上齒との交換をした。それで今日の様な馬と牛とが出来上つた。

◎暹米利加印度の傳説。角の曲つた由來

昔し下界の山が高さを増さなく成つて、人間は天上界へ出る方法に困つた。其時に牛が来て角を出してくれたので人間は牛の角を傳つて上界へ出ることが出来た。その人間の重さで、是れまで眞直であつた牛の角は内側に曲つた。

◎北印度の傳説。牛の蹄の割れた由來

ある仙人が獵に行つて鹿を射る積りで誤つて牛の蹄を射た。傷は治つたけれども其時から牛の蹄は割れて仕舞ふた。

◎獨逸の傳説。牛の歩みの遅い所以

人間が牛の力の強いのを利用して、無暗に重い荷物を背負はせた牛は重いながら黙つて背負つて歩いたが、何時休ませて貰へるか人間に尋ねた。すると人間は『何時になつたつて休ませるものか。死ぬまで働けば宜いのだ』と答へた。

牛はそれを聞いて『それならモウ急ぐまい。早くても遅くても同じ事だ』と不平を言つた。けれども根が正直だから怒ることもせず澁々ながら歩いたから、其歩みが遅くなつた。

先づ以上で牛の解剖的原理が了解になりましたらう。

菊池長風氏著

朝鮮雜記

全十卷完成
冊書圓半

五月下旬第一卷
發行、以後三ヶ月毎に續卷配本

掘出物語

徳野眞士

(朝鮮鑛業會)

【三八】

裏面は雲に蓋の繪であるが、その虎のくるくるとした丸い眼玉が如何にも飄逸な姿態で紙筆に盡し難き妙味がある。素朴な處、無邪氣な處、李朝陶器の特色を遺憾なく發揮した逸品である。これは富田美術館にあつたものを大阪の山中骨董店が引き受けた際、住井氏が懇請して朝鮮に止められたものである。爾來虎壺も龍壺も出るが、あの品に匹敵すべきものは出ぬ。

今一つは徳利である。李朝の徳利は金一圓を投ずれば今でも澤山ある。しかし住井氏の徳利は決してたゞの徳利ではない。硝子戸越しの目測直径八寸位、高さ一尺三四寸の型は平凡なものであるが、その模様は曾て類例なきものである。即ち菊花と蘭の繪模様、辰砂と鐵砂と桑附の併用で、白い花などは浮き模様になつて居る。地肌全體にはほんのりと時代がついて萬遍なく鉄入がいつて居る。この鉄入の味ひがまた陶器愛玩家の間にやかましいもので、人爲的にどうすることも出来ぬ處に言外の妙味が存するのである。

この徳利は誰れかオモニーから二三圓で買ったものを、黄金町の道具屋が二十圓で買ひとり、それを南山町の鈴木骨董店主が百圓で買ひ、住井氏が鈴木から四百五十圓で買ったものである。二圓の品が二三日中に四百五十圓になつたのであるから、骨董屋から見れば堀り出しであるが、なるほど住井氏から云へば放り込みである。私は昨年開城でこんな話を聞いた。それは朝鮮人が一つの小さい瓶を持ち廻つて居た處に偶然住井氏が行き合せ、よし買ったと四百五十圓を抛り出し、賣り人の方がしばらくぼかんと居た。

李朝の逸品

朝鮮の陶器愛蔵家として、又素人鑑識家の第一人者として、自他ともに許せるは住井辰男氏であらう。住井氏は素人の夢中で品物に惚れる時代を、既に三年も五年も昔に卒業して、所蔵品の一部を整理し、今や春雨のしとくと降る宵を、香を焚き茶を點じて、靜かに青磁の肌色に底しれぬ深さを感じ、古代藝術家の描ける一線一點に、支妙不可思議の力を味得するの境地に到達して居る。

けれども、如何に住井氏でも初めからさうではなかつた。昨今のやうな、閑寂境に安住するまでには、随分と手當り次第に品物を買つたものである。京城の骨董屋連から『良い旦那』にされて居たのである。と云ふよりもむしろ住井氏自身が彼等の所謂『良い旦那』になつてやつて居たのである。

住井氏の買ひ振りは我々階級の者とは聊かその軌を異にして居る。我々のやうに、あわよくば堀り出してやらうと云ふケチな者は微塵もない。自分がよい品だと思へば思ひ切つた値段で買つてやる。賣つた方ではうまくしてやつたと思つて居るかも知れぬが、買った當人はすこしも後悔して居らぬ。どちらがうまくしてやつたのか見當がつかぬことになる。しかしかくして李朝と高麗朝の優秀な品は住

井氏の手にとん／＼蒐集された。

三年後、五年後、住井氏の所蔵品は骨董屋の豫期しなかつた價值を生んだ。換言すれば、住井氏がうまくしてやられた品が、その後はその倍額を出しても入手することが出来ぬやうになつた。かうなつては古代藝術品の價值は全く絶對的である。住井氏が五百圓で買ったものを今日では千圓で買ひたいと思つても不可能である。うんと儲けた筈の骨董屋が今頃後悔し、進んで骨董屋に奉公してやつた住井氏が涼しい顔をして、物質的價值を超越した崇高至妙の藝術品を愛撫して、日中は數字と取引きに疲れた頭を、朝夕は數千年の昔にもつていつて、靜かに／＼冥想三昧に耽つて居るのである。

私はまだ住井氏の邸にお伺ひしてその愛蔵品を拜見するの光榮に浴せぬ。しかし近い内にこの希望は是非達したいと思つて居る。いつやら住井氏に『何か堀出し物語りの材料になるやうなお話はありませぬか』とおきくしたら、『私には一品も堀り出し物はない、みな先方へ放り込みもの許りです』と呵々大笑されたが、全くそれは事實である。或る意味から云ふと京城の相場は住井氏が格附してゐるやうなものである。

私は昨秋の朝鮮博覽會で住井氏の愛蔵品を二つ見た。その一は辰砂の虎壺である。表面は竹に虎、

將終盤の話

て見物の助言は是非なき事ながら迷惑は一滴りでない。序に策戦を誤つた私は悪戦苦闘して他人の助言には耳も藉さず、考へては指し

將 終盤の話

辻繁之助

(京城、將棋六段)

ちらがうまくしてやつたのが目當
がつかぬことになる。しかしかく
して李朝と高麗朝の優秀な品は住

私は昨秋の東洋博覧會で日本
の愛蔵品を二つ見た。その一は辰
砂の虎壺である。表面は竹に虎、

五十圓を抛り出し、賣り人の方が
しばらくぼかんとして居たと。

將棋の指手を大別して初盤、中盤、終盤と三ツに別けて居る。そして初盤とは双方が策戦を凝し飛角の位置や王の圍ひ場を定め攻撃の準備を爲す間の事であつて、中盤は互に攻防の術を盡し敵の陣營を破らんとする時を云ひ、終盤になると寄せ手をいふのであつて即ち王が詰むか詰まぬかの界目の時の事でありませう。そして其の何れに於ても一手を誤る時は忽ち苦戦に陥るはいふまでもないが、取り分け終盤に近い時の誤は取り返しは出来難い。それは初盤の内は双方手駒少く殆んど全部の駒が盤上に對峙して互に動靜を窺ふて居る間の事故に其の變化も全局に涉つて極めて廣いものであるが、終盤に近づくと及んで追々變化も切詰め各々狙ふ所は王の近邊なれば從つて範圍も狭くそれだけに指し損じた時の償がつき難いのであります。よく初心者の將棋で初盤の間中々旨まく堂々の陣を張つて居るが、終盤に至つては一方は成るべく王を詰まぬ様に攻め、其れに對して又一方は成るべく王を詰む方に逃げて勝敗は容易に決せず棋勢は一手毎に轉換して居るのをしばしば見受ける。テ將棋は詰手の早いのと逃げ方の上手なのとは共に大きい強味と云はねばならぬ飛車や角を切つて金銀の二三枚も打捨て最後に桂馬の隙し詰め等は側で見ても居ても氣持のよいもので

ある。又敵は王の逃げ方巧妙なる爲めに歩一ツ足らぬとか云ふて負ける時などは實に残念なものである。素人の人はそう云ふ場合とか又は詰められても突歩詰めで負けた時などは負けた事は肯定しても相手の強いと云ふ事には否定して容易に甲を腕がぬのも無理からぬ事と思ふ。そこで詰手と逃げ方の妙味を二三擧げて解説したいと思ふ。

○

が其前にある實戰に伴ふた面白い話を少し計り書かして貰ふ。別圖に示した如く其れは私と大阪の藤内六段とがまだ共に五段の時であるが、將棋の遊歴を思立つて大阪から伊豫松山に行く途中船中にて指した際に現れた局面であつて敵の手に銀と歩があり私の手に香車と歩が三ツしか無いのです。詰まぬ事は(第一圖變化参照)當然であるが、其時の私は何とかして一步を得るか又は敵に手駒の銀を他に使はず手段はなきものかと沈思黙考、殆んど一時間にも及んだ事せう。然し相手もさる者で手駒の銀はなか／＼使はぬのみか私に入用な歩は一ツも呉れず徐々に攻める。其の結果は終に私の負けとなりました。所が丁度其船に乗り合せてた好棋家らしく初めから私等の將棋を見物して居た四五人が指手の進むにつれてポツ／＼と助言が始まつた。船中將棋の常とし

て見物の助言は是非なき事ながら迷惑は一滴りでない。序に策戦を誤つた私は悪戦苦闘して他人の助言には耳も藉さず、考へては指し指しては考へるが頗勢を挽回する事が出来ない。そして圖面の所に到達せる頃には助言の八釜し事双方の一手毎に非難がある。遂には助言者に對して又助言する者が出来て助言者全志の激論となり。其れが何れも未知な人計りの寄せひと見えて自己の主張は容易に曲げぬが、お説は皆揃つて二三ヶ月前に棋道を覺えた人らしい。それでも流石に先の手に對しては余りに深く立ち入らなかつたのは私等の緊張味と慎重な態度に多少の速慮をして下さつたものと見える。所でその時私の思案が余り長かつたので余程頭の悪い奴と見切られたのかさしも喧しい助言者も一人減り二人減りして残るは第一の助言者唯一人、これは最も私鼻負と見えて是非共私に勝を得さ／＼ん爲めにあなたの手に香車があるではないかと注意して呉れて尙其上に將棋は側で見ても居ればよく見えるが指す人は判らぬものらしいなどが附言までして呉れたのは有難いがそれが濟んで第二局目を指さんとした時その助言者から今度自分指すと云ひ出した。己むを得ずそれではと私が盤を向けたが助言者には負た私では御意に叶はぬらしい。挑戦を藤内氏になして早や駒を並べて居る。負けた私はそのままで味方であつた筈の助言者の爲めに大に輕蔑せられた上に相手まで占領された譯である。私は頭を掻いて控へる他ない。微笑して迎へた藤内氏はこの助言者を如何して遇らふたかが又面白い。手合は勿論平手である。助言者の指方は

頗る早い。角路を開けて其の隣りに飛車を運んだかと思ふと銀が出る金が出る飛車角が飛出す。皆二筋の一ッ穴から繰り出す。其間相手の駒組がどうあらうとも一向に頓着けないらしい。そして一度穴から出た駒は矢艦に動く。飛車角の往來は實に忙しい。神戸を離れた船は漸く揺れ出した。船に弱い私は酒の酔をかつて轉寢をした爲めに其の將棋の全部を見る事は出来なかつたが程程目覚めた時は早や幡州難も過ぎたらしく硝子越しの海は星月夜で青く黒かつた。

さて御兩所は如何にと見ればまだ指して居る。いつの間にか最初の激論家二人も加つてなかく賑かである。早速私は何番目ですかと尋ねればまだ初番だといふ。それでは私は深く寝入らなかつたかと獨言すれば三四時間は寝たとの事さては助言の先生こつびどくやられたなと思ひつゝ側に寄れば御當人案外平氣で居る。只助言者が無言者となつた丈で駒の動き方の早さは以前と少しも變りがない。左隅に固めた藤内氏の王には金銀と成角を以て備つて居る。其他の駒は殆ど無言者の所有である。攻撃はそれまでに幾度か續けられたものらしいが、今度のは特に厳しいと見えて總攻撃である。手段は損害を顧みず施す。そして手駒の全部を蕩盡して尙ほ藤内氏の王が泰然たる時、件の先生茫然として此の將棋は負けて置きますとて二番目の駒を並べ初める。藤内氏は黙つて盤を私に譲つた。そこで助言者も漸く私と指す氣になつたらしい。負けた同志で一番といふ然し角一枚を引いて呉れとの事に私は成るべく駒の勘い方が得意ですと答へて六枚落で失敬して三盤

棒に投げた。勝負は早い十分で一番は片付く。側では藤内氏例の激論家に將棋は平手で指すよりも駒を下して指す方が敵に奪られる心配が少くて指し易いものであると眞面目な顔で話して居る。駒を投じて啞然たる助言者も成程そうかも知れぬと共鳴する。船中は至極平和の中に高濱に着く。翌日は松山の強剛石田四段との初手合に第二圖を得る事が出来たのであります。



- (第一圖) 二五香、二三歩、二二歩、一一王、二二歩、同王、二三香なる、一一王、一二歩、同銀、二二金にて詰む
- 二五香、二三銀、二三歩、一一王、一二歩、同銀、二二歩なる、同銀、一二歩、同王、二三香なる、一一王、一二歩、同銀、二二金にて詰む
- (第二圖) 一二歩、二二王、四一飛ならず、三二歩、一二歩なる、同王、三二飛ならず、二一銀、二三桂、同歩、一二歩、二二王、三三桂なる、同銀、一

一飛なるにて詰むが、詰方四一飛ならずの時に王方三二桂と打てば詰方は後に歩切れとなつて詰みませぬ。
四一飛なる、二三銀、二三桂、同歩、一二歩、二三王、三三桂なる、同銀、一一飛なるにて詰むが、王方二銀の所三二歩と打てば後に打歩詰めとなつて詰みませぬ。
故に第一圖では王方に銀のある時は詰める事が出来ず。第二圖では王方に銀と桂と歩の間駒がある限り、其れを巧妙に使へば絶対に詰がないのであります。

◆靴が啼く話

漢 江 漁 郎

○山田新一氏の靴……歩むたびに、キョックと、素破らしい音色を出して啼く。
○さだめし巴里仕入れの、高價なものだらうと、畫伯に聞くと、「フツ……」と噴き出した切り何んとも答へない。
○ほのかに聞くと、それは永登浦産の、三越販賣の、低廉無比のこの値一金六圓也の、安靴であつた。
○曾て三越では、安い、先づ店のものに穿かせろといふので若い者に一齊に穿かせた。以來店中いつばいギョックと變な奇聲が起る。
○支店長怪しんで、「どうしたんだ、ハハ、靴か……。若い者としては贅澤ぢやないか」、ソコで、次席が事の次第を説明すると支店長首を縮めて、「フツ……六圓か。六圓ぢやア文句もいへませぬ。」

木の芽

は仰臥して、片膝を立てゝゐる……

ひとり言

永樂町人

櫻

京城の名苑は、殆んど何處へ行つても、櫻である。昌慶苑、南山公園、變忠壇——それから一部の人々に、激賞せらるゝ京城中學の校庭にしても、春は全く櫻花一つで、總括せられてゐる觀がある。櫻は、極東日本の名木である。大にこれを精裁するもよからう。併し觀賞植物は、ヒトリ櫻に限つたものではない。満都の諸名苑をこれ一ツで誇りつゞさうといふのは少し考へモノではあるまいか。私は、二十五年も前、備後の尾ノ浦に客遊したことがある。堂塔寺院の多いところである。そして、面白いと思つたのは、その寺々が、殆んど別々の、翻モノを持つてゐることである。櫻花の寺もある。柳の精舎もある。椿の尼院もある。ツツジの堂宇もある。それ故市民は、好むところに詣ればよい。また幾分盛りの日時も違ふから、今日は櫻を……明日は椿を……と訪ねる利便もある。京城は、一たび櫻が散れば、もう春はないのである。私は、變忠壇などは、萬樹の柳を植えて、これを縁の公園にしたらいゝと思ふ。また南山公園の如きは、椿か、ツツジか、藤花を植えて、紅(紫)の公園にしたらどうかと思ふ。皆さんは、御覽になつたであらうが日比谷のツツジなど、萬更ら悪いものではないのである。

木の芽

瀬戸内海の沿岸では、今ごろを「魚嶋」といひ、もろ／＼の魚介類の、最も豊富な時である。

鯛、鰯、白魚、烏賊、タコ、蛤——中にも最も美味なのは、鯛である。これは、多くは、花見時の「スシ」の中に押せらるるが、その佳味は、關東の鮭と相比肩すると思ふ。鯛は、多く焼物とせられ私の郷里などでは、「酒焼」といひ、勝上第一のものとしてゐる。これを時を同じうして、蔬菜類も、續々市に出て来る。藍、三ツ葉、チサ、豌豆、菊——中にも獨特の境地をもつ「木ノ芽」の芳香は、人の食戸を煽ふること最も甚しい。

私は、少年の日、よく手網をもつて小川を漁つたものである。餅、ハネ、アカモツ、河蟹——春の流れにうかれてゐる。私は、歸來これを「田樂」にしてもらつた。木の芽がフンと来る。その美味は、三十餘年の今、尙ほ忘るゝことが出来ぬ。

禿山論

先日二三の同人と郊外に遊んだ折、何かのことから、禿山論が始まり、甲論乙駁、頗る面白かつた。

甲はいふ……朝鮮の山も、一向青くならないぢやないか。アノ諸土を見よ、まるで山の内臓をつきつけられたやうで、不愉快この上なし……。

乙はいふ……君は、俳味が判らんから困る。山の樹木鬱蒼たるは、よそほひの姿である。脂粉の氣さへ、ソコにあるやうに思はれる。申裸にしてあぐらを組み、或

は仰臥して、片膝を立てゝある……アノ不行儀こそ、我々にはらしいのだ。山よ、朝鮮の山よ。いつまでもマル禿けであれ……。

私は思ふ……森林と雨とは相伴ふものだ。この二つは、互に取合つて、その力を伸ばす。風景としても、茂みと雨とは、これを分つこと出来ぬ。嵐峽なども、雨を得て、いよ／＼日本風景を完成する。一言すれば、内地の風景は、もと／＼『雨中的』のものである。それと反對に、朝鮮の風土は、晴快連日である。一年晴れつゞきだ。コ、に森林の茂生を期することは容易でなく。且つこれは、これで、一つの『晴日風景』『蘇山涸川』を完成してゐると思ふ。優劣をいふべきではなく、始めより全く種目を異にしてゐると思ふ。

小話二つ

昔、吳軍港で、我水兵と英國の水兵とが、綱引きをするのを觀た初めは、力相伯仲してゐたが、遂に我水兵の大勝となつた。

スルト英國水兵、その瞬間一齊に手を擧げて『日本海軍萬歳』今日の野球戦に、この態度が欲しいと思ふ。

或る人『武藏坊辨慶が、楠正成に對して、兵糧米の借用方を申込める書面』といふのを珍蔵す。知人嘲笑して、『それア君、飛んだ時代違ひぢやないか』スルト『馬鹿ッ、それだから面白なんだ』支那には、宋版の大明律といふ謬もある。

今日の好事家の弊は、依然として『物好き』の境地以上、一步も出ぬことであらう。

私は成るべく駒の脚い方が得意ですと答へて六枚落で失敬して三盤

一銀、二三桂、同歩、二二歩、二二王、三三桂なる、同銀、一

六圓か。六圓ぢやア文句もいへない

看板裝飾專門

模
ノ
マ
型
パ
ツ
ト
セ
ツ
塔
宣
傳
手
ア
一
手
特
設
館

早川裝飾工事務所 ☀

早川天望

京 城 府 黃 金 遊 園 內

電 話 本 局 二 四 七 六 番

京報

每日申報

内科 婦人科

今本醫院


(京城旭町一丁目)

院長 今本義胤

二十年来 おなじみの 最上醬油

香味 佳絶 ホシ大ソース

お上品な 料理に 淡口醬油



油醬口淡 油醬上最

永登浦 大塚

昭和四年四月廿五日印刷
昭和五年五月一日發行

本誌定價
一ヶ月(部) 四十五錢
半年分 二圓六十錢
一年分 五圓

京城府和泉町一七〇
發行兼 松本武正
編輯人 石川利夫
印刷所 京城日報社

京城府和泉町一七〇
發行所 京城雜報社
電話 光化門三〇六番

社 眞 福田有造

木浦新報

光州日報

(紙面全く一新)

主筆 大浦貫道

月刊 **心の友**

京城南米倉町
心の友發行所

東京御來遊の際は
御立寄り願ひます

フランス
西洋料理
クワン
支那料理

泰明軒

東京芝區新櫻田町一七

日比谷公園に近く
議院には殊に近し

天下無敵 ほまれそ 美味滋養

キッコーリン醬油



博覧会出品付書出



味で賣れる
キッコーリン醬油
どこのお處所でも
ばれます

キッコーリン醬油
(九升詰) 壹樽御買上毎
に本場生粹生海苔佃煮
一個呈上いたします。
この好機にお忘れなく
御近所の御店で……

東 城 雜 報 (第百三十四號)

大正十三年一月二十九日
昭和五年五月一日發行
(第三種郵便物認可)
(毎月一回一日發行)